

読切ロマンス



似顔
美空ひばり

6月号

読切ロマンス

風流艶笑譚

六月号

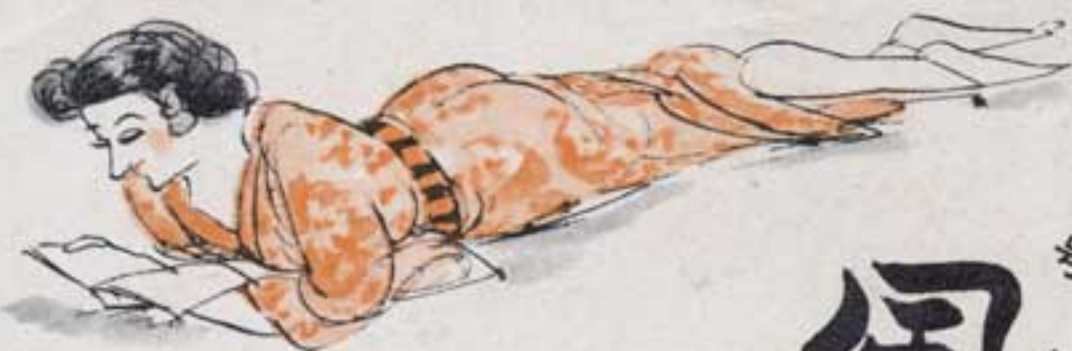
第五卷
第七号



東京・神田・駿河台
睦書房発行

定価
地方定価

九五円
百円



七月号



笑線電車 と云う名の誌

読切ロマンス

パンとカメラで探る

川マークの実態

あらゆる桃色事件はここに芽ばえ、そして成長する。
戦後乱立した連込みホテルの実態をペンとカメラで従横に抉る決定版!!

風流艶笑話

粒よりの艶笑譚をあらゆる職業の人達が話してくれませす。あなたも遠慮せずにつづぐらい話してくれませんか。……
(四〇〇字原稿用紙六枚以内採用 分には謝礼します)

5月25日 全国一斉発売
定価95円 (地方定価100円)

(ドキュメント読物)



しのぎき凡



読切ロマンス 六月号 目次	
風流	艶笑
第一話 流	ゆるふん人生観 科挙女中 夏目小蝶 38
第二話 流	珍景水揚綺譚 実業家 三井高信 53
第三話 流	濃艶なベット・シーン ストリート・バニー マリー・津島 56
第四話 流	一万円の眉と毛布団 岡進平 44
第五話 流	卵が取持つ縁かいな たまご屋 上原市郎 65
第六話 流	踊り子ズロース異変 映画女優 望月優子 59
第七話 流	オイランのせいに非ず 落語家 秋風亭流橋 99
第八話 流	酒のみと助平はお手上げ バスガール 幾野とみよ 114
第九話 流	ハタカ怪快談 映画俳優 小林桂樹 120
第十話 流	此の道抜けられます。 実話作家 尾木草介 127





風流 第廿三話	風流 第廿二話	風流 第廿一話	風流 第廿話	風流 第十九話	風流 第十八話	風流 第十七話	風流 第十六話	風流 第十五話	風流 第十四話	風流 第十三話	風流 第十二話
ソーセージに卵の白身	夜這いの一	花街の医者ともなれば	男にまわしを取られた話	紳士の蒐集癖	あゝ幻滅のベット	洋傘と唄ア天下	旦那の子供かな?	覗かれた夜の女	ストリップ小屋	天晴れな武器	風流女流画家
板前 鹿島清吉	農家 立花咲也	開業医業 南弘明	娼婦 芳谷好子	三助 代々木眸	教授 小松薦夫	傘直し 北村憲	植木職 平井昇	パンパンカール 山田勝子	編集者 大木啓太	外交官 北一郎	閑秀画家 女谷さかえ
124	130	139	84	90	74	41	133	47	80	87	71





第卅四話 風流	第卅三話 風流	第卅二話 風流	第卅一話 風流	第卅話 風流	第廿九話 風流	第廿八話 風流	第廿七話 風流	第廿六話 風流	第廿五話 風流	第廿四話 風流
アジャパー独白	お金か男か？	一人にかぎるお話	童貞膜異常あり	右と左の珍々譚	青春処理の仕方	腰肉学	ツミナ影絵芝居	新々糞尿譚	世界一の便所	強引なお客紳士
読切ロマンス編集長 春日三郎	映画女優 清川虹子	映画俳優 相馬千恵子	元警官 桜田和夫	美容師 笹川アーデン	看護婦 中村由枝	映画俳優 森繁久彌	幫間 式亭とん馬	汲取屋 杉下亀助	カメラマン 檜山義郎	マネキンガール 丘さくら
36	102	96	50	93	136	108	68	62	105	111
										117





青線区域

特集!!

◎青線女給を賭ける丁半ばくち
処女と云う名の売春婦

(二二三
二五四)

記

☆男の子と遊ぶのが悪いの
☆売られた女の手記
☆暴力女給の云い分
☆ボン中毒婦の告白

(二五五
二二八
二四八
二三九)

◎艶笑横丁御案内

(二二二)

扉ひらく魔都東京

(二五一)

青線女を喰うヒモ

(二四八)

売春の街今だ滅びず

(二〇八)

ヒロポンが奏でる人生記

(二三八)

青線区域の横顔

(二五九)

◎女子大生三人を売った偽大学生

(二二七)

私刑(リンチ)

(二六八)

暴力

(二四四)

東京青線地帯

(浅草・新宿・池袋・渋谷
銀座有楽町・新橋・上野)

輪タク屋の内明け話

(二一九)

◎エロシヨウ探訪記

(二三二)

青線区域墮胎の実態

(二五九)

◎アルバイトバン助の生態

(二六三)





(青線区域)

◎ 春本春画作家のプロフィール

☆ ゴム製品拾い屋

☆ エロ写真売り

☆ 湯タンポ売り

青線女給五分間インタビュー

よしやうはんかべのしたばり

特別寄稿

四畳半壁下張

風来山人 二八二

風流郷土史

結婚の奇習

眞田軌用 一四二

埋蔵金物語

大月天外 一五五

シヤカリキ奇談

大鷹五郎 一六八

花電車の今昔話

浜川落雁 一七六

とっておきの話・人に云えない話

一八二

イひものついた布巾

画家 小西 稔

口唄を忘れたカナリヤ

作家 宮下 俊

ハ旦那様御用心

女優 嘉山志津子

ニ女房に云えない若返り法

実業家 野村大悟

ホトンネル開通

ホテル支配人 吉野節二

へ狸に化けた人間

美容師 花村英子

表紙 目次

牧山隆一

漫画アジャパーティ

しのさき 関屋 陸 児

漫画ストリップ

早瀬 二 郎

青線漫景

漫画マンクラブ

特写グラビヤ

駿河 泰 三

◎ 漫画カット・問屋・早瀬二 郎



青春の喜悦

企画構成……春日三郎

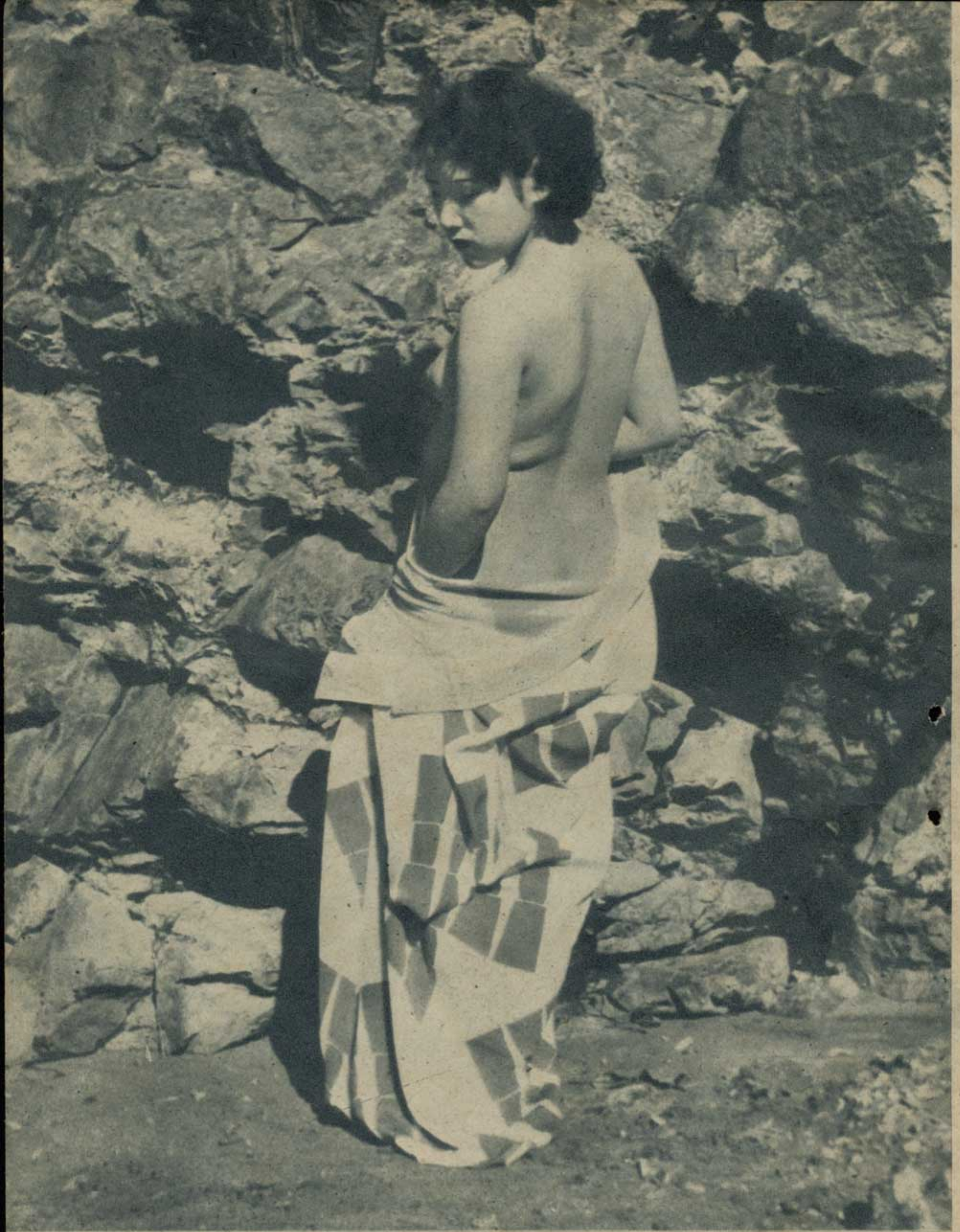
撮 影……小川三吉



とう
上信地国女
四萬温

水ぬるむ北国の春は遅い。然し明るい陽ざしに嬉々として水面に姿を映す乙女表情に何はなし、ホッとした吐息がもれる。





生きることの喜び。岩陰に着衣を脱ぐ乙
女の肢態には青春の夢と希望が満ちあふ
れている





舞場バレー流行

『ワシも仲間に入れて下され』

見た就職案内

新鮮な果
実の如き
ボチャボ
チヤした
あなたは
さしずめ
ようーネ



健康色でいいカラ
ダ。看護婦になる
と病人がたのもし
がりますヨ

美事な肉体をして
ますねオツ
バイとおケ
ッをふるだ
けでお金に
なるとカリ
ッガスリ
るがよるし
か



なん
て背が
高いんで
しょう
大に夫成功します

夏の流行
はミズ



体 格 体 質 か ら

ビヤ樽みた
はいあな
は立振舞
しな居て
むフなく
希臺が
しき屋
るのす

ハツラ
ツと活
的ア活
的なパ
スタは
スガ
すすめ
す

あな
がな
に
い
け
ど
悪
い
け
ど
あ
な
た
に
は
色
気
な
い
で
す
館
も
き
だ
し
生
達
も
き
だ
し
ま
ら
ず
読
書
で
き
ま
す

あな
たは
餅
で
食
慾
を
そ
そ
る
飯
食
店
な
ら
ん
快
す
け
に
働
き
ま
す



があるものか



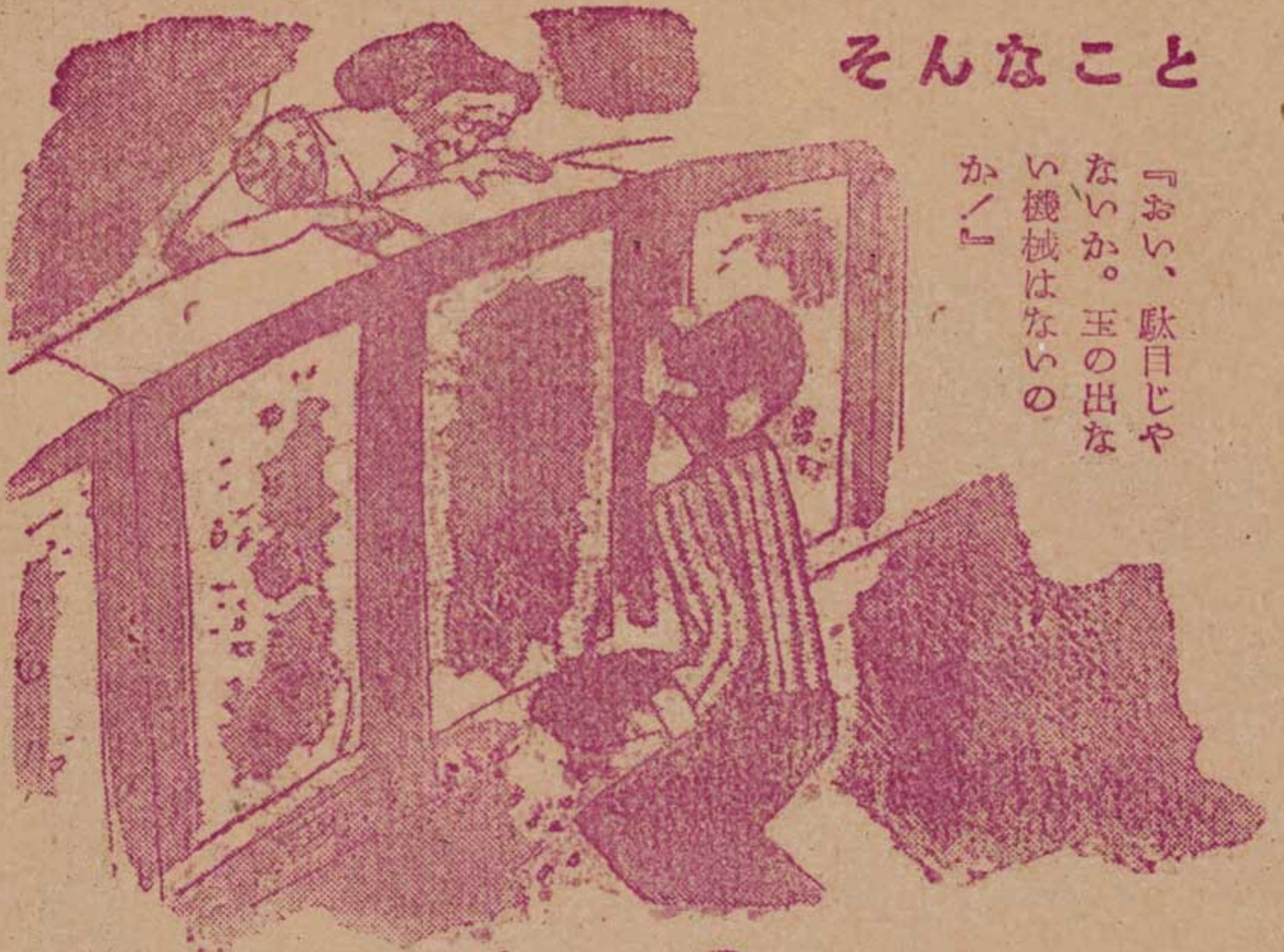
『そんな政府が
建てたのヨ』

『只今のストリップ
ショウは、検察
庁の提供でこ
ざいます』



そんなこと

『おい、駄目じや
ないか。玉の出な
い機械はないの
か！』



『アラロ紅、まアうれ
し、あなたも女にもて
るのネ』



本職よりもうかるアルバイト

「竊徳税吏
さんオツ
心配い。
なるい。
百萬元
は負けた
げる！」

「土曜夫人
さすがはダイ
ストさん、指先の
当りがとてもいい」

「杯屋の女
一テヘツ、雨戸
をしめて下さる
か」



助産婦

『こんどのク
スリは絶對
ヒニンを
保証しき
す。ホオツ
ホホまの
頃には除
たたく
の婦人
で』



チツカリ先生
『承知しました。必ず入学
出来るようにします』



二號
旦那のお手当じや
やつて行けないワ。
アンタボン引にな
つてよ』





観光客「タタミ・ユカタ・フジヤマ……おおコレノミノ」



戒る新婚「早くいらつしやいヨ、ハズカシイことなんかないわヨ」

漫 画

川 開 き

『この辺の鮎は、これ位で
釣れるかね』



ス
ダ
レ

『うるさいネ、屑なんか
無いと云つたら無いわヨ』



六 月

地震・雷・火事・恐妻

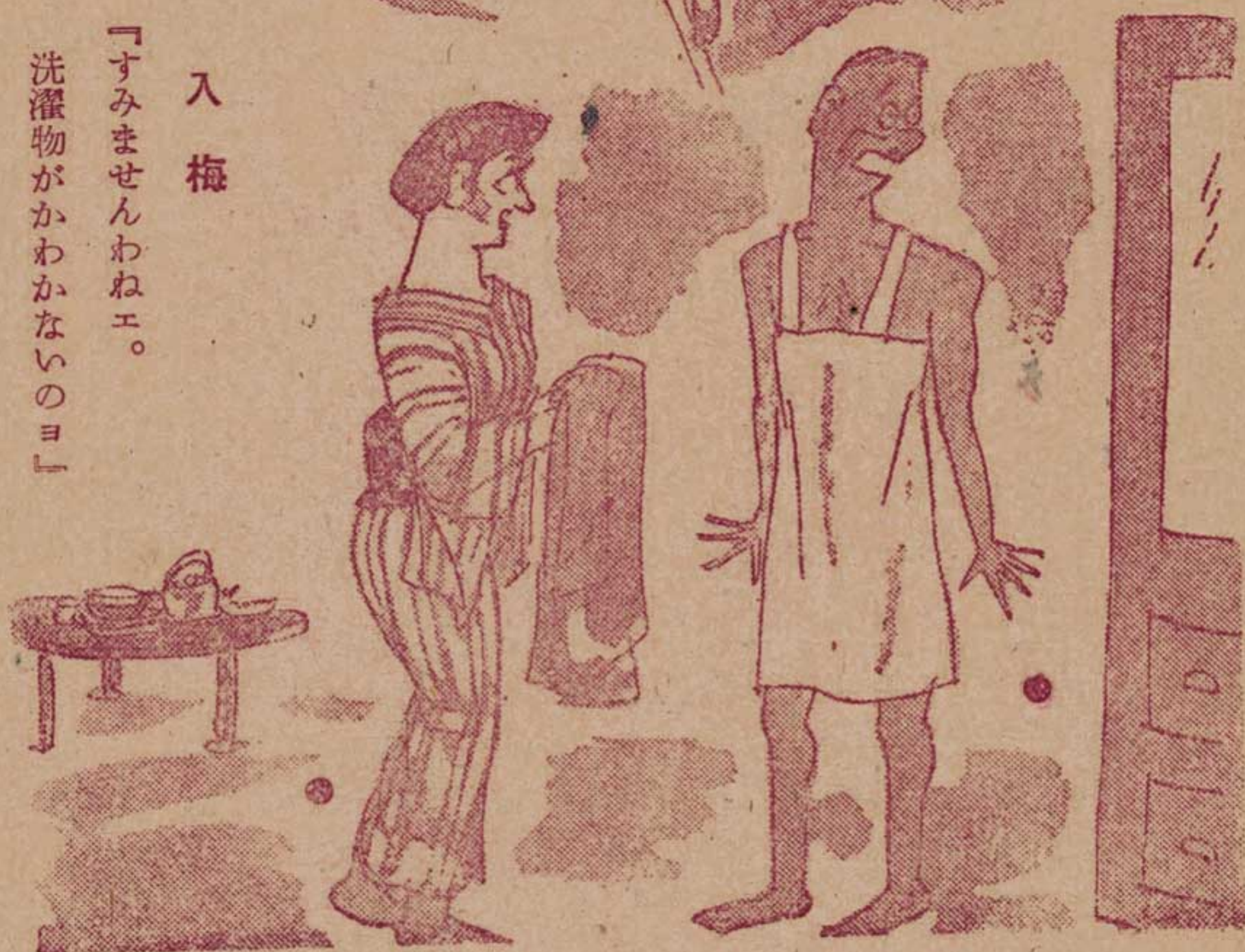
『テヘツ、外も凄い』



入 梅

『すみませんわねエ。

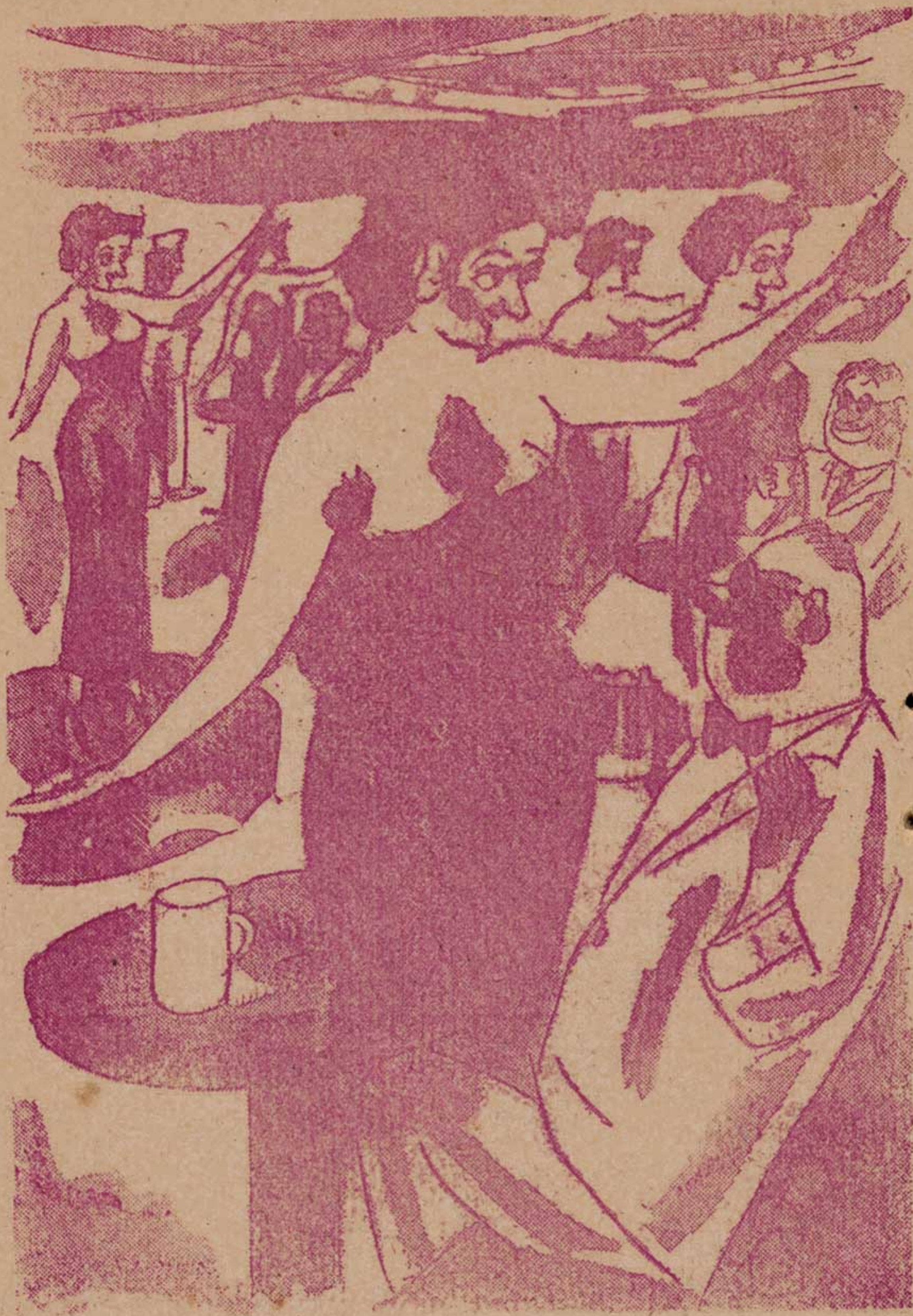
洗濯物がかわかないのヨ』





暴力女給心得

『客引の猛訓練』



立体時代

特殊な眼鏡をかけると彼女がソバに来る

良縁相談



學者タイプの
あなたには8の
女がピッタリで
すが家庭がコチ
コチになるのが
心配でしたらカ
ラダは弱いです
が4になさい。
この如きは絶対
さけること

いい体格ですネ
どうもゼツリン
らしい。
このスキそうな
のをどうぞ

病弱ですネ。4
の弱そうなのが
適当ですが、子
孫のこともあり
ますから、ノン
ビリしたちあた
りがいいじゃな
いですか





ずいぶん鼻の下
 が長いですネ。
 どんなの貫つて
 もあなたは浮氣
 しますヨ。
 1のがつちりし
 たヤリクリ上手
 がよいでしょう
 氣むずかしそう
 ですねあなたは
 6がとても神経
 質でキチヨウメ
 ンです。
 彼女になさい。
 呑氣なあなたに
 は6がよさそう
 ですがあなたの
 ノンビリに益々
 彼女が神経質に
 なるオソレがあ
 る
 3あたりが無難
 でしょう



型 妻 の 恐



ネツチ
型
「知ります
云つてアサ
ワテの方を向いた
らテコでも動かない
せん」と



ガガミ
型
「前年
の事
まで
い出して
命のちぢむ
ような厚でか
らみつく



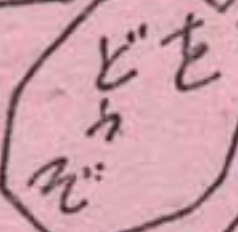
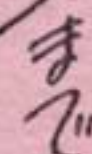
ワルシ
型
「ネタ
リで
上げた
けたり
引ッ
きふ
る暴
力
を
振
いた
つ

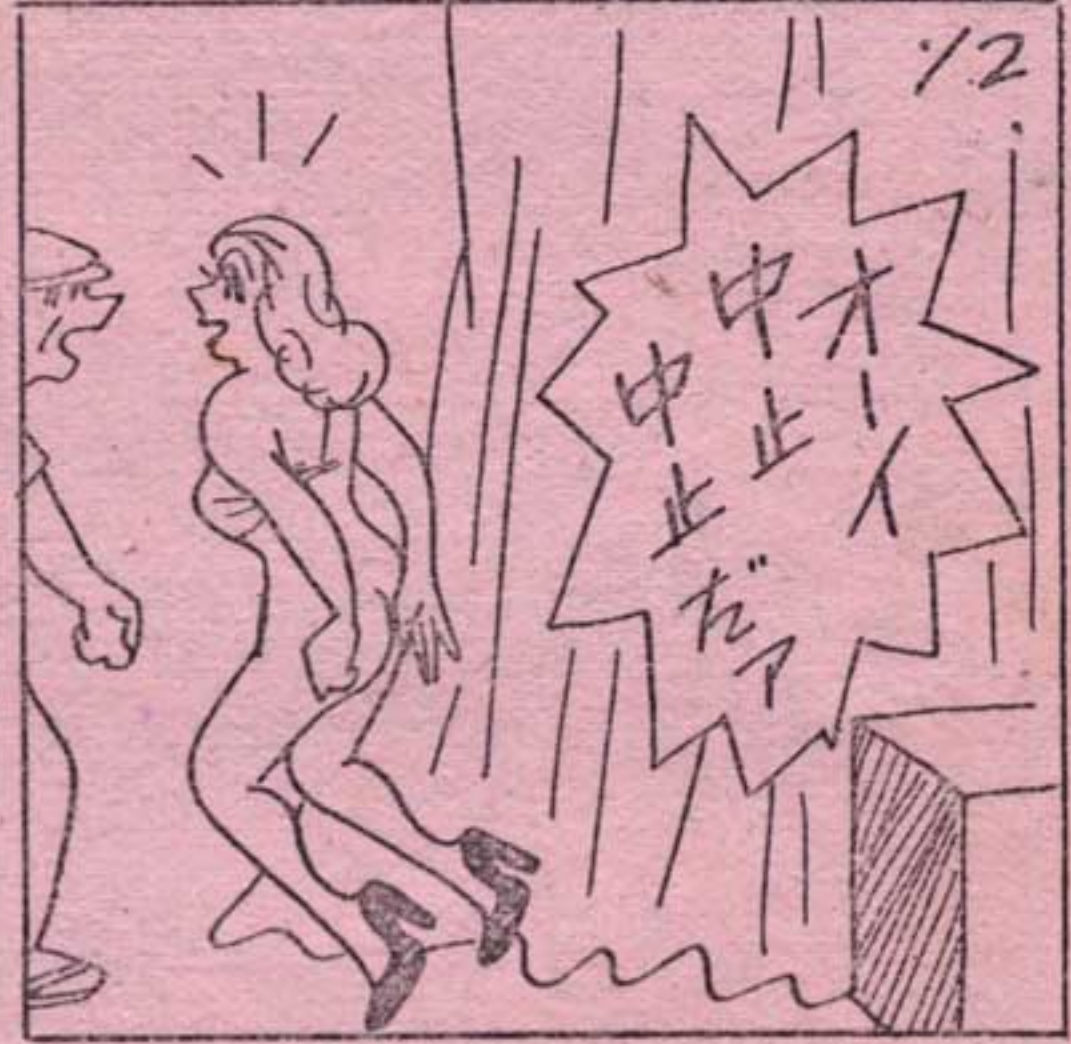
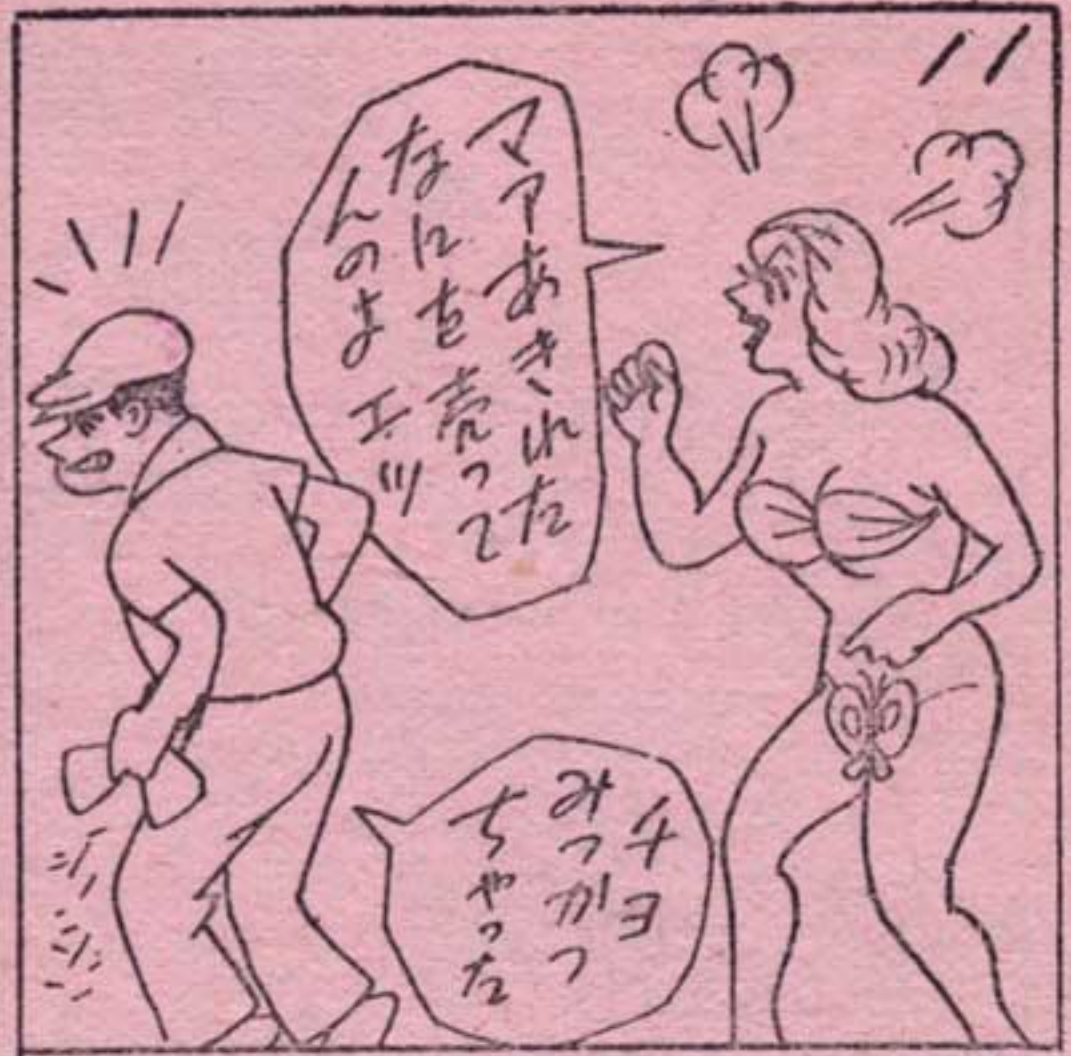


サミダレ
型
「サ
ミダレ
と泣
き
出
す
だけ
だ
が
こ
れ
も
こ
わ
い



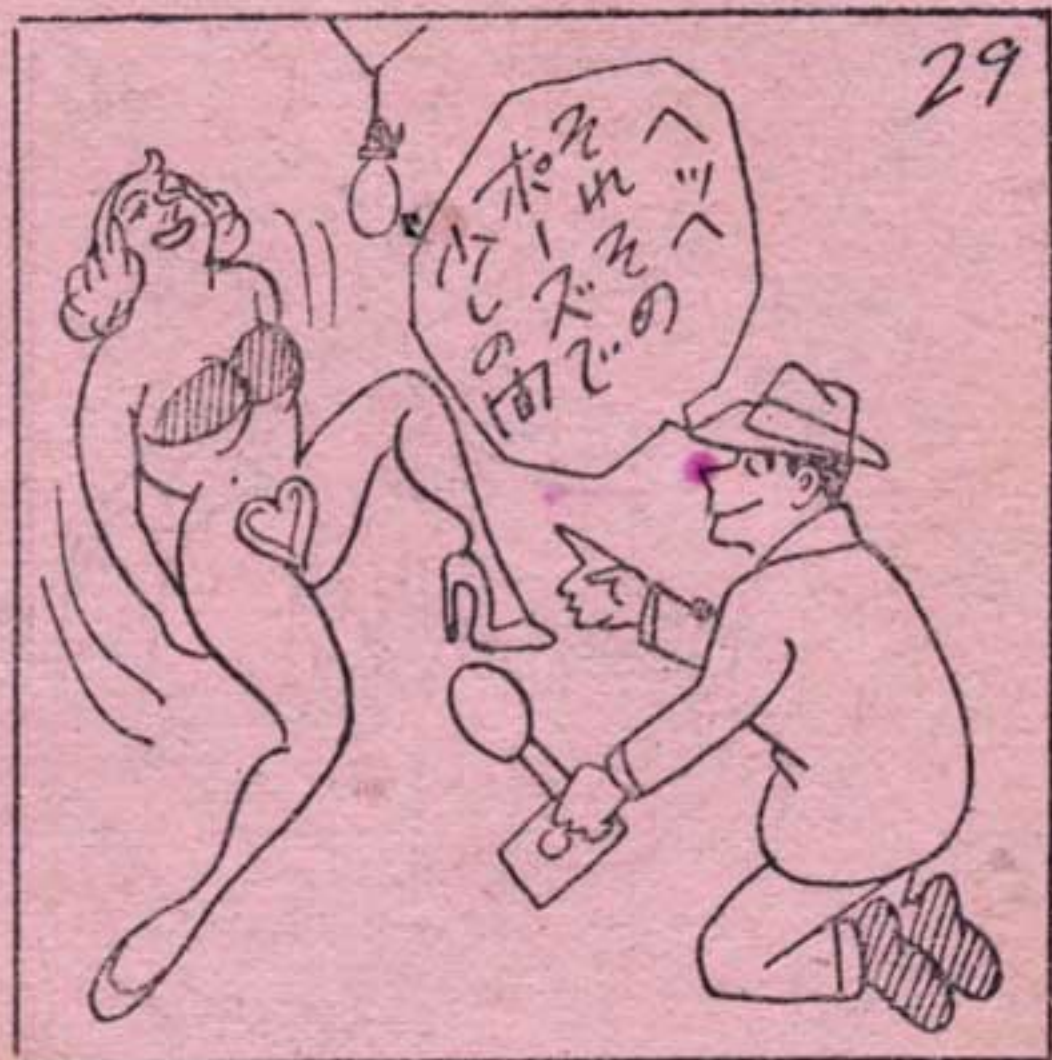
コッソリ
型
「コ
ッソリ
と
持
田
す
ヲ
ギ
ヤ
ノ
を













かくて劇場は人々で 44



47



45



42



446



2343



乗り心地
満点の

笑線電車と云う名の雑誌



読切ロマンス 6月号

アジャパー虫白

春日三郎



『生れたのは四月一日さ』

と云うと相手は必ず

『エッ?』

と聞き返し次の瞬間、フフーン

と鼻で笑つて目を開き、人前もか

まわす

『アツハハ……』

と馬鹿口を開いて笑い出す。

なる程、四月一日は四月馬鹿。
エイプリル・フール

だからつて何もムキになつて漫

画ヤになつた訳じゃない。鏡書房

六十人の各界

名流が筆を揃えて

風流艶笑ばなし

これこそ

あなたの秘蔵本

おせんたく

春日三郎画



の編集室で、暇つぶしに塩田英二郎の真似画を描いてたら閨秀作家で女社長の真杉静枝女史におだてられたのがそもそも漫画やへのなりそめさ。

新夕刊へ投稿して生れて初めて原稿料と云う名のお金をもらつた時は、感謝感激雨あられ……。これで一つぱし漫画家のはしくれになれたと小おどりし有楽町はガード下の漫画集団御愛用の店漫亭と云う飲み屋へ飛び込んだのが又々

漫画家が編集する風流艶笑雑誌「讀切ロマンス」七月号を御期待下さい。

ほどよくお酒のまわつた二次會の席で各界あらゆる人達のつやばなしをじかに聞く楽しさです

何か話せと云われたら
この中のお話をどうぞ

幸運の金的、そこではからずも毎日小学生新聞の記者と相見知り、かくは順調に連載漫画から筆をおこした次第だが……。見たところ今だもつてもたもたとへたな漫画を描いてるところを見ると、未の大成はおぼつかない。まアまア人生

あなたの今日の運勢は？

朝お出かけになる時や、戀人と待ち合はせの時は必ず

その日の運勢を見てみ

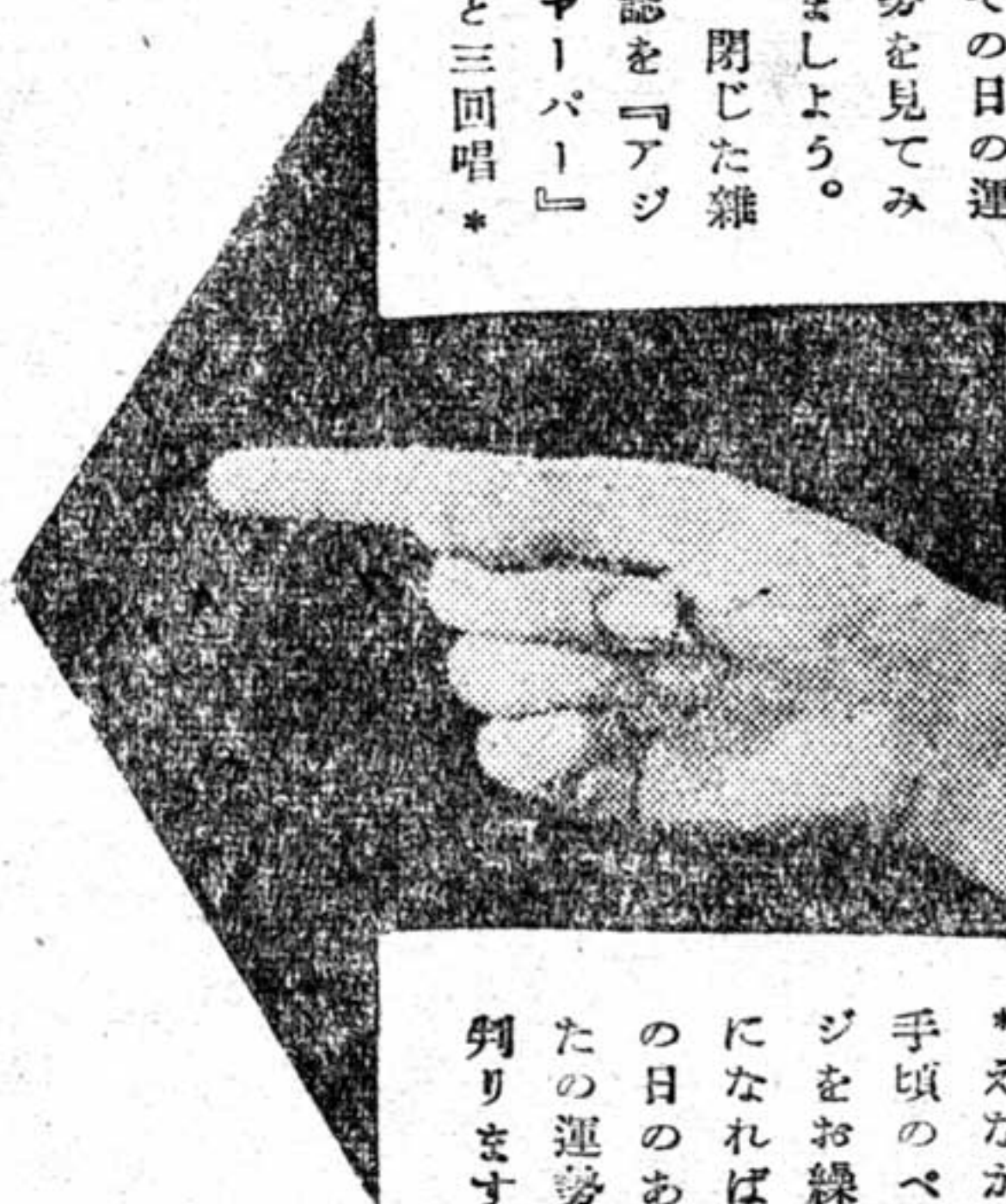
ましよう。

閉じた雑誌を『アジ

ヤーパー』

と三回唱*

と三回唱*



*えながら手頃のペー
ジをお繰り
になればそ
の日のあな
たの運勢が
判ります。



ゆるふん人生觀

夏目小蝶

(料亭の女中)



近ごろ料理屋の女中と申しましても、何もお店のお掃除そうじをしたり、お酒やお料理を運ぶだけの役目ではなく、お酌しやくをしたり、歌の一つも歌つたり、また、スペツシャルサービスをすると言う芸者を兼業けんぎようしたものが多くなつております。

これは勿論もちろん、そうしなければくらしに行けないように出来ているからで、客や女中の罪ばかりではありません。

男と寝る前にはまず
ふんどしを檢查しなさい
と云う話

けれど、私たちは賣春婦ばいしゅふでない限り、蟲の好きなお客は相手にはしません。自分の方で氣に入つたとなれば喜んでサービスしてあげます。

処ところがですね、私はこの商賣に入つて七年になりましたけど、愛してもいいお客、またサービスしてはならないお客を、見分ける奇抜な方法を発見し、それによつてお客に接しているのですが、私の見分け方はほとんど間違まちがいがありません。

それは、お客が遊びたいと言う時には、必ず、『それでは、私の前で、裸踊りはだかおどやつてごらんなさいナ』

と、言うんです。勿論、下着をつけて踊るわけですけど。

私は、この時、必ずお客の下着に注目します。そ



の下着が、汚れているとか、ゆるんでいる場合は、遊ばないことにしているんです。

何故かと申しますとね、昔から「ゆるふん」をつけている男はだらしないとか、汚れた下着をつけている男は働かないとか、申しているでしよう。だから、その下着によつてお客の性格とか生活態度を知ることが出来るんです。

これについて、ずいぶん面白いお話がありますの。去年の秋でしたわ、政治家として現在も、お酒と女が好きで有名なHさんが、その時ある大臣をしていたんです。

その方が、昔なら「おしのび」と言う形でひとりで遊びに参り、私がお相手をしました。お酒がまわるほどにしつつこくなりまして、私にサービスの要求をはじめたんです。

私も、少し酔つていましたので、

『では大臣様、私の前で裸踊りを見せて下さいナ、上手に踊れたら遊びますわよ』

と、大臣を相手に奇抜な注文を出しますと、H大臣は、なかなかの芸人でしたから、
『よし、それでは、俺のストリップを見せてやろうかな』

と、言つて、洋服をぬぎすてました、その時、私はびつくりしてしまいました。大臣は旧式な六尺をしめていましたが、それがおちそうにゆるんで大変汚れているのです。

『まあ、大臣ともあろうものが』

と、私は急にうんざりしてしまいました。よく「緊要一番」と申しますが、国事をあずかる政治家が「ゆるふん」では、心の中のだらしなさも分るような氣がして、私は、踊りなんか見ずに、
『大臣、もう結構よ、私、今夜、お断りするわ』と、答えました。

『おい、俺の踊りが下手だと言うのか』

『いいえ、別な意味で』

『一体、どう言うわけか話して見給へ』

と、執拗に訊ねますので、私は今まで誰れにも話さなかつた「見分け法」を大臣に話して、私の意見を堂々とのべたのです。

すると、大臣は、膝をたたいて、

『うん、君は偉い、ふん』

どしで男の氣持や性格を知るとは実に感心した。なるほど、君の言う通り





「ちや、俺は、仕事も忙しかつたが、実は、この一週間ほど家には帰らず各方面で飲んだりさわいだりして来た、下着がゆるみ汚れているのも当り前のことだ」

と、感心なすつて、その夜、私に高価な反物をプレゼントして下さいました。そしてそれ以来、ずうとひいきにして下さいますがいつもお飲みになると裸踊りをしてきれいできちんとしめた下着を見せて笑っています。

けれど、

『俺の女房は、このごろ下着の洗濯に忙しくよくサービスしてくれるから浮気はやめたよ』

と、言つて、いやらしい遊びはせずに帰つて行きます。

下着を通して見たお客では、お金持ちの年輩の方に限つてだらしがなく、若いサラリーマンたちは、ほとんどきれいなものをつけています。

そして、その人たちに限つて、遊びに溺れると言うことは無いから私の「下着見分け法」と言う奇抜な人生観も一笑にふすことは出来ないと思つていますわ。



○：池袋署では廿八日夜豊島區池袋一の一一四庄司方電気見習工、少年

A(一九)を窃盜容疑で逮

捕したが女のためにやりましたと年にも似合わずの自供に係官を驚かせた

○：事情をきくとこの

七月水戸刑務所を出たが関係していた恋人I子(二

三)が服役中特殊喫茶

店に勤め借金で苦しんで

いるのを知つたAは「よ

し東京で一稼ぎする」と

と上京去る廿四日池袋一の

六四二九桂洋品店から

オーバーなど衣類八點を盗んだのを始め數力所荒

で彼女のところへ……とほくそえんでいた矢先質から足が付き御用となつたもの

○：港區麻布笄町一六八無職吉田裕彦(二二)という男、去る廿三日十一時半ごろ品川區東大崎五の二三先で二人組は現金卅圓を奪われ頭を割られたと届出た。

○：舉動がどうもおかしいので以前の勤務先品川區東大崎五の四宮内ゴム工業株式会社の友人關係を調べたところ、なんと前に同僚の鈴木一雄(二四)さんのレインコートを売り拂つていたことが判り廿九日サギの疑いで逮捕。

○：何故こんな狂言をやつたか——その原因は戀人の平野君子(一七)さんに冷くされたのでナントか同情を買おうとしてヤブヘビになつたわけ



洋傘とカカア天下

北村 憲

(傘直し)



落語の傘直しの才子は
この商賣の人のおたのしみ

つていますので、先づそれからお話しましょう。

四谷の百軒長屋に住んでいた「傘直し」の久七と
言う男が、下町を、

『傘直し、ええ、傘直し』

と言つて歩いていました。すると、一軒の小ぎれ
いな家から呼ばれましたので入つて行きますと、二
十二、三才の若く美しい新造が出て来て、恥かしそ
うに、

『お願い出来るでしょう
か』

と、申しましたので、
『商賣ですから、どんな



「傘直し」と言う商賣は江戸時代からあつたそうで
す。当時は今のように洋傘がありませんでしたから
蛇の目、番傘等の破れの張り替え専門で、傘直し屋
が、

『傘の張り替え』

『傘直し』

などと言いながら町を流して歩いたもんです。
当時の「傘直し」について、落語的な艶笑噺が残



ものでも、お直しします』

と、答えますと、

『では、上つて下さい』

『いいえ、表で直しますから、どうぞ、品物を見せて下さい』

『だつて、まさか、表では、いいから上つて下さい』

と、言われるので、久七が座敷に上りますと、新造が、横になつてひらいて見せたと言ひのす。何をひらいたか、ヘッヘッへ、つまり、世間知らずの新造は、亭主からうつされた病氣を、「傘直し」を「かさ治し」のお医者と間違えたと言ひ一席で。

私だつて、この商賣に入つて、五年にもなりますので、久七的な面白い事件にも色々つぶかつたことがありますな。

傘と言つても、近ごろでは洋傘専門の修繕が多くそれも男持ちのものが、ことに多くなりました。

と、言いますのは、殿方は、お酒を飲む機会が多いために、酔つて、洋傘の骨を折つたり破いたり、また、中には、妻君から洋傘で殴ぐられて、修繕しなければならぬと言ひ場合もタマタマあります。

二ヶ月ほど前のことでした。都營アパートの前を流しておりますと、二階の窓から、

『傘直し屋さん、修繕して下さい』

と、二十七、八の会社員風の男が呼びとめましたので待つていますと、二階からびつこをひきながら下りて来て、骨が四本も折れた洋傘を差出しました。『旦那、ずいぶん折れましたね。何か乱暴でもしたんでしよう』

と、訊ねますと、その人は、てれくさそうに頭をかきながら、

『実はね、昨夜、会社の創立記念日で酔つて帰つて来た処を、女房にこれで殴ぐられたりつかれたりして、この通りだよ』

と、びつこをひいていた左足をまくつて、紫色のアザまで見せました。

『旦那、余りのんで来たためでしょう』

『いや、僕はほとんど飲んだことはなく、共稼ぎをしている女房の方が毎晩飲んで来て、クダをまくんだ。その上、癖が悪くて、全くこまつてゐるんだよ傘屋さん、女房の操縦法はないものかね』

と、その人は、真剣になつて相談して來ました。話によると、妻君は、五つも年上で、カフェーの女給をして互いに働いてゐるのだそうです。

男の方から恋をして迎えた妻君だけに頭が上らず



つねに妻ノロを發揮^{はつ}していることが分りました。

私は、この哀れなる同性に対し、大いに同情すると共に、妻君の横暴^{わうぼう}を憎んで、

『ねえ、旦那、少し奥さんに甘すぎるからいけないんですよ、今度、奥さんが酔つて歸つて來たら、婦人用の傘で逆に毆^うつて、男性の強さを見せてやつてごらんさい、暴力は、男の魅力^{みりき}とも言われているから、奥さんは、うちの人もこんな強い処があつたのかしらんと、反つてたのもしく思いますよ』

と、私は、さかんに勵ましてやりました。

『そうかなあ、よし、思い切つて、一度ためして見よう、弱い男も、いざとなれば強くなれるんだからね』

と、言うわけで、私は百円ほどの修繕代^{しゅうせんだい}をもらつて別れました。

それから、一ヶ月ほどすぎてから、私が、またそのアパート附近を流しておりますと、忘れもしません、同じ二階の窓から、今度は先日^{せんじつ}の妻ノロ氏の妻君と思われる年増美人から、婦人用の骨が三本折れた傘の修繕をたのまれました。

その妻君の顔は毆^うぐられたように、赤くふくれ、額に生傷が出来ていました。私は、あの時のことを

思い出して、旦那が強い処を見せたんだなと直感し思わずニコリとしました。

『奥さん、大分乱暴^{らんぼう}なことをしたようですね』と、訊ねてみました。

『ええ、昨夜ね、少し酔つて雨の中を歸つて來るとフツフツ……』

『どうかしましたか』『足がふらついて、駅の階段からころげ落ちちやつたの』

『で、旦那は』

『ねえ、傘屋さん、男つて全く薄情^{はくじやう}ね、私、歩けなくなつたので、駅から電話をかけて、すぐに来るよりにたのんだ処、来てくれないのよ、だからね、痛みを我慢して帰宅し、昨夜のうちに、薄情な亭主を離婚^{りこん}してしまつたの、フツフツ……、今ごろ、実家に歸つて泣いてるでしょう、あの人、全く、亭主つてもう少しやさしくおとなしくないと、とてもつとまるもんぢやあないわ』

『私は、この娼天下^{かあ天下}の言葉をきいて、男女同権、いや、女尊男卑となつた今の世相に対して苦笑すると共に、一層、妻ノロ亭主を哀れんだもんです。』





一萬圓の眉と毛蒲團

岡進平

(床屋)



後家さんが男の頭髪を

買つて行つても不思議では

ありません

私たち仲間には、昔から異性の顔をアタる（剃刀でそる）時は決して色氣を出してはならないこと。

と言う掟があります。

問題が氣持の上のことですから、何も法律で決められたわけではありませんが。男の理髪師が女客の女の理髪師が男の客の顔をアタる時に、

『こいつは、すごい美人だなあ』

『この人、なかなか好男子だわ』

などと、思いながら剃刀をもっていると、必ず相手の顔の何処かに傷をつけたたり、鼻の頭とか耳を剃りおとしてしまふと言ふ場合があるから氣を付ける、と、注意しているわけです。

処が、馴れないうちにはよく失敗をやるもんでして、私が、見習いからはじめて一人前になりました時、村の豪農の娘で、明日結婚式をあげると言ふ美人が顔をアタリに店へやつて來ました。

主人が他の客の頭をやつていた時なので、若い私とそのS子さんと言ふ美人の顔をアタることになり



ました。

それまでに、数人の女性の顔をやつたことがあります。若くて美しい女性をはじめであり、町中にも知られ、私自身も目をつけていたほど魅力のある女子さんだったので、顔にふれる手がふるへ、胸が高鳴つて仕方がありませんでした。

（こんな美人と、明日初夜を迎える男は、さぞ幸せであろう。ああ、俺も、こんな美人を妻にもちたい）などと、考へながら、右の眉をそつているうちにあやまつて、剃刀をナガし三分の二ほど眉をそりおとしてしまつたんです。さあ大変、いくらあやまつても、明日が結婚式、その上花嫁として方々に挨拶に出かける顔が片方の眉をおとされては人の前に出すことが出来ません。

私は、ついに、一万円の損害賠償をとられることになり、主人にたてかえてもらいましたが、これ以来、女の眉を剃るとすぐに千円札十枚が頭にうかんで來ます。

全く、色氣は禁物ですね。

物資不足の戦時中は、すてるものがないほど層までが色々なものに利用されたもんです。私がまだ見世時代に、よく店へ頭髪を買いにくる者がありました。

た。

農家では肥料にしたり、また椅子を製造する店では、これをアソコにして綿の代用にするために僅かな毛でも買いに來たものです。

処が終戦前後の約一年間に、私に五円とか十円のお小使銭をくれて、一週間に一回おきぐらいにまとまつた髪を買いに來る女がいました。

このひとは、芸者上りで小間物屋の旦那の後妻になつた人ですが、旦那に死なれると女主人になつて店をきりまわしていた男勝りの働き者で近所でも評判でした。

この人が、何故、男の毛髪を買いに來るのか、私にはさっぱり分らず、その女も、『ほかの人に云わないで下さい』

と、私にそでの下をつかつていたので、私は特別に、その女主人には、毛を提供していました。

そして、終戦の年八月に、ピッタリと來なくなり、或日私がその小間物屋の前を通りますと、中から女主人によばれて入つて行きました。

『進どん（彼女は私のことを旧式な呼び方をして





いました。お礼に行こうと思つただけど忙しかつたものだから、これ少ないけれどもつて行つて』と私に百円札を一枚くれました。つまり毛を提供してくれたお礼と言うわけなんです。私は、不思議な氣がして、

『一体、あの毛は、何に使つたんですか』と、訊ねますと、

『これよ、いいふとんが出来たでしょう』と、自分の座つてゐる座蒲團を指さしました。

話によりますと、商店の主人が毛蒲團に座つてゐると客が多く来ると言う迷信があるんだそうです。

然し、これは、あとになつてきいたことですが、実はこの女主人公は変態であつたんです。

『あの女は、毎晩毛蒲團をしいてねてゐるぞ』と、言う評判がたちました。

色々な男の人の毛を集めて作つたふとんは未亡人であるこの女主人公の氣持を大いになぐさめていたと言うわけなんです。

そんなことなら、私は、もつと高く毛を賣ればよかつたと思ひました。

最近になつて、私は女主人に会つた時、『おかみさん、近ごろ毛はすてるほどありますが、



○：廿一日午前二時ごろ白手拭いで覆面した五尺三寸位の男が墨田區吾嬬町東五の二一ガラス加工業芦原喜一さん方南側の窓口からノツソリ忍び込んできた。

○：この男キヨロキヨロしてゐたが間もなく女中部屋にもぐりこみ寝てゐた横澤てる子(二三)さんの下の方に手を差しのべ變な舉動に出た、てる子さんが悲鳴をあげようとする男は「騒ぐと殺すぞと」おどかしたまではよかつたが……隣りに寝てゐた同僚が眼をさましギヤーツと叫んだので痴漢はあわてふためき雲をかすみと一目散――

どうですか』

と、きいてみましたら、

『あんなふとんなんかもうすててしまつたわよ』

と、答えました。

『小間物屋の後家さんが、大学生を若いツバメにもつてゐるぞ』

と、言う噂が出たのは、それから間もなかつた。



覗かれた夜の女

山田 勝子 (仮名)

(街 娼)

パンパンだつて恥ずかしいと云い
気持ちはあるんです



あたいはノガミ(上野)を根ジロにしているパンパンなの。

ヤサ(宿)は深川区高橋^{たかはし}ますや旅館^{りやかん}つていう
パツクみたいな家の一部屋を借りてるんだけど、
泊りの客だけをそこに連れていくの。

ショートだと、ノガミ近辺のしもたやの一室を借りたり、呑み屋の二階を借りたりして数をこなすことを考えてるわ。

土地の商人やら、お上りさん、サラリーマン……と、それはずいぶんいろんなお客さんがあるようにお客さんの中にはイヤラシイことをする人も居るわ。

てんで、あの方は駄目^{だめ}なくせして、顔の上に腰掛けてくれとか、なにをしてくれとか……、

それで、結構^{けっこう}、夜具を濡らされたりしちやうん





ですからたまらないわ。

あたいやつぱりそんなヘンタイつて嫌いよ。

だつて、切角神様がつくつてくれたものがあるんだもん、まともぢやなくちや変だわよ。

あたいの隣りの四疊半にバタ屋さん夫婦が住んでるんだけど……この人達もすこしヘンタイらしいわ。

ある日、あたいがノガミでいいカモをくわえて、……そうね、千二百円の泊りのケイヤクで、ますや旅館に帰つてきたの。

『ぢやア、約束通りお金下さいません……』

フトンを敷いて、ジユパンに着換えてからお客さんに手を出したの。

『うん、お金をやるのはいいけど、それ持つて逃げるんぢやないだらうね……』

あたい、そんなこと云われて悲しくなつちやつた。

『こんなことしてるけど、あたい、そんなシドイことしないわ……』

自然に涙が出たの。そしたら、そのお客さん、すぐお金を出してくれたけど、ずいぶんしつかりした方だと思つたわ。

『ね、お仕度なさつて……』

あたいみたいな女に千二百円も出すんだから、まだどんなヘンタイなことをされるのかと思つて、内心はビクビクしていたんです。

そしたら、その方どろしろの、腰かけろのなんて無理なことといわないで、そのとてもシンセツなんですの……あたい、こんな人に会つたこと初めてだつたわ……。

あたいすつかり感心しちゃつて……さて、という時になつたら……

いきなり、メリメリツ、ペタンという音が隣りできて、隣りのバタヤ夫婦が変な恰好したまんまで轉がりこんできたんですの……。

それまで、あたい氣が付かづにいてわかんなかつただけ、あたい達のこと覗いていたんですね。そいで、……。

隣りとの仕切りはベニヤ板一枚ですから、よりかかれば、すぐメリメリツていつちやうのは当り前ですわ……。

あたい、ムツ、と、怒りがこみあげてきて、『あんた達、何故、あたいのショウバイの邪魔するの……シドイワ』

バタ屋の胸倉をつかんで喰つてかかりましたの、



そしたら、その間に、お客さんあたいのハンドバツクからさつきの千二百円をそつくり抜きとつて、さよならとも云わずに、逃げていつちやつたわ。

追っかけて行つたけど、間を合なかつたの。余計シヤクにさわつて、引つ返してきてからも、うんと攻め立てたの……

『あんた達が、あんなことするから、お客さんがお金持つて帰つちやつたわ……千二百円のケイヤクよ……切角のお客さんを……シドイわ、ね、あんた達あたいたちの邪魔したんだからペンシヨウしてちよだい……』

必死だつたの。そしたら、

『同じ屋根の下に寝ていながら……何を云つてやがんだい。……おめえが変なまねしてるから、こちとらア疑られやしねえぢやアねえか、……つべこべ云うと承知しねえぞ……』

と、てんで受けつけてくれないの、

『いいわ、そいぢやア、交番に訴えてやるから……エイギョウ防害だわ……それに家宅侵入罪とかいうので訴えてやるから……』

あたい口惜しくつて、とうとう二丁目の交番に訴えてやつたの。

そしたら、交番のお巡りさん、初め何がおかしいのか、ゲラゲラ笑つてばかりいて、話をよく聞いてくれなかつたんですけど、家宅侵入罪だというと、一緒に旅館まで来てくれましたの。

そのお巡りさん、あたいだけでは信用出来ないつていうんで、反対隣りのモク拾いにも聞いてくれましたの。

『へえ、あの櫻田(バタ屋)はヘンタイでしてね。ノゾキのクセがあるんですよ。勝ちやんがここへ来ないまえに私と隣り同志でしてね。……やつぱり、同じことがありましたよ。……でも、こちとらア、商賣ぢやアありませんから金は請求しませんでしたが勝ちやんにしてみれば、当然でしょう……』
有利な証言をしてくれたんで、櫻田はすっかりシヨゲてしまい、あたいに千二百円拂つてくれましたわ。

ノゾキ千二百円は高いつておつしやるんですか？……とんでもない、あたいにしてみりやア、せつか

くのお客を逃がしてしまつたんですからね、一万

円貰つても高くないわよ。



童貞膜異常あり

櫻田 和 夫

(元警察官)



これはこれは、イヤハヤ
恐れ入ったものです

『間社会の苦悩には変りないよ』

理代のニキビ学生は、老人の懐古調をきびしく批判するが——私なんかも、昔を思い出すと、懐しいやら愉しいで、現実のすこしぐらいの苦しさは消すことが出来る。

もう二十年にもなりますかな。私が巡査になった頃は、服装も現在と違つて、腰には、時代がかつたサーベルをつけていたもんです。

まあ、いまのソヴェートの軍人を想像すればいい。

ちようど、あんな服を着て、

『オイ、コラッ』

とやれば、天下に怖いものはなかつたもんです。

私がはじめて勤務した交番は、中央線の東中野駅前
の交番でしたが、戸籍調べで受持区を廻ると、あちこちの家から、

昔はよかつたもんです、と老人連中は口癖のよう
に仰有る。

『チエツ！ またはじまつた、お爺さんの懐古調が。』

それはねお爺さん。昔が今より実際によかつたとい
うわけじゃないんだよ、滅びしものは美しきかな、
と云つて、過去のこととは、たとえ苦しかつたことで
も、現実にして直接にひびかないから、愉しみとし
て考えられるのさ。ナニ、今だつて昔だつて、人



『あらまあ、いらつしやい。ちようどいいわ、田舎から珍らしいものが届いて居りますのよ。まあ、お茶でも召上つて、喰べていつて下さい』

それが、けつして現今流行のサンズイ的下心があつてじやなく、心から、お巡りさんにサービスしてやろうとする、あたたかい人情の発露なんですからよかつたもんです。

お茶をどうぞ、なんて云われて、ハア、どうもご馳走さま、なんて、圖々しくやつたら、たちまち暴飲暴食で腹をこわしてしまふから、まさか、一々ご馳走に應じては居れませんけど、その頃の人の情けというものは、いま考えても、心あたたまるものがありましたね。

夜になるとまた大変なもので、近所の壽司屋さん洋食屋さんが、看板ぎわになると、山ほどのご馳走をつくつて交番へ持つてくる。

『旦那腹ペコでしょう。まあ、これでも食つて、元氣をつけて下さい。何しろ、いくらお強くつても、腹ペコじや泥棒を見つけても、イクサはできませんからね』

そのご馳走が、明日まで置けない、残物の材料を仕込んだものとわかつて、涙の出るほど嬉しかつ

たもんです。

カフェーの女給さんでも氣ツ風がよかつたもんです。あそこには（東中野附近）新宿のカフェーで働らいている女給が割合に多かつたので、十二時過ぎの電車から降りる女は、たいてい女給さんでしたよ。

『あら旦那、お寒いのにご苦勞さまネ。あたいねこんなに酔つていて申訳ないんだけど——女給商賣ですもの、仕方ないでしょう、ご免なさいね。だけど、旦那には申訳ないと思つてんのよ。いくら商賣と云つても、こんな寒い夜半に、こんなとこに、ポツリ立つてゐるんですものね。だからあたい、熱カンを一本ゴマ化してきたのよ。ねえ、ぐつと呑んで——すこしでもあつたかくなつてヨ。さめないように、あたいの肌で、あたためてきたのよオ』

彼女はキンシャの着物の前を、ぐつとひろげ、まっ白い胸を惜しげもなくひろげて、手をつつこんで懷中のなかから一本の銚子を出したかと思うと、ぐつと眼の前に突きだすんです。

『さあ、あたいの見てる前で飲んでエ——ホーら





まだ熱いわよ。ぐつと、一杯やつたら、朝まであたたかいわよ』

シヨボシヨボとこぬか雨の降る入梅の頃となると巡廻中の暗い屋敷街の露路裏で、うしろに、バタバタと人の足音がしたかと思うと、若い女がうしろから傘をさしだし、

『降つて大変ですわね。まあ、こんなに濡れて——交番まで入れていつてあげますわ』

見れば、夜目にもそれとわかる寝巻姿。

『あたし、その××家の女中よ。もう寝ていたんだけど、お巡さんの靴音をきいて、きつと、雨に濡れて巡廻していると思つて、飛び出してきたの。入梅の雨ッて毒よ。遠慮^{えんりょ}なさないで、ご一緒に行きましようね』

きつと、田舎出の娘さんであろう。その頃の交番の巡查と云えば、九十パーセントは、田舎から青雲の志を抱いて上京した若者ばかりだ。地方出身者のみが知る相互扶助の涙ぐましい一シーンである。

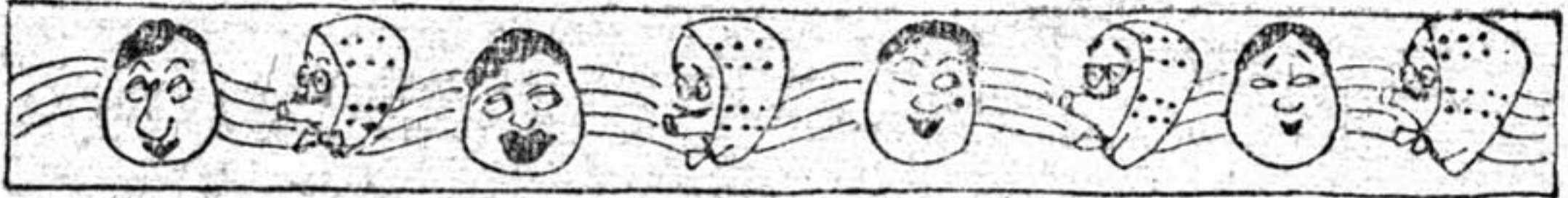
終戦後、私は警察大学に学んで、そこで、地方の警察から来た学生と同じ寮に起居を共にした。そのときS県のK警部補が、こんな話をしてくれた。

『僕が勤務したことのある駐在所の管内は、まだ汽車

を見たことがないという人達が大部分でね。都会の君が聞いても、ホントにできないほどの辺鄙な山奥なんだよ。その村にいたとき、こんな話があつたよ。村のある若者が同村の娘と結婚することになつたんだが、この若者は、たつた一度町へ出たことがあつてね、悪い遊びをした報いで、悪いお土産を買つたんだ。ところが、その病氣がまだ癒らないうちに結婚式さ。とにかく旧弊なところだから、式は一日たりと延ばせない。しかし、花嫁に病氣をうつしたら困ると、心配して吾輩のところへ來たのさ。そこで吾輩はない頭をしぼつて、よろしい、吾輩が引受けたと、早速町へでかけ、ゴム製品を買つて帰り、花婿に渡してやつたんだ』

『初夜にはこれを使用したまえ。もし使用後に花嫁に見つかつたら、こいつは、童貞膜^{どうていまく}と云つて、女の処女膜と同じようなものゝ残骸だ』と云ばよろしいと、教えてやつたのさ。

ところがね。半歳ぐらい経つと、花婿もすっかり病氣がよくなつて、花嫁を連れて、駐在へお礼にきたが、そのときの花嫁の話がふるつていゝんだよ。『旦那、ウチの人とはとても純情なんです。童貞膜が、この頃、やつとトレてきましたの。』



珍景水揚奇譚

三井高信

(実業実)



半玉さんが

腰を悩ましく

くねらせたのも

道理です

います』

と言うような、チャツカリしたことは許されない。この初夜の契りが、つまり「水揚げ」という儀式で、処女に訣別するおごそか？ な行事なのである。

初夜の契りを結んだ以上、たとえ芸者であつても貞操は堅く守らなければならぬ。

「水揚げ」の相手を「且

那一或は「主さん」とい



お金を拾います

花柳界にはむかしから、水揚と稱する祝典？ が存在する。半玉から一本になるとき、好むと好まざるにかゝらず、抱主から旦那をあてがわれるのである。いわば、半玉のうちには、素人流の用語を使えば処女期であつて、一本になるお被露目をするときは、晴れの興入なのである。興入である以上、結婚式につきもの、初夜の契りも当然附随するわけで『あたし、お式だけで、夫婦の契りは結構でござ

い、このお方以前に身を許すなんていうことは、女の道に背くことなのである。そこで、この「水揚げ」をすませたことは、一本——つまり、主さん一本だけでございます。ほかの殿御とは、根輪際浮氣しません、という意味表示を中外に宣言したことにもなるのです。

ところが戦後の花柳界は、一般社会がそうであるように、相当に風紀紊乱の風潮がきざして、この「水揚げ」と「一本」の關聯性貞操理念がとかく乱れて、一本どころか、五本にも、十本にも活用している風が見えて、まことに嘆かわしい次第である。なかには、処女期である半玉のうちなら、ひそかなる「水揚げ」の祝典を盛大且数回にわたつて行くと聞いては噫何をか言わんやである。

なかには「W式水揚げ」という詐欺的行爲すら飛出す始末。鼻下長男でなくとも、相当鼻下に注意しないと、鼻毛どころか、全身無毛地帯にされてしまう。

『ね、Hさん、こんど××家からお披露目する妓、まだきまつていないのよ、トテモ綺麗な妓よ。ねえHさんが何とか面倒みてあげられないかしら？ 一切ひつくるめて、十万ぐらいでいいと言うのよ—』

H君が知合の待合の女將に口説れた同じ夜、H君

の友人である某重役も、同じ土地の待合の女將に口説かれている。

『ねえ、社長。安いじゃないの。戦前だつたら、トテモ十万では水揚げなんかできなかったわよ。ポチャポチャとした、可愛い妓よ。引うけておんなさいよ。十万なら安いわよ。あたしが男だつたら、あんなキレイな初物、黙つてなんかいないわよ』

女將に煽られて、この重役もOKということになつて、いよいよ十万円の花嫁と一夜の縁を結ぶ宵——待合の廊下でバツタリ会つたのがH君と某重役。お互にクラブなどで顔を見合わせて知つている仲だから、

『よオ！ 何だい、今宵はお忍びで、羨ましいですなあ』

『やあ！、何にね。知合の女將に無理に泣きつかれてね。まつたく、水揚げなんて、いいもんじやないよ』

腹ン中では（僕は今夜、処女を一人陥落させるんだぞ—）と自慢しているくせに、まさか口には出せない。しかし、えん曲に、果報者であることを誇示しているのを、聞かされつ放しで黙つても居られないから、片方も、



『よオ、君も水揚げか。実は僕もね。今夜それなんだよ。五十万ばかり小遣を落したつもりで、貧棒籤を引いたわけさ』

十万が途端に五十万円にセリ上る。実業家だけあつて、サバを讀むのもお手のものだ。

さて、H君と某重役はそれぞれ別間へ別れたのだが——それから十数分後、先づH君がニヤリニヤリと、満足そうな笑いを漂わして便所へ下ると、出会頭に某重役と突つかつた。某重役は昂奮そのまゝのゝ態で、吐く息も熱つぽい。

『やあ、いかゞでしたな。初ものの味は?』

H君が声をかけると、

『それがね。彼女が恥しがつていゝらしく、まだ迎えの女中が来ないんだが、いまやつと、仕度が出来ましたと知らせがつたんでね、これからというわけだ』

とひよいと見ると、たしか、先刻結んでいた筈の赤いネクタイがH君の頸の下から消えている。

(慌てゝ、忘れて来たイヤだな。うふッムム。家へ歸つて、妻君に何処へ忘れたんですなんて、しばらくれるぜ)

某重役はくすくす笑いながら、仕度のととのつた

式場へ参入した——十数分後、恙なく式が終つて、パツと電灯をつけたとき、彼氏は、おおと眼を剝いた。

『いやーン、恥しいわ、灯り消してーン』

恥かしがる彼女の脇に、長々と、ペシヤンコになつていたのは、何とH君の頸にあつた、赤いネクタイではないか。

(どうも、バネが尋常ではなかつた筈だよ!)

某重役は思わず唸つたそうである。

花恥らう半玉嬢にしては、——あまりにも

——でありすぎたと言う疑問も、さつぱりと諒解できたと言うのである。

さらに、ニヤニヤ北叟笑んでいる先陣のH君は、

あとで友人達に語つて曰く。

『いまの若い妓は、水揚げと言つてもやはりスポーツで鍛えているらしく、凄いいんだね。まるで、年増みたいなポリームだよ』

彼の前にも先陣のあつたことを知らないでいるのだから、世の中は愉しいものである。





濃艶なベッドシーン



商賣と言うものは辛いもので、演技者自身は嫌で嫌でたまらないモノでも、お客様のお氣に入りのモノであれば、結構愉しんでいるように、お芝居をしなければなりません。

それも、普通のお芝居ですと、新劇でも歌舞伎でも、台本通りに解釈すればよろしいので、自分の役柄は不良少女とか、女賊というように、スベリと悪役ということがわかりますし、小道具にしる、衣裳

マリー・津島

(ストリップバー)

あまりうまくても

心配されるものです

にしる、そのモノだけで、お客様に冷かされたりすることはありませんが、ストリップ劇場となるといささか事情が変ってくるのです。

あたしが、はじめてストリップになつたときでしたわ。舞台ははじめてじゃありませんし、地方廻りもみつちりと経験した古強者？ のあたしでも、オツパイの頂に、銀紙のスパンコールをしてスポットを浴びたときは、一寸バランスが崩れて、ドギマギしたものです。

いまでは、乳押で、きゅツと締めつけていたオツパイが、まるで放任状態なんですから、タララン、タラン、タラ、と、脚を振るたびに、オツパイがぶるんぶるんと、揺れるんでしよう。何だか、身体から離れて、客席の方へ素つ飛んでしまうので



はないかなんて、ずいぶん取越苦勞をしたものですわ。

そのときのお芝居に與えられた役が、ホルモンマダムと言いましてね。苦い燕を三人も占有している有閑マダムの役なんですの。ところが、このマダムが、三人の燕に同時に寢込まれて、すとしおせんちになつて、うさ晴しに、一人で酒を飲む場面があるのです。

——ああ、ホントに腐つちやうわよ。いくらあたしのホルモンのおかげで、この世に棲息するからと言つて、何も仲良く三人で寢込むつて手はないわよ。癪だから、今夜は飲み明かしだよ。オタマ！（オタマと言うのは女中の名前で、マダムに呼ばれて、オタマ嬢が登場するわけです）

——お酒を持つてきて、

——あの、お一人で？

——きまつてるじゃないの、誰も居やあしないじゃないの。早くお酒の支度をなさい

（オタマが酒と肴を運ぶ。膳に並んだご馳走を見てマダムが柳眉を逆立てる）

——オタマあれがないじゃないの！

——あの、あれつて言いますと？

——あたしの大好きなモノよ

——大好きなモノつて、何でしょう？

——馬鹿ね、この家に一年もいて、まだあたしの大好きなモノがわかんないの！

——奥様のお好きなのは若い男の方じゃないんですか？

——バカ！ お客様の前で、あんまりハッキリ言わない（睨みつけて）あれですよ、あれが出ていないじゃないのよ

——あれつて何ですか（泣出しそう）

——マツタケよ。太くて、かたそうのよ

——あッ！あれですか。あれなら、あたしも大好きですわ

純情可憐なあたしは、この台本を讀んだときにはこのマツタケに秘められた意味深長な故事來歴にはまつたくガクがなかつたので、この科白のヤリトリが、どこが面白いのかと不思議に思いながら、

——マツタケよ、太くて

固そうなやつ——

とやつたら、お客様が

わあッ！という拍手、





喚声。それは凄^ひいほどの受けようなんです。こつちはびつくりして、どこかトチつたのかと思つて、慌てちやつたんですね、すつかり上つて、

——マツタケよ……

の科白をもう一度やつたものです。するとお客様が、

『わかつたよ！ 助平マダム！』

客席から叫んだと思うと、また、わあッ！ という拍手。

もう、それからあとの科白はしどろもどろで、幕がおりましたきは、演出^{えんしゅつ}の先生から、どんなに大目玉を貰うことかと、生きた心地もありませんでした。舞台に突立つて、ボンヤリしていると、そこへ駆けつけたのが、怖れていた先生です。

『マリー君凄^ひいぜ。大したもんだ。シヨツぱなからあれだけ受けりや、大成功だよ』

マツタケの科白を、三度もしやべつたのが、大成功だと言うのだから、何が何だか、さつぱりわからなかつたのですが——そのうちに、マツタケのギャグの意味がわかつて、かつと、全身が熱くなつたものです。

知らぬということは無邪氣^{むじやき}なもので、どんなキワ

どいこともやれるんですから。

昨年^{さくねん}の秋でしたわ。はじめて小屋入りした女の子が、悩^{なや}ましいベツトシーンの舞台に出たんですの。

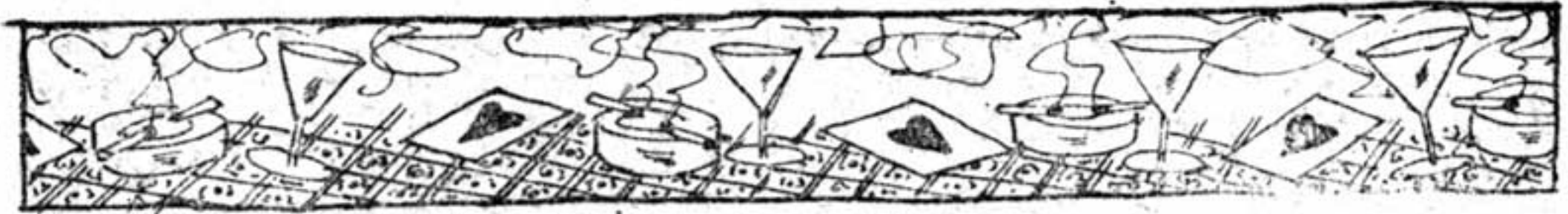
まだ十六の子供ッぽい子で、こんな女の子に、そんなお芝居は無理だろうと、樂屋ではヒソヒソ話も出たくらいですの。ところがお稽古がはじまると、あたし達古強者も驚ろいてしまつたんですの。

だつて——ベツトの毛布の中に全身をかくした女の子が、ハイッ！ と言う合圖と同時に何もかもそとお稽古にかゝつたのですが、その全身のリズミカルな動かしがたが、とても凄^ひいんですの。

『十六の子供だなんて言つたが、案外くわゝせ者だぜあの腰つきじやもう男を知りつくしているんだぜ』男の子たちはそんな囁^{ささや}きを交しているのです。ところが、稽古が終つて、樂屋へ引上げると、彼女があたしに言うじやありませんか。

『お姉さま、さつきね。困つたわ、だつてね、蚤^蚤がいて、掻^かいくて掻^かいくて、たまらなかつたんですもの。あんまりもそもそして、先生怒つていませんでした？』

舞台は、やはりナマが尊いものね。



踊り子ズロース異變

望月優子

(映画女優)



大事なものはお互に

大切に致しましよ

新宿ムーランルージュにお世話になり、宝塚劇團、新生新派、そして映画入り、考えてみればずいぶん長い苦惱生活ですけど、過ぎ去りしあとをふりかえると、まづたく、あッというまのようににも感じられるほど、夢中になつて歩んできた道でした。

それでも、その過去のひとつひとつの光景を思い出すと、悲しかったこと、嬉しかったこと、おかしかつたことが、まるで、昨日のことのように思われるのも、不思議なものですわね。

わたくしは浅草公園の近くで生れ、雑貨屋の一人娘として育つたのですが、父母も生つ粹の下町ッ子でしたので、まだ小学

校へ上らぬ頃から、清元
踊と芸事を習わされ、袂
の長い着物をきて、紅緒の



何かおもしろいお話を、というおはなしですけれど、わたくしたちのように、明けても暮れても、仕事、仕事と追いかけて居りますと、おもしろいお話どころか、聞くも涙、語るも涙というお話ばかりで、きつと退屈なさつてしまいますわよ。
エノケンさんがはじめて一座をおもちになつた浅草の水族館が、わたくしの初舞台で、そのときが十四才のとき。それから、赤い風車もいまは思い出の



ボツクリで、お師匠さんのところへ通つたのをおぼえています。小学校を卒える頃には、清元も踊も、一應卒業したような顔で、その頃漸く擡頭してきたレビューに未知の世界への憧れの夢を描きだしたのですから、いま考えると、ずいぶんとおませさんでしたわけです。

当時は一世を風靡したオペラも衰退し、浅草には新時代の斬新なショー？が要求され、これに應えて起上つたのが、エノケンさん達のカヂノフオリーだつたのです。

レビューに憧れていたわたくしが、このショー演劇に魅力を持つのも当然で、せつかく、いい成績で通つていた女学校をやめて、舞台に立ちたいと言つたときには、流石芸事の好きな両親も、びつくり仰天。父は馬鹿つたれ！と怒鳴りつけるし、母は『まあ、お前。何て悲しいことを言うんだね』と泣きだす始末でした。それでも、人一倍負けぬ氣性のわたくしは、この両親を説き伏せ、親戚の島村が、ちやうどその頃カジノに關係していた顔を頼つて、強引に入座してしまつたのです。それが十四才のときですから、いま考えると、ずいぶん無茶な話でした。さて、入座すると、いまのように、半年とか一年



○：チャルメラを吹きながらエロ寫眞を売つていた夜なきソバヤが丸の内署に檢舉された。臺東區浅草千束町二の三六某

基礎訓練をするなどという、のんきな時代ではないのです。二、三日樂屋で体操のような練習をやつたと思ううちに、そのつぎはもう舞台です。いまだ言えはラインダンス——と言つても、総人員五、六名ですが——女の子が一行になつて、足をあげたり、手をふつて、音楽に合わせて、二、三分相勤めればいいので、とにかく、超スピードで、十四才のレビュー・ガールが誕生したわけです。そのときに、竹久千恵子さんや、梅園かほるさんなどが一緒だつたのですから、このカジノ時代は、ほんとうに懐かしい思出として、残つて居ります。

(一九)という
○：廿日夜八時半ごろ丸の内都廳前で、男女が怪しい振舞をしてゐる寫眞を一组(六枚)四百圓で通りかゝつたアメリカ兵に売らうとしたところを御用
○：留置場に入れられてビツクリ仰天、取調べの係官に一ついでに金儲けをしようと思つてアルバイトをしましたのが今後はまじめにソバ屋をやりますからごかんべん下さいと「頭をペコペコ」



こんなこともありましたわ。ある日のこと、一緒に踊っている女の子が、どうしたわけか、パンティを落してしまつたのです。お客さまはハツとして、そのつぎには、(凄いい!)と言わんばかりに、その踊子の股間(もも)に好色的な視線の一齣(いちく)射撃(しやげき)です。踊子は夢中で踊っているんですから、そんな大切な落し物があろうとは気がつきません。お客様といつても全部が男性です。おまけに、浅草ツ子のパリパリが多いのですから、ご隠居(いんきよ)さんのように、いつまでニヤニヤ舞台を眺(なが)めているわけにはいかなかつたと見え、うしろの方から、

『ズロースが落つたぞオー!』

と怒鳴つたものです。

驚ろいたのはわたくしたちです。みんな一齣(いちく)に覗いたんです。すると、わたくしの隣りにいた子が、

『あッ!』

悲痛(ひつぽう)な叫声(けいせい)をあげたと思うと、前を押えたまま、横つ飛びに舞台の袖へ隠れてしまつたのです。さあ大変! もうライオンダンスどころではありません。その格構(かつこう)が面白かつたと見え、客席は爆笑(はっしょう)の渦(うず)に。けんごうごうとして、音楽も何もあつたものじやないのです。慌てた舞台は、急いで幕をしめたも

の、客席のどよめきは、しばらくおさまりませんでした。

(美恵ちゃん、あのトキ、パンティーを落したの、あんたじゃないの?)

そのときの話が出ると、よくお友達から冷やかされますけど、わたくしではないんですのよ。いえ、ホントに。

もつとも、踊子達は、舞台へ出るときは、スパンコール、パンデーを二、三枚つけてますから、その一枚が落ちたつて、ベッ!——なんですけれど、客席からは、ヘンに異常(いじよう)に見えたのでしようにし、落した踊子も、本能的(ほんのうてき)に、見られた! と思つちやつたのでしようにね。

一時は、水族館の踊子は、踊りながらズロースを落すなんて、嫌なデマが飛んで、警察から文句を言われたりしましたけど、皮肉にも、客人は連日職員で、ヘンなこと、ヘンに人気が出るものだ、ただ子供のわたくしは、当時英語の字引を引くようなむずかしい顔で考えたりしたものですね。





新々糞尿譚

杉下 龜助

(おわい屋)

くさい商賣ですが

面白い人生觀を抱きます

臣だつて職によつて生きている以上貴賤はなく汚物を取扱つていても仕事は神聖だ。

第一にね、糞尿を汚ないと思つているうちは一人前の「おわい屋」とは言えない。十年ほど前までは衣類とか、足についたものを『汚ない』とか言つてふき取つたり洗つていたりする者があると、作業中先輩から、

『仕事の材料に対して申訳ないことを言うな』

と怒鳴られた上、殴ぐられたり、極端な時は「糞尿」を頭から沿ひせられたりする場合があつた。

このものが、普通の品物のように見え、愛情？を感じて來ない限り「おわい屋」はいつも下つ端で人の上には立てるものではない。

こんな仕事だつて一般の者には分らない興味があ

世間の人たちは、私たち没取り人夫のことを「おわい屋」「うんこ屋」などと言つて、けいべつし大変汚ながつてゐるが、当人にしてみれば、「糞尿」があればこそ毎日オマンマが食べていけるのだから大いにありがたく思つてゐる。

「職業に上下なし」

「職業は神聖なり」

と、言われているように「おわい屋」だつて、大





るもんだ。面白いことには、その家庭によつて、糞尿の匂い、色、重量が各々違つてゐる。

大体、医者でも言つてゐるように美食をしてゐる家のものは匂いがとても強く、粗食の家では匂いが少ない。従つて色も薄く、重量も軽い。

金持ちと貧乏人では汚物までが区別されるんだからやり切れない話である。私なんか、もう十年近くやつて、市役所清掃課に属す、七組の組長をやつてゐるが、未だに他の職に轉向しないのは、天から與えられた仕事に満足し感謝してゐるからなんだ。

私の組では、A町約五百世帯を受持つてゐるが、組長ともなれば、桶に入れられたものを見るだけで何処の家庭から没取つて來たものか大体見當がつく。

少し變つた匂いや色だと思つて、人夫に訊ねて見ると、最近移轉した來た家庭のものだと言うくらい臭覺、視覺が発達してゐる。

芸人なら、まあ「名人芸」と言う処であらう。

去年のことであつた。A区域にある三軒長屋で、Bと言う失業者の家を没取つていたら、どうも、今までの匂いと違つて美食家庭的な感じがした。

私は、この主人も、いよいよ職についたであらう

と思つてきいて見ると、妻君が、まだ失業してゐると笑えた。

近所のオカミさんたちにきいてきたら、『このごろBさんの家では、牛肉の匂いや、魚をやく匂いがして來ます。何か商賣でも見つけたのでしよう』

と、言つた。それから間もなく、このBさんは、人身賣買の共犯者として捕えられたのである。

こんなわけで「汲取り屋」も使い用によつては、犯人捜査の役となるとも限らない。

また、皮肉で奇抜なことは、糞尿と共に便所にすてられる色々な品物である。まあ、最近、ゴム製品は大概の家から出てくる。

私たち仲間では、このものに、

『土左右エ門』

と言う隠語を使つてゐる。つまり溺死したと言うわけからである。

この「土左右エ門」の発見によつて、哀れな父娘を大事に至らぬうちに助けた話がある。私の使つてゐる若い没取人が、或日のこと、





『組長、Kさんの家から土左右エ門が数人あがりましたよ、六十才にもなる職工の父と、パチンコ屋へつとめている二十才の娘が二人だけと言うのにおかしいぢやありませんか』

と、言つたので、私も変に思つた。

『あの親父が女を作るわけがない。すると、あの娘が、親父の留守に男でも』

と、私は余計な心配をして、其の後、工場の前で顔見知りのK老人に合つた時、

『Kさん、このごろ御発展ですね、老いらくの恋でもしましたか』

と、カマをかけてみると、Kさんはとんでもないと、言う顔で否定し、一体どう言うわけでそのようなことを言うのかと訊ねて来たから、私は正直に「土左右エ門」学を発表してやつた。H老人はびっくりして帰つて行つたが、数日後再び合つた時、Kさんは、

『いや、あなたのお知らせで大変助かりました。実は娘が隣町の愚連隊の一人に誘惑されて体までささげましたが、そいつは、娘からヒロポン代をまき上げていた麻薬患者であることが分り、娘に注意して縁を切らした上、警察へ知らせましたら早速調べら



○：國体最終日の廿三日午前三時頃射撃競技場のある飯坂温泉の繁華街パチンコ屋飯坂町東堀切一(責任者渡邊芳造)から出火、同家木造平家廿坪とパチンコ五十臺だけ

を焼いて鎮火したが、旅館の強風で火が八メ、竹の松の宮が折れて大に避難したところ、宮様に上りたところ、宮様にと現場へ飛出され、消防署員を激励、一同感奮、同町の警察では原因調査に躍起となつたが、男女密会のあとの火の不始末らしいとわかつて「トベツモネエ(とんでもない)ヤロダ」

れ病院へ収容されました』

と、私に何度も礼を言つたと言う話まである。

最近のように化学肥料が農家で使用されてくると、人糞利用価値が少くなり、農家では今までのように町家へ汲取りに来なくなつたから、私たちの仕事はいよいよ多忙で、月給も上り、生活もらくになつて来た。

このように「おわい屋」だつて、きらわれるより喜ばれることが多いんから、余り馬鹿に出来ないと思うが。



卵が取持つ縁かいな

上原市郎

(たまご屋)



「たまご」は、比較的安価で、身近かにある強精食として、廣く用いられていることは、皆さんも経験済みでよく御存知のことと思う。

この中でも「鶉の卵」とならんで、特に栄養があり、精力をつけるのが「軍鶏の卵」である。

僕は農家の次男坊であるが、五年前復員して来ると、体が弱かったため、野良仕事が出来ず鶏を飼出し、今では百羽ほどの養鶏をして父の世話になら

ず暮している。

小賣店へ卵をおろしたり、小賣りもしているが、僕の鶏舎が町にまで有名になつたのは、軍鶏の卵を多く賣出したためである。

軍鶏は一般の鶏よりも数が少なく、また卵を生む率も少ないから、その値も五割ぐらい高い、然しそれだけ体に効果があることは、僕自身の弱い体が、軍鶏の卵でよくなつたり、病院から直接買いにくることでも分る。

いや、單にそればかりではなく、この軍鶏は、僕に限りない幸福をもたらしてくれた処の「宝物」に近いものである。

それは――。





二年前の花の春。僕の鶏舎へ、五十近い上品な婦人とその娘らしい色白の美人が訪れた。

『あの、お宅には体によくきくと言う軍鶏の卵があるそうですが、毎日三ヶぐらいつつ分けていただけてでしょうか』

と、母親らしい方が丁寧^{ていねい}に言つた。

然し、僕の処では、日に十数ヶぐらいしか生まずそれも二軒の病院へ約束がしてあるので、一般の小賣りには間に合わなかつたのである。そのために僕は、

『折角ですが、毎日、三ヶつつはとても差上げられません、二日に一ヶぐらいなら何とかしましょう』

と、答えた。すると、母娘は顔を見合せて淋しい表情になつた。

『実は、私が少し体が悪いものですから毎日のみたと思ひまして、ぜひ、何とかお願い出来ないでしょうか』

と、今度は娘の方が言つた。私は、この美しい娘を見た時、

『何んてきれいで上品な娘だろう』

と、若い心をさわがせたほどだから、

(よし、この美しい人の体を治してやるために、あ

と、数羽の軍鶏を飼つて、卵を賣つてやろう)

と、決心し、

『それでは、特別に差上げますから、一週間ほど待つていて下さい、こちらからおとどけ致します』

と、約束をした。そして、この娘が、町の百貨店主であり町会議員であり大金持ちのKと言う人の娘であることが分つた。

体が悪いために女子大を一年でやめて、自宅で養生していたのである。

私は、約束の日から毎日卵を三ヶ持つて、ユリ子と言うその娘の家へ出かけた。その度にユリ子をはじめ、両親は喜んで私を迎えてくれた。

私は、ユリ子と直接話をすることもあつたし、たまには、ユリ子自身が散歩しながら、私の鶏舎へ卵を買いにくることもあり、互いに仲がよくなつて行つた。

一ヶ月ほどたつと、私の想^{おも}いは深くなり、一時でもユリ子には合わないと思ひ、淋しいようになつて来た。

然し、相手は女子大までも行つた金持ちの娘である以上、それは許されない恋として、私をなやませたのである。

その上、ユリ子には、もう婚約した東京の大学教



授の伴があると言ふことを知つた時、私は悲しみのどん底に突きおとされた思いだつた。

(こんなことなら、無理をして軍鶏の卵を賣るのではなかつた、畜生ッ)

と、私は癪にさわつた。それでも、

(卵によつて、あの美しい娘の体が大丈夫になるなら)

と、言う氣持にもなつて、私は雨の日も風の日も休まず卵をとどけた。そして早くも一年ほどたつた。再びの花咲く季節が訪れた。ある日曜の朝、一年前と同じように、母娘が鶏舎に明るい顔でやつて來た。

『上原さん、今日はお礼かたがたお願いに参りました』

母親が言うので、

『どんなことですか』

と、訊ねると、

『実は、もう、軍鶏の卵はいらなくなりました。ユリ子の体はすっかりよくなり、医者の話では、いつ結婚してもいいと言ふことです』

その言葉をきいて、私は、いよいよユリ子も結婚かと悲しい氣持になつた。

「それに、この子は、三ヶ月ほど前から卵をのまなくともいい体になつていたのです。ですから、折角持つて來て下さるあの卵を、主人と私がいただいております。全くだんまりいやら、恥しいやら、実は私、四十八才で妊娠しましたの、伴とユリ子の二人だけでは淋しいと思つていました。あ、きつとあの卵のためだろうと信じていますが、もう三ヶ月日になりますの、主人大変喜びまして、処で、お願いと申しますのは、このユリ子を嫁にしていただけないでしようか』

『えッ、ユリ子さんを、だつて、あの』

『婚約者があつたとおつしやるのでしよう、あの人は、これが肺病だと言つて、きらい半年前に薄情にも他のひとと結婚してしまつたんです。あの人にくらべて、毎日卵を持つて來て、この子の体を治してくれたあなたは、全くユリ子には勿体ないほど心の美しい命の恩人ですわ、それに、私に子宝までめぐんでくれた大事な人なのです、ユリ子も、ぜひ、あなたと申しています、いかがでしょう』

『おお軍鶏の卵様よ。』





ツミな影絵芝居

式亭とん馬

(幫 間)



影の太さを知らないか

がつかりするのが無理なの

幫間たいこまちと言つても、今の若いお方たちには余りオナ

ジミでないかも知れませんが、つまり遊興あそびきようの御相手を
する男芸者みたようなものでございます。

小唄、端唄はうたは勿論のこと漫才もやれば芝居も出来
なくてはつとまりません。

現今のように世智辛せちがらみい世の中では、あつし等のよ
うな商賣はいけなくなりました、柳屋三亀松さんの
ようにレコード界に轉向したり、高座に上つている

方も御座居ますが、しかし、全く絶えたわけでは御
座いません。

何と申しまして、女子衆おんなのようにお色氣が御座
いませんから、芸がうまくなくてはいけませんし、
珍趣向ちんしうきうと申しますか、奇抜きびつなことを考えて遊びの座
を持たせるようにしております。

あつし等の仲間で佐渡谷太松さんてのが、ヨガリ
屋さんと申しまして、三亀松さんの向を張り、鬨房



で使用いたしますチヨウチヨウ喃々の金話を一人二役で熱演いたしまして、余りお仲のよろしくない夫婦の方や、しつくりいかなない新婚の方たちに気分を出させようというゲイジユツを考えまして、ふらぐ繁昌したことがございます。

『あらッ、いやッ……』

『ね、もつと……ふ、ふ、ふ』

とか、ともかく甘つたるい鼻にかゝつた声で、さも濃厚なように演ずるんですが、近頃の若い方達は新婚でも、処女、童貞は少ないんで御座います。

初夜から頗る濃厚でございまして、「ヨカリ屋」さんなぞ必要としないんです。

太松さんも可哀そうに、失業いたしやして今は地方に流れて行つていふことですが……

都々逸はともかくといたしまして、今では槍さびだとか追分より、芸者ワルツだの炭坑節をお歌いになるお客さんが多いですね。

それに、芝居をやるならストリップをお好みになりますし、シロシロとか白黒、なぞというエロシヨウを要求なさる方もいます。

シロクロの場合、よくリシタク屋などが、女の相手をすることは御存知のことと思ひますが、これは

それ専門の單獨興行でございまして、わつし等の招かれます高級(?)座敷におきましては、料亭からエロ・シヨウ屋が招ねられるんでございます。ですから、リシタク屋さんなぞとは関係はございませんので、このシロクロの場合、よくわつし等に相手をしてくれなぞと頼むお客さんがございます。

勿論、恥ずかしいことですし、第一自信がありませんから断わるんですが、

『お前なぞ、ずい分進んだ口だらうから……遠慮することはないだらう、やれ、やれ』

皆で白羽の矢を立てゝくるんです。

『いえ、その、モノに自信がないので……ヘイ……』

人様の前で滅多に顔を赤らめたことのないあつしも、全くこんな場合、弱りました、……そのお客さまが見ていないで、アレするんならちとより願つてもないことですが……

でも、たいてい救いの手が御座いまして、つまり料亭の料理人とか番頭さんが、ご相手をしてくれます、ずつと逃がれてき

たんですが、一度だけどうにも断われなくなつてしまつたんです。





その時は、新趣向でございまして、エロシヨウを全部影絵でやるんです。

これなら直接顔を見られなくてもすむと思い、OKいたしました。

年増芸者は、あつしも顔見知りの千代丸さんが相手で、アソマ興十と後家さんというのをやるんです。

ストーリーのほうは、これ迄にもよく宴会の席でやりますんで、たいして打合せるほど面倒なこともございません。

あつしの扮する興市が、

『今晚は……』

と千代丸さん扮する後家さんを訪ずれるところから初まりまして、

『興市さんかい、馬鹿に遅いぢやないの。待ちあぐんだよ』

『どうもおそれいます』

手さぐりしながら千代丸さんのところにイザリ寄るあつしの芸は、そりやア堂にいつたもんですよ。

『あらあら興市さん、今夜はいつもの揉み方と違うのね。』

『ハイハイ、それでは』

二人とも裸になりました、大変なところを揉ことになるんですが、……あつしもさんざ遊んだほうでございすから、芸はなかなか細かいものでございす。

すると、

『わあーッ、とん馬すごいぞーッ』

お客さん方が歓声をあげてくれました。

芸がうまいんで褒めてくれたのかと思つてましたら、

『さすがア、とん馬……馬だけあるぞーッ！』

これじゃア、あつしも恥ずかしくなつて、赤くなつちやいましたよ。

お客の中に、女の方がおりまして、後に口説かれましたね、一つ夜具で……と、いうことになつたんですが、途中で、

『馬鹿くしいッたらありしない、影の半分もないぢやないの』

てんで怨まりましたよ、エ、判りませんか、女が光線の工合で馬並に写つた影に惚れたんですよ、エッヘッヘッ。



風流女流画家

澁谷さかえ

(閨秀画家)



男勝りの露出症女史が
とうとう結婚したけれど

岩井清亭といつて、画壇の大御所だが、もう古稀を過ぎて、俗氣のとれた仙人みたいな人である。

『川岸君は、まだ独身でしたか』

『まだですわ、先生』

若い処女みたいな声で答えた、川岸女史は吉屋信子サンに似たあどけない話しつぷりをする。たゞし

吉屋サンみたいなの、平家

蟹が赤んべえしたような

御素末(御免)な顔では

ない。鼻筋とおつて、腫



川岸その子女史といえは、知る人ぞ知る三科会の重鎮である。男まさりで、大膽不敵な女性として知られている。その画風は、奔放不羈当低蒼白き男性画家のおよぶところではない。齡はまた四十に間のある姥櫻、独身で、いまが女として油の乗りきつたさかり。どうしてあの方の処理をしてるんだらうと後輩の青年画家たちは、余計な心配している。

あるとき、三科会の集会があつた。女史の先生は



が涼しく、頬のふつくらした美人である。清亭先生は、川岸女史の女らしさあふれた顔を見つめながら『君あの方はどうしていますか』

『何でございますの。先生』

『男の問題だよ。どういう風に解決してゐるんだい』
そばにいた後輩の青年が、その対話を、小耳にはさんだので、こいつは面白いぞと、耳をかたむけた。

『あゝ、先生、性慾の問題ですか』

『そうだ。不自由してゐるんだろうナ』

清亭先生ほどになれば、少しもいやらしい感じをあたえない。いたわるように、温顔に微笑をたたえて、女弟子の最も痛いところを、衝かれた。

『そりア、先生、わたしだつて不自由してますわ』

川岸女史は、ちよつとシンミリして答えた。だがたちまち、赧然と笑つて、

『でも、先生、適当に処理していますから、御心配なく。オッホッホッホッ』

『そうか。そんならよろしいが』

そう言つて、先生も破顔一笑された。普通の人間なら、

『どんな風に、処理しているんかネ』

と重ねて訊くところだが、先生は、そんな野暮な

ことは言わない。

宴会になつて、酒がまわると、画家なんて大抵豪傑ぞろいだから、席がデタラメになつてきた。さつき、肝心のことをききもらした青年画家が、

『川岸サン、さつきの話だけれど、一体どういふふうに処理してゐるんですか。僕も独身だから後学のためにうけたまわりたいンです』

『オッホッホッホッ。一体性慾の処理に、どんな方法があると思つてゐるの。あなたは？』

『どんな方法つて』

『バカ野郎、お前はカマトトボーイだね。オッホッホッホッ』

あるとき、男女数人の画家が、箱根にスケッチ旅行をした。西郷青磁というシュールリアリズムの絵で有名な男が、一人で浴場に行き、お湯につかつていると、ガラリと戸が開いて、だれかがはいつて来た様子。脱衣場で、着物を脱ぐと、その人は、今度

は浴室のガラス戸を開けて、はいつてきた。

それまで、窓から外の景色を見ていた青磁センセイ、あまり元氣がいいので、だれかと思つて、ひよいと鼻ツラをむけると、川岸その子女史であつた。筋肉隆々といいたいくらい立派な体をしている。



乳房はゆたかだし、堂々たる臀部、おまけに、川岸女史は、普通の女性のように、体をかどめて、前をかくすなんて、小刀細工はしない。仁王立ちに立つて、青磁センセイを見おろしている。

見まいとしても、センセイの鼻先に、女史の神威が拜めるのではある。その道にかけては、画壇中の雄である青磁センセイも、これには照れてしまつてお湯でボロンと顔を洗い、

『お立派ですなあ』

と歎息した。ところが、だといわないところがミソ。ところがわが川岸女史も、平然として、

『センセ、お風呂の加減は、どうですか』

温泉に加減も、ヘチマもあつたもんではない。青磁センセイは、それ以来、人に逢うごとに、川岸女史の体格と、態度と、それからその立派な事も吹聴した。

『天衣無縫だよ。あの女史は——』

こんな眼に逢つたのは、青磁センセイ一人だけではない。

川岸女史の家を夏など訪れると、文字どおり素っ裸かの女史が、廊下を雑巾がけしていて、お客が来ると、ふりむきもせず、

『私は、潔癖のせいかな、こうして、お掃除しないと気がすまないのよ。一寸失礼』

テナ調子でもつて、掃除をつゞけ、おわるとシャワーをあびて濡れた体を、タオルにくるんであらわれる。いやはやで、心臓のよい男は、仰天して、そこそこに退散してしまふ。

この川岸女史が、結婚したときいて、画壇はあつと驚いた。女史の亭主は一体どんな男だろうと、一方ならず、好奇心を抱いた。ところが、彼女の夫なる仁、ごく平々凡々たる年下のサラリーマンだったので、二度ビックリ。岩井清亭先生も、愛弟子の結婚はちよつと意外だつたらしく、

『どういふ結婚だつたの？』

『先生、私とても普通の結婚できないんです。家庭の妻には、とうていなれませんわ。私、ですから年下の男を、妻にもらつたんですのよ』

『うむ、うむ、それはよかつた』

先生は莞爾として、うなずいた。おそらく、川岸女史の本当の氣持が、わかつたのは、先生だけであらう。





ああ幻滅のベツト

小松 蔦 夫

(教 授)



美田^{みだ}博士は、某大学の動物学教授だった人。博士は現在、ある製薬会社の研究所長におさまっている。美田^{みだ}免疫^{めんえき}学^{がく}説^{せつ}というのは学会でも有名である。

若き日、博士は動物学を収めに、ドイツに留学した。動物学の先生は、シュテングル博士で、美しい令嬢^{れいじやう}——といつても、相当のオールドミス——がいて、彼女と美田博士は、研究室で、机を並べて、動物細胞学の研究にいそしんだ。という、いかにも、

「と云つてもモノはからだ
なみだと云うお話

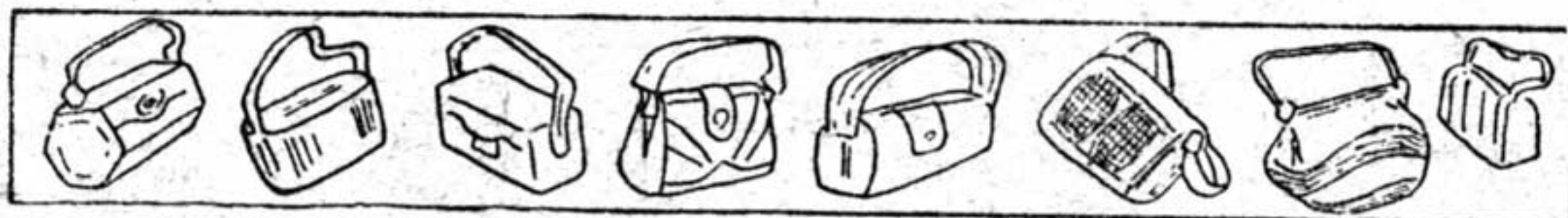
真面目にきこえるが、実はさかんに、いちやついたのであつた。

博士は、さかんにいたづらをした。ブラウスの下から手を入れても腋^{わき}? の下以外には、指をふれなかつたというが、これは眉ツバものだが。

令嬢は金髪美人だから、頭髮も金色、腋毛も金色その粗いかたい毛を、博士はまさぐつたのだ。

『小松君。おどろいたね、たべものがちがうと匂いまでちがうんだよ。バター、チーズ、肉ばかり攝取^{せとく}してるドイツ女のは甘い匂いがするんだ』

『先生、腋の下で、ソナナ匂いが判ますか』
筆者が、うたがわしげにいうと、美田博士はニヤリと笑つて、



『君、野暮はいわんでききたまえな。腋の下ということにしておけよ。どこだつて、いいじゃないか』
『ハイハイ』

話が面白いから、筆者もそしておいた。

——令嬢と、いちやついているところへ、父教授が老眼鏡をキラリと光らせて、はいつてくる、令嬢はしまつたとばかり、顔を赤く上氣させて、恥かしそうに下をむく。

美田博士も、しまつた。バレたかなと、冷や冷やしていると、老教授は、そしらぬ顔で行つてしまう。流石に個人主義の徹底した国はちがつたもんだと思つた。

『それで先生、その令嬢とは何でもなかつたんですか』

『残念ながら、吞舟の大魚を逸したね。マアそれだけさ。貞操は案外かたいンだよ。ソレ以外のことは何でもかまわんだが、貞操だけはダメなんだ』

『好色ドイツ女というくらい、ソノ方は猛烈だときいたンですが——』

『いやね。日本人の女とちがつて、必ずズロースを穿いてるだろう。あれがなかつたらと思うようなチヤンスも、いく度か、あつたンだがネエ——』

美田博士は、残念そうに若き日の追憶にふけりながらいう。

『もつとも、そのころは、僕も初心(ホントですか)だつたんでねえ。いまなら、のがしつこないンだが』
『結局、それつきり路傍の人になつてしまつたんですか』

『ところが、彼女と日本で再会したンだよ』
『いつごろですか』

『太平洋戦争のはじまる前、彼女の夫がナチスの党員で、外交官として、ドイツ大使館に赴任してきたンだ。大使館でお茶の会があつたとき、偶然逢つてビックリしたようなわけさ。僕は彼女が、結婚したのも知らなければ、日本へ来ていたのも知らなかつた。十五年ぶりの再会というわけさ』

『で彼女は、どんな顔を……』

『そりア、君、なつかしがつたさ。何しろ、これの仲だもの』

先生は、指を二本出して、みせたんだから参つた。それから一月ばかりする

と、彼女から手紙が来て日光中禪寺湖の大使館のパンガローにいるから、





遊びに來いといつて來た。

『いらしたんですか』

『行つたね、君、かつての恋人の誘いだもの野暮い
うナ』

夏のことであつた。あれから十数年たつてゐるから、彼女はもう四十を越してゐるんだが、意外なほど若々しい。腋の下が透けて見えるような短いブラウスに、白いタイトスカート、これがまた短かいから、金色の生ぶ毛の光るふくらほぎが膝小僧の上まで見えて、凄まじい色氣を発散してゐる。体は令嬢時代よりひとまわり大きくなつて、腰なんか大木の幹みたいに肥満してゐる。

『御主人は?』

『上海へ出張して、ニッポンにはおりません』

彼女は、油ぎつていて、情慾的な眸で、博士をぢつと見つめた。博士は、色氣に圧倒されて、タジタジとなつた。

中禪寺湖に、ヨットを浮かべて、縦横に水上を滑走した。やがて、たそがれ近くなつた。夫人は、とつぜん、声をひそめて、

『ミダ、わたしさびしいの』

と言つた。若い日の博士なら、そこで慾情して、

夫人をしつとかき抱いて、熱いくちづけをあたえるところだが、相手はナチス黨員の妻で、外交官の家族、ヘタなことをすれば、國際問題を惹起し、ひいては盟邦の間からにある日独關係に、ヒビがはいらないと限らない重大事。美田博士は、生唾をのみこんで、我慢した。

『ミダ、わたし不幸です。夫は不能者なのです』

『えッ』

『今夜、湯元のホテルへ行きましょ。約束よ』

夫人は、そう言いながら、太い逞しい腕を美田博士の首に投げかけてきた。博士は、そのとき、えいクソ、日独關係なンか、糞でも喰へと思つたそりである。

その夜、夫人の運轉するパツカードで、湯元のホテルに行つた。

『どうでした?』

『それがね、君、亭主が使わんなら、処女の筈だらう。ところがだよ。ものは体格並てなことを知つて二人とも落膽して、一度で幻滅さ。アツハツハツハ……』



藥屋氏の奇癖

桐生次郎

(セールスマン)

好きだと云つてもあんまり

無理は云れなさるす



プロパは北は北海道から、南は九州の果まで、足跡至らぬ限もないくらい、全国を股にかけて歩きまわっているから、女にかけては豪のものが揃っている。

製薬会社の外交員をプロパと呼ぶ。宣傳員で、プロパカンダをやるところから、この名があるのだが、プロパといちばん接触の多いのが、大病院のプレさんである。プレさん即ち看護婦で、看護婦をまるめこんでおかないと、いろいろと仕事やりづらい。ちよつとした個人病院でも、数人の看護婦がいて、その上に婦長さんなるオールドミスの小母さまが、デンとみこしを据えている。

小野三郎君という男は、御面相はあまりよろしくないのだが、女たらしの名人で、ゆく先々で、片端からプレさんをものにし、その証據品として、モウを、たくさん集めている。いわば、戦利品である。彼は自宅の書齋に、カギをかけて、時々戦利品を取りだしては、ひとり戦さを回顧するクセがある。パラフィン紙に、一本あるいは二三本宛丹念





にくるんだ幾十組ものえがたい戦利品は、小野君の在りし日の冒険とロマンスの数々を、語るかのようである。

『ほう』

と小野君は、歎息を發した。金色のもあれば、茶褐色、焦茶色、黒色、灰色とさまざまのなつかしさを秘めた中に、可哀そうに三本だけ、焼けて半分にされたのがまじつてゐる。これを包んだパラフィン紙には、K・札幌、一九、何々々、何々々と、記号めいたことがしるしてある。

K・Sは彼女のイニシアルで、札幌の女性で当時十九歳で、何々は何々を意味してゐるのである、小野君の記載は微に入り細に亘つてい。K子は大学病院の看護婦であつた。中肉中背の緊つた体をした美人で、小野君は彼女を口説くのに、相当骨を折つた。

札幌の七月は、東京の五月ごろの陽氣で、夜になると急に冷え込んでくる。小野君は、深夜に看護婦寄宿舎の塀を乗り越えて、窓下に忍びこんで、口笛を吹いた。

『口笛を鳴らしたら、それを合圖に、出て来てくれよ』

と言つておいたのである。ところが、若い彼女は

眠つてしまつたのであろう。何遍口笛を鳴らしても現われない。

ガラリと硝子窓が開いたので、はつと首をちよめて、植込みの影にかくれた。

『何でしょうね、いま時分』

監督の任にある婦長さんの声である。窓から首を出して、闇をすかしてみている。小野君は、こいつで今夜は我慢して置こうと、

『婦長さん、僕ですよ』

あらと婦長は急に羞じらいの色をみせて、ソワソワしだした。窓の上と下で、しばらく珍問答がつゞいたあとで、まもなく婦長は、裏口の戸を開けて、自分の部屋に、小野君を連れこんだ。赤い顔をした肥つた三十七、八になる婦長は、おそらく生れてはじめてなのだろう。小娘のように上氣し、息をはずませ、体をワナワナふるわせていた。

その晩、小野君は、代替品で、我慢して旅館へ戻つた。そんな景物があつたあとで、小野君は、K子を定山溪温泉につれだすことは成功した。婦長のオールドミスとちがつて、彈力に富んだK子のみづみづしい肉体は、小野君を狂喜させた。

K子も、小野君が、はじめての男性だつたので、



熱をあげてしまい、二、三回寄宿舎の塀を乗り越えて、小野君の旅館に忍んできたが、さいごに婦長に捕まつて、K子が白状したものだから、婦長は嫉妬も手傳つて、カンカンに立腹し、K子に誠にされ

た。小野君は、後髪をひかれる思で、東京にかえつて来た。K子という女は、妙な女でそれ迄になつていながら、どうしても、小野君に証據品を渡さんというのである、がどどのつまり強引な小野のたのみに自分で取つて渡すということになつた。

その年の秋、再び小野君は、北海道に出張した。

K子のみづみづしい肉体と、記念品に未練タツプリの小野君は、ついにK子の居場所をつきとめることができた。K子は、夏のおわりに、札幌近在のお百姓の家へ嫁いでいたのである。小野君は、裏切られたやうないまいましたをおぼえたが、ドンファンの小野君にとつて、人の女房であるなしは、問題ではない。押しつよく、桑園という駅で降りて、彼女の家へ押しかけた。

『あらッ』

とK子は叫んだ。亭主は野良仕事に出ているらしく、頑丈なバラック建れの家には彼女一人だつた。

いまは、人妻の彼女は、かなり警戒的な態度を示した。

『いつかの約束を果たして、貰いに來たんだよ』

『あら、いやだわ、そんなこと』

とK子は、頬を赤くして言つた。

『いやなのかい。今日は、むりでも約束を果たすつもりで來たんだ』

『いやよ。おことわりするわ』

『そんな冷酷なこといわんで——』

押し問答をしているうちに、裏口から鎌を提げた大男が、ぬつとはいつて來た。

『こらッ』

と怒鳴つた。小野君は、蒼くなつて逃げだした。

それから、四、五日すると、K子から旅館あてに手紙が來た。それにはこう書いてあつた。

(御約束の品同封しました。夫に話したら、ひどく立腹して、そんな約束果す必要ないといつて、無残にも、お灸をすえられて、焼けてしまつたのこれは焼け残りの貴重品です。大切に取扱つて下さい、かしこ)と。





ストリップ小屋

大木啓太

(編集者)



あんまり夢中になる
なんてゆアレに、える話

『おゝい啓さん、ストリップ探訪を一つやつてきてくれんかね』

春の陽射しが、硝子窓越しに入ってきて、うつらうつらと好い氣持になっているところへ、編集長のガメさんの大声がした。

『うわッ!』

机に片肘ついて、少々よだれなどを片頬に傳わらせていたところだったので、僕は思わず素ッ頓狂な

声を上げて立ち上った。

編集長のガメさんはもうそろそろ四十に近い人で本名は齊藤さんと言う至つて平凡な名前なのだが、大酒飲みであるところから、ガメさんと言う綽名がつけられているのである。

いくら飲んでもシャーシャーとしている人のことを「泥亀」と言う、そのガメさんなのだ。

『はゝゝゝ野郎、いゝ若い者が寝ぼけていやがる



しつかりしろ』

ガメさんは、僕が立ち上ると笑いながら、怒鳴るように言つた。

『何ですか……』

『ストリップ探訪をやつてきてくれと言つてゐるんだよ』

『えッ、ストリップ探訪？』

『いやか、いやならいゝよ、他の人に行つてもらから……』

『いゝえ行きます』

僕は慌てゝ言つた。探訪費もらつて、ストリップ見て、そしてこれが仕事になるなら、こんなうまいことはないわけであるからだ。

それに探訪費の出しによつては、昂奮のあとの一刻、一パイやることも出来ると言ふものだ。

『ホイ、それじゃ、これ持つて行け……』

ガメさんは、僕が近寄つて行くと、封筒を眼の前に放り出した。手にとつて中をのぞくと千円札が二枚。莫迦に奮発したものだ。

『東京中の小屋を全部ですか？』

『冗談を言えよ。浅草のトルコ座だけでいゝよ』

『何か特別ながあるんですか？』

『ふゝゝゝ、昨日あたり迄は至つて神妙にしてい
て、客の入りが思わしくないので、今夜はワツとく
るところをやると言うからね』

『そんな情報が……』

『まあね』

ガメさんがニヤリとした。これでは、今夜はワツとくると云う情報が入つたのか、それとも入らないのか、はつきりとはしないが、地獄耳を自慢のガメさんのことだ、多分入つたのだろうと推察して、僕は頼のよだれを拭きとつて表へ出た。

まだ三時、表は春風に浮かれた陽の光が、ビルの屋根にはためいている旗にからんだり、道行く娘のスカートに一寸悪戯を試みたりして、のどけさこの上なしであつた。

僕は、その中を浅草に向つた。

考えてみれば、ガメさんはストリップ探訪をして来いと言つただけで、別にこれと言う、アイデアを出してくれているわけではないのである。

それならば、樂屋と舞

台と両方にかけて、丹念に探訪することが、この

際忠実な探訪記者と言ふ





ことになるわけなのだ。

そう思つたので、浅草へ着くと、六区の通りを人にもまれてブラブラしながら、一應樂屋から攻撃することになり心なきめた。

『今日……』

と樂屋口へ来ると、僕は小父さんに一寸挨拶をして中へ入つた。一番奥がピカーストリッパーのシール・小月の部屋になつてゐる。このシール・小月には、前に二三回逢つたことがあるので、都合はよかつた。

『あら、何か御用?』

愛嬌のいゝポツチャリとした身体（もも）の持主（し）のシールは、僕が入つて行くと、手にした黒いものを、慌てゝ後にかくして言つた。

『今夜は、トルコ座の探訪ですよ』

『エロ探訪?』

『冗談じゃない、神聖なる女体露出の探訪ですよ』
『そう、まあ夜の部までは、まだ大分間があるからゆつくりしていきなさいよ』

シールはその言うと、後にかくした黒いものを、手の中にもるめるようにして、横の木箱の中へ投げ込んだ。

豆実話



○：女湯でチヨイチヨイズロースなどなまめかしいものが盗まれ「ストリップじゃ歸れないワ」と非難エウゴウに番臺さんたちが必死で張込み十日目に板の間をつかまえた

○：澁谷區上道り四の五錢湯「薰風泉」で、一日午前一時十分ごろそろそろ閉店しようとしたとき入つてきた十五、六歳の少女のズボンが、十日ほど前に客が盗まれたというズボンにソツクリ、番臺さんたちが少女を問い詰めたところズボンやズロースを盗んでいたので澁谷署とを白したので澁谷署

員に引渡した

○：この少女は岡町某ソバ屋の店員K子(一六)で「あたしアレだつたのでつい……」としおれていた

○：夜の街で稼いでいる日より警察にバクられてる日の方がはるかに多くて商売にならないとこぼしていたパンパン嬢がまたまた小菅から出てきて二日目の十五日夜、売春現行犯で丸ノ内署に捕つた

○：女は江東區北砂町五丁目の銀座の姐さん、オトリきんと澤崎裕子(二八)で廿三年以來警視廳はじめ都内盛り場の警察に捕ること廿數回
○：きのうも夜九時ごろ日比谷公園でアメリカ兵に「五百圓で二回OKよ、アタイの愛の狭谷は味がいいんだから……」と金を貰つたところを御用



さて、ゆつくりしろと言われても、十分も居れば妖し氣な樂屋の雰囲気にはうつつとしてしまふ僕であるから、何時迄も居られるものではない。何かその黒いものが氣になりながらも、僕は一度表に出てくるからと言つて、出ていつた。

七時から、シールの特別出演による、女のキリキリと言うのがあるので、僕は客席にその時間になると入つて待つた。

シールは、妖氣を舞台一面に撒きちらしながら、女のキリキリを踊りはじめた。女にのみ通ずる一年中のキリキリ舞いを、舞踊の型で演じるわけである。そして、最後に近く、どうしたことが、シールの三角地帯を覆つていた小さな三角の布が、眞正面を向いたまゝ、糸が切れたようにペラリと下に落ちかゝつた。

『わアッ!』

と客席から一齋に叫び聲が上つた。その声は、昂奮と感激と、それに動物的な交配期の慾情が入りこんでいるような感じがした。

瞬間、場内の電燈がパツと消え、人々の臉の裏には、三角の布の外れたあとの、妙にドキツイ黒い印象だけが強く残つた。

僕も實際のところ、こりやア凄いと想つた。三十秒もしない中に電燈は再び客席を明るく輝し、たゞザツザツとした氣配だけが、客席に残つてゐるだけだつた。

僕は客席を出ると、早速樂屋に行つた。

『やア、大変な失敗だつたね』

シールの部屋に行くと、慰さめるとも、賞めるともつかずに言つた。

すると、シールのマネジャーの鈴木氏が

『これだよ……』

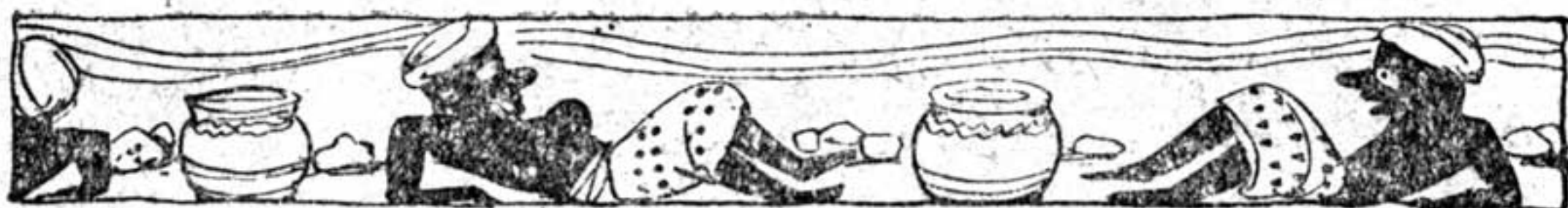
と黒いもを見せた。何とよく見ると、それに水泳などで少年達が用いているパイフ（水泳ふんどし）ではない。

『あゝ、なるほど……』

僕は、それを見ながら、思わず唖つた。臉の裏にいと生々しくうつつた黒い印象は、前々から、このことを承知して用意してはいた。このパイフの黒い色であつたのだつた。

シールは、僕を横目で見ながら、たゞニヤニヤとしてゐるだけだつた。





男にまわしを取られた話

芳谷妙子

(娼妓)

(仮名)



酒の上とは云いながら

どつちもどつちだと思ひます

なく、さア今夜こそはと張切つていると、八時頃になつて、オール客が一人つききました。

シヨートで身体をくたくたに使つてこまかく稼ぐよりも、この時間頃から、少々張り込んで、一晚遊んでくれる客の方が、オンの字ですから、私は早速自分の部屋へ案内しました。

馴染の客なら、成可く無駄使いをさせないように努力をしますから、たまにはこう言う客のあらわれしてくれるのが、有難いのです。

『酒を持ってきてくれ……』

客は部屋に連れて行くと、どつしりと構えて、こ

う言つて、氣前のいゝところを見せようとした。

何しろ私達のところへ来る人は、そのものズバリの一辺倒つていうんですが、それつきりほかには別に用のない人ですから、これと言つて珍談も何もないんですが……、

この間は少々驚きましたよ。

やつとこれから暖かくなるかと思つていた、雨が二三日続いたあとでした。

雨の降る日は天氣が悪いの道理で、客足もあまり



此処へ来れば、たゞ黙つて抱いて寝るだけが多いんです。

何故と言うと、此処で飲む酒は、普通の二倍位するんですから、あたり前では莫迦々々しくつて飲めるわけがないんです。

もう一本、もう一本で、七本も飲んでから、客は布團へ入つて私を待ちました。

威勢のいゝ人で、こつちは一寸こたえましたが、しかしさつぱりしたと見えて、ぐうぐうと寝込んでしまいました。

こんなときには、うまくすればもう一稼ぎ出来る。私はそう思うと、そつと服裝を直して又店へ出ました。

だが、思つたようにはいかず、十一時過ぎになつて、部屋へ戻つて客の布團の中へもぐりこみました。どの位寝てからでしょうか、不圖私は客が起きて行くのに氣がついて眼をさしました。

酔つぱらつていますから、ふらふらとしながら襖を開けて出て行きました。私は便所へでも行つたのだらうと思つて、別に氣にもしませんでしたが、そのとき、隣のみどりさんの部屋でも襖を開ける音がしました。

しばらくしてからです。何かみどりさんの部屋でざわつくなと思つていましたら、襖が開いて、客が入つてきました。

私は帰つてきたな、と思つたので、そのまゝ眠つてしまいました。すると曉方になつてサインがありましたので、私は習慣的にひよいと客の顔を見て驚きました。

『あら……』

思わず言つてしまいました。

『ふゝゝゝゝ』

いゝ氣なもので、私の客でなく違つた客が笑つていて、それも平氣なんです。

『どうしたんでしょう』

『交換なんだよ』

『えッ交換？』

『そうなんだ』

『莫迦々々しい、一体どうしたんです』

賣り物買物でも、人間は人間です。納得がいかなくは、妙な氣にもなれませんか。

『まアそう怒るなよ。ゆるべ便所へ行つて帰つて』





きたら、俺の部屋に男が居て寝てるんだよ」

『へえ……エ』

『それが君のところのお客さんなんだ。酔っぱらって起きやしないし、女ももうどうでもいゝと言うんだ』

『まアみどりさんが……』

『みどりッて言うのかね、あれも僕が上るときから酔つていてね』

『ふうん……』

みどりさんは、酔っぱらうと何でもいゝと言う性質があるので、さもありなんでしょう。

『それでね、僕はあの男の代りに、お前のところへ泊つたと言うわけさ。泊つた以上は、責任もあるしね、それに権利もあるサ』

『そうね』

『と言う次第さ、悪いと言えば、お前のお客さんの方だ、僕は犠牲者なんだから……』

こうなつては、諦めが肝心です。

夜が明けてから、二人の客はそれぞれ、本当の自分の部屋へ引きあげて、服を着換えて帰つて行きましたが、私はこんな莫迦な目に逢つたのは生れて始めて。

豆実話



○：五日夜十時四十分
ごる世田谷署上馬一丁目
交番に青ざめた一人の男
が現れ「私の女が自殺し

女がまわしを取つた話は、昔からよくあつたと話も聞いたし、今でもそれ位にしなければ嫁ぎもあまりありませんけど。

それが、客の方にうまくまわしをとられたんですから、こればかりは、あまり自慢になる話でもありませんが、風変わりですから、御披露したんです。

今では、すっかり馴染になつて、一週間に二度位来ることがありますが、来るとみどりと二人で、チヤンとサービスすることになっているんです。

これも考えてみれば妙な話なんです、仕方がありません。それでなければならぬようなことになつてしまつていくんですから。

ました」としよんぼりしていた

○：この男世田谷区野澤町一の八八会社員佐本博三さんで品川区大井町一〇三八鳥山初子（三三）という二號を團つて楽しんでいたが、昨日五日鳥山さんは本妻和子さんと「あの方は私のもの」と喧嘩を始め本妻の勝利となつて負けた初子さんはその場で口惜しまざれに服毒自殺を遂げた



天晴れな武器

北 一 郎

(外交官)

外交官は頭だけでは
務まりませんゾ

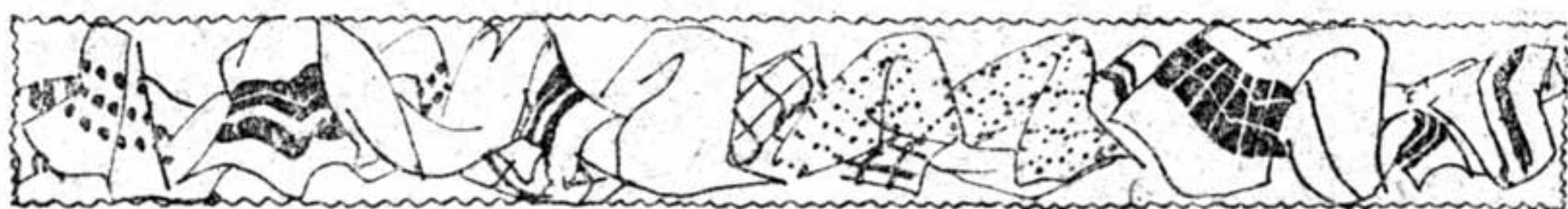
日本人は花の巴里では、まるつきりお江戸へ出てきた丹波篠山の山家の猿同然、ドギモをぬかれるばかりだ。

ハダカ屋というのがある。いまのストリップの元祖で、妓樓ぎろうをかねているのだからそこへ沈没した。ある夜氏は、單身そこで遊んで、ハイヤーを飛ばして、シャンゼリゼーへ出た。実は、ハダカ展の女たちが、あまり露骨で、ドギついので、到底彼女たちと取引する氣がなくなり、氣分轉換をはかるべく、パリでいちばん美しい街に出てみたのである。プラタナスの木が、夜もみどり色に輝やいている。キヤツフエはいつて、濃いヨーヒーを飲んでいたら、姉妹とみえる二人の令嬢ふうの女が、ボーイに紙片をもたしてよこした。みると、鉛筆のはし



しばらくソ連大使館の参事官をつとめ、太平洋戦のはじまるころまで、アフガニスタンの公使をしていたS氏から聴いた話。日本帝國を代表する公使になつてからは、風流譚ふうりゅうだんのタネはないが、書記生や参事官補時代に、ヨーロッパ各地をウロチヨロし、さかんに金髪、鳶色、銀髪美人を泣かせたそうである。パリあたりの青線？ 区域は、到底東京の比ではない。モンパルナス一帯の夜の觀樂境のにぎやかさ。





りがで、

『お一人で、おさびしそうですが、よろしかつたら
妻たちと合流なさいませんか?』

とかいてある。ニッコリうなずいてみせると、彼女たちは、早速S氏のテーブルに移ってきた。パリのキヤツフェは文字どおり、コーヒーを賣る店で、天氣のいい日は、街頭にまで店がはみだす。ビールを飲もうと言つて、レストランへ連れこんだ。

姉は金髪で妹は鳶色の髪をしていた。インフレに悩んでいるフランス人は、めつたにたべられぬような料理を、御馳走したので姉妹は大よろこび。アルコールがはいれば、舌の廻轉もなめらかになる。

『ムツシユーは、日出ずる国のプリンスでしよ?』

S氏は、宮さまと間ちがえられたかと、一度はあわてたが、それは彼女のお世辞であることが、まもなくわかつた。

『日本の男の方は、アノウ立派なカラダをお持ちそうですね』

『それは、何を意味する御言葉でしよ?』

『オツホツホツホツ、妻たち日本の素晴らしい芸術ウキヨエをみて驚歎の念を禁じえませんか』

『ウキヨエというのは、男女がたわむれている絵す

なわち春画のことですか』

『左様々々』

『アツハツハツハツ、あれは極度に誇張されて、おりますので』

『まあ、奥床しいわ。御謙遜で——』

『いえ、本当です。とつても、フランスの殿方にはおよびません。俗に椎の実と何やらと申しまして、われわれニッポンの男の子は、押しなべて』

そう返事をしながらもS氏は、上品な令嬢のクセに、平氣でワイ談をするから恐いつた、こういう女性こそ、いまフランスを風靡している半処女というのだろうと思つた。いつたい、どこまでが処女で、どこからがド・ミヴィエージュ(非処女)なのか、つきとめてみたい好奇心に、駆られたが、相手が一人ならいいが、二人ではいかな豪のモノでも手のうちようがない。その夜はあきらめた。

がS氏は大いに得意だつた。外交官は勿論、パリの日本人は、大概が娼婦か、さもなければ、シロウト女性を相手に、フランス女と恋の勉強をしているのに、S氏だけが、良家の令嬢姉妹と恋のうま酒に酔つている。

『ムツシユー、ニッポンの外交官には、お休暇はな



インですか』

ある日姉嬢がいつた。

『ありますとも、いつでもとれますよ』

『私、リヴェイラへ行つてみたいわ』

と意味深な目つきをした。

『行きましようか、でも、貴女は？』

『僕は自由です。あなたと交際つてゐること、父も

承知しております』

『それじゃア』

というので、地中海に面したリヴェイラの海岸へ出かけた。ニースの丘の上のホテルで、令嬢は頗る眞つ赤に染めながら、S氏にすべてをゆるした。

フランス女性の豊艶さを満喫したS氏は、天にものぼる心地で、パリへ歸つてきた。

『矢張りニホンの男性は、素敵でしたわ』

『では、マドモアゼル、貴女はほかの国々の男性をも御承知なんですか』

『あら、妾はじめてですよ。ござんじのくせに』それから暫らくすると、妹嬢が北のシユプールの海岸へゆきたいと言いだした。フランドーの牧草萌ゆる丘で、二人は抱きあつて、熱烈なキスを交わした。妹嬢は、姉にくらべると、十倍も体が柔軟で

ふつくらとしていて、S氏はよろこびのあまり、体が溶けてしまいそうだった。

姉妹の友達や、若い叔母たちまでが、あらずつてS氏のまわりに集つてきた。日本人の魅力がなしたわざか、毎日のように暴落するフランスのために生活の窮迫を來たした彼女たちが、急に富豪のような生活をはじめた、日本外交官の円の魅力にひかれたのかよくわからない。

流石のツワ者S氏も、くたくたに疲れきつた。ある日、大使館の一等書記官がS氏の耳に意外なことをささやいた。これこれいう姉妹令嬢とつきあつてゐるかと思ひ、うなずくと、

『S君、あの姉妹は、フランス外務省の秘密情報員なんだぜ。まさか、大事は洩らさなかつただらうね』

『えッ、本当ですか』

S氏は仰天した。幸い日本男子の武威を輝やかしただけで、国の秘密は洩らしていなかつた。

が——間もなくS氏に、英国へ轉勤法令が出た。



紳士の蒐集癖

代々木 眸

(三 助)



『あんたが、お風呂屋の番頭サンですか』
『さいでこいます』

長吉君は、はじめ税務署の役人かと思つた。鼻下に美髯をたくわえている。年輩は四十を越した人品骨柄いやくない紳士。

『あんたに実は、折入つてたのがあるんですが』
十日と十五日が円湯の休みの日。若いひとり者の長吉君は、近くのパチン屋で、パチンパチンと玉

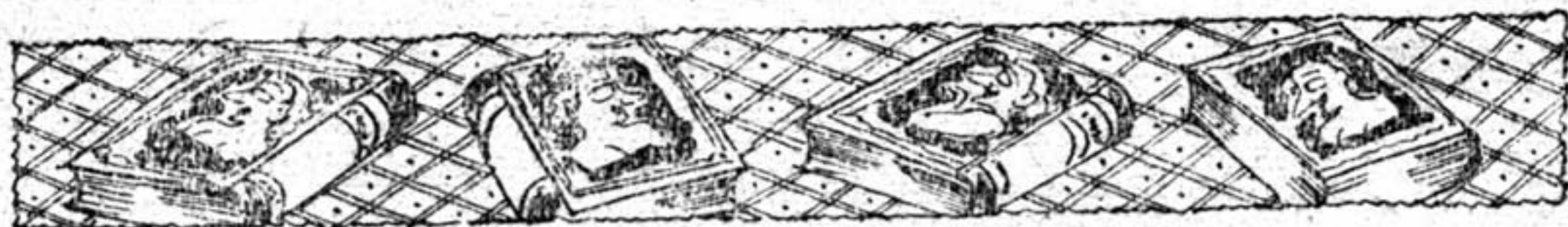
をはじいていた。

台の上から、お君ちゃんというパチコ娘が、顔を出してニツコリ笑つた。若い娘に限らない。中年の人妻もそうである。長吉のお風呂屋へくる女は、みんな長吉にたいし、馴れ馴れしい態度をします。

考えてみれば。風呂へゆくたんびに、長吉君にだけは、お医者と亭主(人妻の場合だ)以外に見せたことのない肌を、隅から隅まで見られているんだから、特別に親しみの感情をいただくのは当然である。なかには、始終背中を長吉君に流させているお妾がいて、彼女は見えなくていい場所まで、ワザワザ長吉君にみせ、色つばいふくみ笑いをして、長吉君を誘惑する。

髯を生やし大紳士は、長吉君が玉をはじいている

捨てる神もあれば拾う神もある
物はそまつに出来ません



隣の台で、これもパチン、ザラザラとやつていたのである。

『え、何でしょう』

と長吉君は、玉をはじく手を休めて聞いた。紳士は、ニコリと笑つて。

『どうです。この近所でお茶でも——』

どうせ、ろくな喫茶店はなかつたが、変なレコードをかけてる騒々しい一軒へ、二人は這入つた。この女の子も、長吉君には、とても愛想がいい。

『あらいらつしやい』

彼女は、あるべきところにないのである。その秘密を長吉君に知られているので、頭があらがない。せいぜい御愛嬌をふりまく。

『私は、つまらぬものをあつめるクセが、ありましてね』

紳士は言つた。

『何ですか』

『実は毛なんです』

『毛？ かもじ屋さんですか』

『そうじゃアない。コボレ毛を蒐集してるんです。お風呂屋の番頭さんに、協力してもらわんと——』
『はけアん、すると……』

そこへ女の子が、コーヒーを持つてきた。その子の顔をみて、長吉君はクスリと笑つた。女がみんなこの娘みたいだと、髯の紳士の蒐集は成立しない。『うちの裏口のドブへ来て、ごらんなさい。いくらでも落つこつてますよ』

『いやそれじゃあだめなんで』

紳士はあわてゝ手を振つい。

『男のコボレには、私は興味がない。女の子のものが専門でして』

一寸得意そうにした。アソマリ自慢になる蒐集でもなさそうだが、マニアとなると誇りをもっているらしい。

『年敵、名前、娘さんか奥さんの区別がわかるとなおよろしい。そういうやつが欲しいんです。一筋十円拂います。どうですか』

『十円？』

『えゝ、まアそんなことは、あんまりないと思うんですが、もし、有名な女優さんや、歌手のモノだつたら、百円拂います。人によつては千円拂つてもいいですな』

紳士はいささか昂奮の





面持である。長吉君は、大して悪いことでもないと思つたので、承知をした。紳士はよろこんでかえつて行つた。

『輕はずみだつたかな』

長吉君は、あとで後悔した。だれのだか、わからなくていいんなら毎晩お湯を落すとき、流し場の隅の金網の上に、こそつとかたまつてゐるが、これだれちやんのということになると、判断がむづかしい。『だが、約束した以上は、仕方がねえ、やることにしよう』

翌日風呂屋が開いて、眞先にはいつてきたのは、附近に住むお妾さん。長吉君にいつも背中を流させる色つぼいしぐさをする彼女である。長吉君は今日特に念入りに磨いてやつた。

お妾さんの背中を洗つてゐると、三人ばかり女給さん達がいつてきた。彼女たちがペチャクチャお饒舌りするので、名前は大体わかる。風呂桶を片づけたら、流し場を洗らふりをして、コボレを採取した。お妾さんのはえ三筋ひろつた。彼女は、赤白系統だから、すぐわかるのだ。

女学生、子供連れのお内儀さん、お婆さん、夕方が近づくにつれて、混んでくる。急に入口の方が、

賑やかになつて、すばらしい女性がいつてきた。『うちのガス風呂がこわれてしまつて、当分お宅の御厄介になりますわ』

玉をころがすような美しい声。近所に住む園田みはるといふ人氣歌手である。

『ホイしめた』

長吉君は、胸算用をした。彼女のなら一筋三百かいや五百円ぐらいには値がつけてもらえるかもしれない。

園田みはるの裸になつた姿は、パチンコ娘のお君ちやんほど、素晴らしくなかつたが、長吉君は、鵜の目鷹の目である。

『あら濟みませんわね。背中流して下さるの』

彼女に無料サービスのつもりだつたが、百円札を一枚くれた。コボレ二筋採取。一週間後には相当なまつた。ちよつとしたお小遣いができそうである。約束の日に紳士は現われない。現われぬも道理、残念乍ら彼の好漢覗きか昂じて、警察へつかまつたしまつたのである。だが、その蒐集癖をこれがキツカケで長吉君が引きついだ……くしき因念である。



右と左の珍々譚

笹川アーデン

(美容師)

暇があっても、あんまりな

話しはよして下さい

と揃えてはございますが、それはそれ女三人よればの例にもれず、目より口を動かす方がおたのしみのようにおみうけして——ついお相手をして、つまらないおしやべりばかりをネ。

お若いお嬢様方は別として、中年の奥様ばかりのときの賑やかなことは、とても殿方の想像外と申してよろしいくらい。

『ナニナニの奥様、大分近ごろオカブをお買いぞアますそうで』

『あら、いやぞアますわ、ソレソレの奥様、少々お口よごしの程度で、日本テレビを千ほど買ったただけぞアます』

みなさま、それぞれ(お株の)はなしで、私などはじめ野菜のオカブかと



困りましたわネ、何かからお話していいんでしようござんじのように私どもはお客商賣ですから、お客さまのわるくちはとても申し上げられませんが、何でもよろしければ、とりとめもないおしやべりで、勘弁させて頂きますね。

殿方の調髪でも同じように、奥さま方のパーマをおかけになるときは、ただ坐つていらつしやるんですから、とにかく御退屈でしよう。雑誌なんか色々





まちがえたくらいでございますのよ。

お金のはなしが、お料理のはなしに変わりました。次はお色氣ばなし。みなさま、その方では永年ごくろうなさつていらつしやいますので、お上手なおはなし。私などは、おはなしを伺つておりますと、未^ま熟^{じよく}な自分に愛想^{あいさう}がつきるように、いえ、本当でございます。

女は天性、受動的な生活ばかりしておるので、内攻するのかわかりません。こんなときには、本当に赤裸々になるようですわ。同性ばかりですし、みなさまよくおわかりの方ばかりですもの、遠慮もいりませんしネ。

この間も、こんなおはなしが交わされたのでございましてネ。

ナニナニの奥様が、ソレソレの奥様に、

『ねえ、ソレソレさま。お宅の御主人、ぎつちよでいらつしやいますつてうかがいましたけど、本当さアまして』

するとソレソレの奥様は、とてもおおどろきになりました。

『あーら、どなたがそんなことをおつしやいましたの。とんでもないそれは大まちがいさアますわ』

『あら、それは失礼いたしました。私もネ、まちがいではないか、と思つたので伺つたわけさアますの。おゆるしあそばして』

『いやさアますわ、おゆるしなくて、言葉のアヤに一々あやまつてらしつたら、大変さアましよう』

ところがここで、ソレソレの奥様が、何を思い出されましたのか、クスリとお笑いになりましたの。

そして、

『ナニナニさま。何故、奥様が唐突にも、そんなことをおたずね下さつたか、私にやつとわかりましたの』

『おわかりになりましたつて、私のことさアますの』

『宅の主人は、別にぎつちよだから、あれを左のズボンの方へいつも入れてるわけではないのですわよ』

『まア、そうですの』

『そうですのつておつしやつて、お宅の御主人は、いつもどつちのズボンに入れていらつしやるか、ござんじございませんの、奥様つたら』

『え、特別に注意して、ズボンを穿かせたこともございませんでしよう』

『いやさアますわ。宅だつて上衣は着せたりいたし



まして、ズボンまで、ほ、ほ、ほ』
『駄目ですわ、奥さま、おとぼけになりましたしも、私
ちやーンと存じておりましてよ』

『何を御存知?』

『ほ、ほ、そうむきにおなりにならなくてもよろし
いの。壁に耳ありですもの、とつくりと御自分でお
考えになつたら、お思ひ出しになりませんか?』

ソレゾレの奥様はここで、しきりに考えとまれて
いらつしやいましたが、何を思ひ出されたのか、急
に顔を眞赤になすつて、

『おどろきましてよ。冗談じやありませんわ。今は
そんなこといたしませんけど、十年ほど前には、た
しかに』

『ござんしよう。お仲のよろしいこと』

『おつそれいりました』

私、聞いていて、何が何だか分りませんでしたの
もつとも、あとでナニナニの奥様にうかがいました
ら、ズボンの下のものにも何にか穿かせてさしあげ
たおはなしだつたそうで、聞いている私も、赤面い
たしました。

お二人のおはなしは、それから一件も一体ズボン
のどちら側に置くのが正統であるかの論議がはじま

りまして、

『私は、左の方が正しいと存じますのよ』
行きがかり上と私は思いました。ソレゾレの奥様
は、

『いいえ、手でも右をつかうように、仕事の便宜上
右の方へおく方が当り前でしてよ』

『いいえ、左の方ですわ』

『ちがいましたよ、右が理想さアますの』

どうも、雲行きがおかしくなりはじめましたから
私、中に入りまして、どちらでもまちがいはござい
ませんでしようと申しますと、二人は口を揃えて、
『では笹川さん、お宅の御主人は左の方ですの、右
の方ですの』

つておつしやいましたから、お二人の御機嫌もと
るつもりで、

『宅はいつも中立さアますの』
つて申しましたら、二人とも、うらやましいな
ンて、私、はずかしうつて……。

そしてあまり氣を
取られ、毛を少し
コガしましたワ。



一人にかざるお話

相馬千恵子

(映画女優)

ても慾のない話などとは

申さず聞いて下さいな



ところが、撮影所に居ますと、滅多な事では、旦那を貰う気にはなれません、と云うのは、あんまりいろんな例がありすぎて、それを年がら年中、眺めさせられるからなのです。

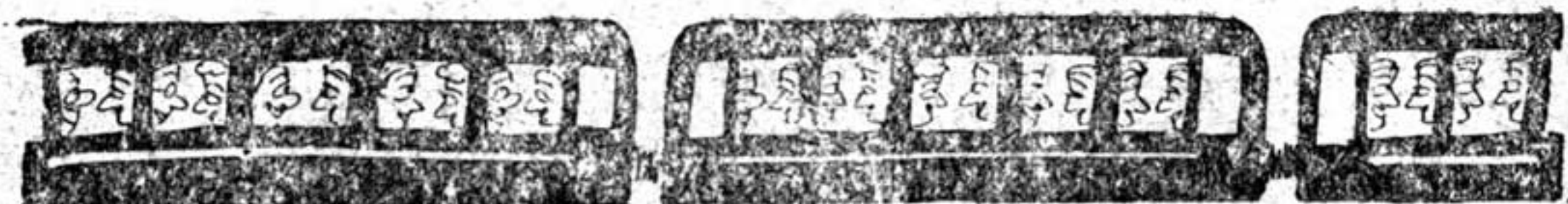
眞面目で善良な青年が、女優さんと結婚したばかりに、

『俺の月給なんぞは、女房の一時間にも当らねえや』

と、ヤケを起し、おまけに、不規則な夫婦生活から、やつてくる、トラブルが原因で、旦那様の方が女を搾えたり、妻君の会社からお金を前借りしたりして、結局、一生をメチャメチャにしてしまつたり

『何時迄も独身で、生娘(ナマムスメ)じゃあ御座いません』みたいな、顔をしてないで、いい加減に、旦那(旦那様)を貰えよ』

とどんな、女優さんでも云はれます。お嫁に行けよでなくつて、旦那を貰えよと云うのは、一寸、変に聞こえますが、大体、女優という商賣の収入の点で、大抵の場合は、旦那様より、収入が多い方が普通なんです。



する例がとつても多いんです。

なかには、大変なヤキモチ焼の旦那を持ったMさんなんかは。

年中生疝が絶えず、その上に、撮影の時にも付きつきりで、文句を云はれ、多勢の人前で叩かれたり他の方で涙がこぼれた事さえあります。

『恋愛は楽しいけども、結婚は嫌』

という人がほとんどなのは、当り前かも知れませんが。

だから『恋愛して芸の巾を拡げなさい』なんて云はれるのは嬉しいけれども、自然に恋愛感情が湧き上つてくるまでには、時間がたつてしまいます。

同棲生活をしている人も随分居ますが、結局は別れてしまいます。そして、もうコリゴリだと、同じ言葉を聞かされます。

撮影所には、オールド・ミスが多いのは、こうした訳かも知れません。

又、逆に、旦那の方が、女優さんに無理矢理に結婚させられて『なんとか、一人になりたいモノで』と、青い顔をしている男性もいます。

逃亡する事、二十何回、そのたんびに、警察に捜索願いが出されて、引き戻され、それが度々重なつ

たので、精神異常者だなんて凝はれ、精神カンテイを受けさせられたりして、

『首でも吊るより、仕方がありませんよ』

と、涙を流しているのには、夫婦生活を知らない私達は、ギョッとしてしまいました。

又、こんな例もありました。

『僕はどうしてもF子と一緒に暮せない、なんとか別れたい……』

そこで、撮影所の皆さんが、ない智慧を絞つて（御免あそばせ）『君が、恋人を作ればいいんだよ、そうすれば彼女の方も、あきらめるよ』

と、云う訳で、ニューフェイスの、Sちゃんが、この後をフリ当てられ、F子さんの前で、彼氏と、語らい、大いに甘いところを見せましたが結局大した効果がありません。

その場合、Sちゃんが本気で彼氏に、まいつてしまい。とうとう、F子さんの家まで押しかけて行き三人で生活するようになりました。

Sちゃんを推薦した、会社の人達は、これはえらい事になつたと、Sちゃんを本心に立ち返らせ





ようとなりましたが、後の祭りで、ただもう夢中。

そんな、妙な生活が一ヶ月も続きましたが、ひよつくり、Sちゃんが青い顔色で、フラリと現はれ、

『どうしたい、で、彼はF子と別れたの』

と、訊ねますと、首を横に振つて泣きくづれてしまいました。

『結局。私はだまされたのよ、何故つて、F子さんも、アノ人も、グルで、変体生活を望んだのよ』

と、妙な結果にないてしまい、F子さんや、彼を掴まえて、皆さんが、難詰すると、

『とんでもない、僕は本当に、F子と別れるつもりだった。ところが、S子と出来てからF子の態度が

とつても、やさしく、濃厚になつてきて、今更、若いS子と恋愛を続ける氣がなくなつた』

と、云うのです。男の氣持つて、どうしたものなんでしょう、それにも増して、不潔だつたのは同性のF子さんですよ。

Sちゃんは、それ以來、火焰ビンとニック・ネームをつけられる程の、燃えやすい、女に變つてしまいました。

最近、聞いた話ですが。

Qさんは氣サクで面白い衣裳屋さんなんですが、

○：売春現行犯でつかまつたバンバン嬢らが係官に解する手はいろいのあるが、これはさすがの係官も吹き出した解のケツ作

○：とところを檢舉されたと解は「黒チャンがアタイにチヨコレートをあげようといつたので、サンキユーサンキユーといひながら二人で五分ばかり、そしてお禮にキッスを一回だけしてあげただけなの」

とても浮氣つぽくつて、奥さんを泣かせ通し。

そこで、奥さんがいろいろと考えた揚句の果に、

Qさんの表札をハガしてしまつて。

その後、『私の大好きな人の表札を出すワ』

と、仰言つて『森雅之』さんの名前を出しました。

憤慨したQさんが、いくら捨てても、すぐ、又、出る仕末。とうとう、Qさん奥さんの前に、平あやまりに詫まつた相うです。

どうして、男と女とは、こゝろも、うまくいかないのでしょ。随分、巧くいつてると思つて人々が、ヒョイと別れてしまふのを見ると、一人寝の寂びしさは、あつても、一人にかぎりますわ。つまらない、話で、恐縮です。



オイランのせいに非ず

秋風亭流橋

(落語家)



近頃は、年でございまして、とんとからきし意氣地がなくて、我ながら、あゝ老いたり、つらつら悴をながめては涙しておりますが、それでも、若かりしころは相当なもんだったんでございますよ。

今とちがいでまして、吉原にはオイランと申しますイキのよい御婦人がおりましてな。雪のふる晩など今夜あたりは、きつとひまで、今夜こそは絶対絶命もてることうけあいなしつて、大急ぎでまげるもの

たまつて、たまらなかつた
と云つても、これは又
ひどすぎます

をまげましてな、一杯ひつかけて繰りこんだもんです。ところがいけませんや。あつしと同じように、今夜くらいもてるだろうつて手合が、わんさとおしかけてやがるんで、お定まりのまわし。何しろ、本部屋へ入るだけのネタがねえんですから、誰にも文句がつけられせん。

『ちよつと下へ行つてきますから、待つててね』
てな具合で、ボンボンと蒲団の上から叩いてく





れるだけで、行つたきりすずめなんです。

場所がイキなところですから、おい、どうしたんだ、オイランはいわえのか、なんて佐野次郎君みたいなヤボがいえねえ悲しさ。

待てどくらせど、おいでになりません。ねちまつたら、地震があつても知らねえくらいよくおやすみになるタチですから、目ノ目を大きくあけ、耳をうさぎのように、ぴーんと立てて、今か／＼と待つています。

そのうちに、パタパタと上ぞうりの音がきこえたから、いよいよこつちの番にまわつてきたかなつてわけで、つばきをのんで、息を殺していると、隣の部屋へ這入つてしまふくやしさ、

いやんなつちまいますね。待つ身はつらい山ほととぎすつて氣持で、何度／＼パタパタに耳をすまして、と、到頭パタツと、あつしの部屋の前で、上ぞうりの音がとまりましてね。

ようし、おきてたと思われちや業腹だからと、目をぎゅつとつむつて、狸寝入りをしていると、障子がすーつとあいて、いよいよおいでになりやした。

枕元におすわりになりやがつて、

『もし、おやすみですの』

ふん、馬鹿にすんない。誰がねていて、『俺は今ねているよ』つて返事をする奴はないから黙つていと、今度は肩に手をかけて、ゆすりあそばした。『ねえ、お目めをあけて下さいよ、ねえつたらねえ』

ここらがおきるコッなんだ。そこで、うーむと唸つて、両手で大きくのびをし、目をぱつちりあけると、

『おはようございます。もう、お時間だから、おきて着物をきて下さいよ』

おどろいたね。いわれてみると、もう窓の外にはおてんとさま。何のことはない、一晩中おきてたわけです。こんなのが、やらづのぶつたくら、というんでございましょうな。

このころ仲間で、とてもそつかしい梅太郎という男がおりました。この梅公、吉原の海雲というオイランに首つたけで、といつてもそうネタがまわりません。仲間にオイランを買うからネタをまわしてくれとはいえず、伯母さんが死んだの、おじさんがすべつたのといつちや金を借りて、とんでもないお通夜をやつていたようです。

でもね、そう／＼世の中はあまくありませんからこの手もばれまして、借金で首がまわらなくなりま



した。

『兄貴、すまないがね、吉原へいらつしやいましたら、薄雲によろしくいつて下さいまし。來年あたりには、顔をみせに行けると思いますからつて、わ』
いやはや、しよびたれて、その元氣のないことつたらありません。

元氣のでるように、よつぽど連れてつてやろうと思ひやしたが、まてよ、梅の奴、新手をつかつてやがるかもしれねえ。殺すだけ殺しちまつたから、今度は泣きの一手かと、用心しちまつて、

『あいよ、言傳ならお安い御用だ。おかげで俺もぞくぞくしてきた。今晚早速行つてくるか』

梅の奴、いやゝな顔をしましたよ。

みんなも、くせになるからかまうなつてんで、誰もまわしてやらなかつたんで、梅公、席がおわると仕方がねえもんで、家へまつすぐ歸つて、一月ほど神妙にくらしていたようでげした。

でも一月たつと、どうにもたまらなくなつてきたらしく、

『兄貴、これが今生最後のたのみだ。一目、一目だけでもいい、薄雲の顔だけみせにつれてつてはくれませんか』

あんまり哀れに思ひましてわ。

『じゃア、今夜かぶつたら、角の三河屋で待つてろ連れてつてやらア』

こういつたら梅公、両手をあわして、拜んだもんです。

三河屋で下地をいれ、やつて行つたのは、無論、薄雲のいるマルカク樓です。

『來たよ』

『えゝ、らつしやゝい、御案内』

牛太郎が威勢のいい声で、二階を呼びやした。

あつしが先に立つて、とんくくと大梯子を上つて行きますと、あとから同じように、とんとんと止つてきた梅公が、どうしたのか、大梯子の途中で立ち止つたと思うと、いきなり、世にも、悲愴な声で、

『ウーン畜生、いつちまつた——』

あんまりはりきりすぎてたために、梯子の途中で梅の奴、もういけなくなつちまつたという、へい、おはなしで……。

ああ、今時こんな初心なオノコがいようか。





お金か？ 男か？

清川虹子

(映画女優)



どっちも欲しいなんて云わないで

私ほんとの気持ちなのヨ

なんて云はれたにしても。鬼に角、お金があれば、心樂しからずやですが。

男となると、一寸、西瓜じやないけれど。当りハツれが随分ありますワ、亭主さえ、もつてれば絶対だワ、なんて、義理にも申せません。

そりやあ、氏なくして玉の興。そんな事も時たまありますけど、お金の様に正確とはまいりません。それじやあ、男はいらないからお金だけ、となるとこれ又、一寸、寂びしいじやない。お金じやあ話も出来ないし。青春の血が燃えませんワネー第一に。

じやあ、男だとなると、男は浮氣者で、嘘つきで氣が弱くて。何時どうなるか解らない、あんなたよりない物は、世間にあんまりないと思うですが、どうでしよ、女性の皆様。……

『お金と男と、貴女はどちらを選びますか』

ついこの間、こんなアンケートが、ある新聞社から、私のところを舞い込みました。

何事にも動じない、この私が、ハムレットさんじやあないけれど、いささか、呆然としましたネ、アー死すべきか生きるべきかでネー。

大体、お金の方は、有りさえすれば、死ぬような事は、先づありませんワネー。金の使い道知らん



私も一人、亭主がありますが、最近、アジャパーツなんて、変な新話を考えついて、夢中でやっています、もう、三千七百四十三回、喋つたなんて喜んでますの。無邪氣なもんですよ。とうゆう連中に、『女とお金とどちらが大切か』なんて質問をしてごらんさい。氣が狂つてしまいますから。

それでも、亭主が居ると居ないじゃ、随分違いますからネ、ラジオを年中掛けっぱなしにしておいて碌に聞きもしないのに、いざ、毀れたとなると、なんとなく物足りなく、すぐ直しなさいよ、と直しに出す。あんな氣持と思うんですが、どうかしら。

淡谷のり子さんみたいに、さんざん男で泣かされて苦勞しているのに、とりかえ引換え、男なしでは無用ズン(彼女秋田弁ですから)でしよーなんて、番犬代りみたいな事を仰言つて、その実、ラジオの故障と同じらしいとは、彼女の男性觀が、チョビひげと決つていいるのも面白いじゃあ御座いませんか。

お金じゃあ、高低の種類はあつても、面白味がありません、せいぜい、株をやるとか、貯金するとかして、利子の顔を見る位い。それだつて、お色氣、オール、アウトで、完全に、ホルモンの神から、見離されて、色氣より喰い氣、金氣、なんて。滑稽な

らいぞ知らず、多情多感な、私共のような女性の成期におきましては、とつてもとてもですワ、本当に。

お金の表情なんて、政府が時々、変えてくれるだけだしよ、つまりませんワ。

そこへ行くと、男は面白いワ、本当に滑稽ですは十人十色、みんな、珍無類な顔をしてさ、云う事も珍で(珍は当り前ですつて——いやだワネーおひやらかしてさ)偉そうな顔をしたつて間抜けなもんですよ。

ワンマンだなんだつて、随分世間に出ると、つかないおとつあんも、家え帰れば、女房の御氣嫌と。利息はないけど、樂しと思ひますは。利息は子供だつて? あゝそうかも知れないワネエ、手前共でも、もう利息の息子が、大学を卒業しますよ(どこかい務め口いい嫁ないかしら、お願いしますワ) ストリップのヒロセ元美さんが、御自分の方は、雄大壯大なるポリウムにひきかへて、なんと、歴代のハズ、バンドが、小柄

でチャツコイ事よ。でも小男のナントカつて、雄大なる、部分もある相う





で。

人事では、ありませんは、私の、亭主も、チツコイ方の部類ですからネエ——。

絶対、独身で通すワヨ、誰がなんたつて、男で失敗した時は、誰れでもそう思うように、私も思いましたわ、ところがところがよ、てんで駄目、当座は男氣より金氣で、女貫一みたいに、金々々、なんて思つてみてはみたものの。

結局は男になつちやうから、人間て不思議ですワヨ——。みんな、後家さんスターがそうだからネ。

なんでも、偉い政治家の古手が。

『ヘソから下に人格はない』なんて、云つてたけれど、上手に事を云うナ——と思つちやつたワ。ヘソから下に、財布はナイ、金巾はあるつて、いやだワネ！。

まづたく、ヘソから下に恋なんて、粹なものではないわ、すべて、ハートの問題よ。ただ、ヘソから下には、アレがあるじゃない、オアシ、つまりお足が。だから、上半身健全な人は、結居、ヘソから上の恋をすべきなのよ、たとえ、いくつになつてもサ。

男だつて、そうだと思ふのよ、いい若いモンがお

あなたのとつておきのお話を是非お送り下さい。

(謝礼呈)

——睦書房編集室まで——

金の勘定ばかりしている、ザマなんて、あんまり乙な姿じゃないワヨ、本当にサ。

お金なんて、使うためにあるんだから、生きてるうちに使はなくつちやあネ、頭と何とかは生きてるうちに使え、つてよく云うじや御座いませんか。

だから、お金か？ 男か？ のアンケートには、男つて、答えたと思うでしよ、ところが、矢張り、お金つて答えちやつたのよこの私は、何故ですつて。

だつて、昔からよく云うでしよ、金欠病は死よりも怖いつて。金欠病にもいろいろあるけれども、おあしの金欠病と、男のキン欠病、どつちが怖いかしら、私共のようになるとオアシの金欠病の方が怖いよ、それは何故つて、そこまで聞くのは、失礼よ。

『沈黙は金ですもの、ネ——エ——。』



世界一の便所

檜山義郎

(カメラマン)



男女同権と申しても
女つてこんなにも不便なもの

のることがたのしいんです。いつもは、メ切メ切つて、まるで馬車馬みたいに尻を叩かれて仕事するのは、本当は僕に云わせると邪道よこしまなんです。

自分で一番自信のもてる作品を発表することがキヤメラマンの誇りですし、仲間にも鼻を高くすることができます。

一番たのしいのは、何といつてもヌードを撮るときですな。我々のたのしさは、女の裸をみることにありますよ。一々女の体をみることにじやありませんよ。一々女の体をみて、妙な氣をおこしたら、フアインダーも碌ろくのぞけず、第一、商賣になりませんよ。

このごろは、一時ほど注文が段到しなくなつたんで、自分のすきなテーマをゆつくり時間かけて撮れ

ヌードのモデルは身体が生命。ところが、モデルさん、ついそれを忘れつちまつて、荒しちまつて、僕なんか、あれッとおどろくことがよくあります。何ていうんでしようね。裸になつたから、まさか



ついでに、でもないと思いますが、羞恥心が失せちゃうのかな？

僕は専属のモデルに、よくこういつてやります。

『いいかい、裸でおまんまがくえると、甘く考えちゃいけないよ。世の中には、虎や狼が猫の顔で歩きまわっているんだ。やたらに稼げるからつて、全然知らない奴のモデルになつて、とんでもないことになつたら、元も子もなくしちやうぜ、いいね』

ですから、僕は専属の連中には、月々きまつた専属料みたいな金を拂つてやつてます。女はたくさんいても、仲々こればと思う身体の子は少いんです。

『先生つて、とてもやさしいと思つたら、こわいところもあるのね』

Hという子がこんなことをいつたことがあります。というのは、仕事にかかると、僕はもう仕事オンリーになつちまつて、いうなれば、カメラの鬼に化してしまいます。

『もつとバツク。もつとバツク。大丈夫、こつちでのぞいてから』

熱川へ行つたとき、アフロディテの誕生を思いついて、海中から浮び上がる女体、というテーマでは

じめたときのことです。

少し肌さむい日でしたが、とにかくHを裸にし、海の中へ入れました。

肩へ海藻をつけて、本当に海からたつた今浮び上つたところの気分を出そうとし、どうもやつぱり胸から上だけがいいような気がしたもので、ひざぐらのところへ立つてたのに、バツク／＼と後退させたのです。

ところが、あんまりバツクさせたせいで、足をすべらして。Hがぶく／＼沈んじまつたんです。おまけに、泳げない子だもんで、もがいたり暴れたりして、仲々うかび上つてきません。

さア大変。もう撮影どころじゃなくなつて、カメラを放り出すと、シャッター一枚で助けに行きました。

やつとのことで半分くらい氣を失っているのを両手でかかえ、岸にあがつて、いやはや、てんでこつちもグロキイです。

水をすこしのんでるようですから、うつぶせにして水をはかしたり、人工呼吸の真似ごとをしていると、大きく息をついて、Hが目をぼつかりあげました。



『よかつたねく』

僕はほつとしてこういつたもんです。するとHは『先生、何がよかつたもあつたもんじやないわ。私もう少しでお陀^だ佛^{ぶつ}になるとこだつたのよ』

『ごめんく、あやまつた。少しそこらで甲羅を干しておやすみよ』

『いやな先生、亀じやあるまいし、甲羅を干してだなんて』

一時間ほど休憩して、さて、Hがもう海の中へ入るのは、どうしてもいやだというもんですから、やむをえません。

『仕方がないや。折角ここまできたのに、一枚もとらずに帰るわけに行かないから、砂丘というテーマで十二三枚とつてこう』

海へ入れないといつたら、そんならとHはまた裸になりました。

ここら辺は、人一人通りませんから、ヌードには絶好の場所です。

陽ざしもおあつたえのピーカンで、先ず、砂丘で砂を手からおとすポーズを一枚とりました。一枚とるといつても、仲々手間がかかるんです。

色々とポーズをつけさせて、とる前に何度もフア

インダーをのぞいては、もう少し右肩をおとして、それから左の親指を砂へつつこんで、とこんな風にテストだけで、悠々^{ゆうゆう}十分はかかつちまうのが常です。Hは僕の氣性を、このごろよくのみこんでいるので、いやな顔一つせず、

『こうですか?』

とか、

『先生、こうしたら?』

と自分でポーズを考えたりします。

一枚とりおえて、さて次と思つていると、Hが急に立ち上り、物もいわず渚から、どんく海の中へ入つて行くぢやありませんか。

先刻あんなにもう海に入るのはこりごりだといつていたのに、どうしたんだらうと、

『おーい、ど、どうしたんだい、どこへ行くんだーい』

声をかけたときには、もうHは胸の辺ま海に姿を没していました。僕の声にふりかえつたHは、につこりと白い歯をみせて大きな声で、『先生——ッ、おしつこ……』



腰 肉 学

森 繁 久 彌

(映画俳優)

物は見よう考えよう

名優の発見したエロ地帯

曰くいい難しとかやでネ。

そこで、色々と考えた揚句の果てに、よく昔から日本人は腰が強いとはいはれている。レスリングがオリンピックで優勝したり、角力は腰にその重点ありますよう。力道山を御覧なさい。レスラーに轉向して、メチャ稼ぎで高級車三台も買い取り、実になんと、弗で二百八十万ドル、邦貨にすれば……いやこれは本論からそれますので、この問題は又のチャンスにしまして、腰の問題。(お前も、女房の尻にしかれてるつて)尻も腰のうちですが。とりわけ御婦人の方が、雄大ですナ——。電車で御婦人の腰に割り込まれた経験のある男性なら、なにも、女房や恋人のをつくづく眺めなくつても、その偉大さはよく分る。



僕のように、学問が頭の中に充実していると、一体、なにを語れば、皆さんに喜ばれるのか、内心非常に迷うのである。

いふなれば、学問がありすぎて、世間並のつまらぬ話が語れない。という訳で。

東大あたりの卒業式かなんかで、一席やれば、世界的反響を巻き起す事は確実だが。一寸、空恐しい氣もしないでもない。



どうも、すぐ、女性の方に話がそれてしまつて、残念である、カツパじやあるまいし。

イギリスでは昔、ヘンリー八世、と仰言る王様が牛に稱與を興えてたといひます。(伯爵か子爵か男爵かは解りませんが)何故、牛位に、『位』を興えたかというに。(ここの余の学のアル事ヨ)兎に角、ヘンリー八世が狩獵におでましになり、野原で焚火をして居るところで、牛の腰肉をお焼かせ遊ばしましたナ。

腰肉はロインと申して、大変に結構なもので、さて、その時の肉の焼き方が上手であつたセイか。この他美味しく、王様、ヨダレを拭きながら、そのビーフ、ステーキを劍につきさし……

『お、腰肉よ！ 本日より汝に郷の稱号を授ける』てな事をおうせになつたそうで。

爾來これが、サーロイン、ステーキと呼ばれるようになったのである。(なんと、学のある事よ、役者にしておくのは惜しいことではないか)

なにに依らず、腰肉は美味しいものと、昔から相場が決つています。ステーキばかりじゃない。豚だつて熊だつて、女だつて、はどうか知りませんが。美味である。

近頃、バレーが凄じい流行をしていますが、これとて、生命は足と腰で。サーカスの綱渡りもそうだつて、話を飛ばしてはこまる。

デツチリ・ハト胸が男性にとつては、トホツても魅惑を感じさせるに至つては。婦人の急所は胸と腰肉にあると申してもいいでしよ。

脳下垂体をジャン／＼腰にブチ込んで。デツカクするのもそうですが。矢張り自然、天然に限りますヒップ、パットなんて申して、人造尻を、入れるのが近頃、流行しているから、失礼とは思いますが、意中の女性があまりにも見事な腰肉ぶりであるならば、一度は触つてみる事でやんす。

ヒップ・パットならば、ゴソゴソしているからすぐ見破れるし、第一、触つたつて、ツネたつて、感じませんよ。『まあ いやらしい』なんて、電光石火にいはれたら、こりやあ、本物だから、ただちに求婚すべきである。

『サーロインよ』てな事を申しましてネ。いや、サーの方は牛なのだから、
『クイン、ロインよ……』
といった方がいいかも知れない。





何事も、新しい物好きの女性には、感激しますよ、『あーブヨ／＼したポリウムのある、心楽しいオケッよ』なんて、やれば、忽ち、ポーツとなつてしまふ腰で口説く、なんて、一寸乙でゲスナ。その変り一ヶやりそこなうと、一生、その魅惑的雄大なる面積にヒキつぶされて。生涯を終る事もなきにしもあらず。

上原謙、伊豆肇、二本柳寛、阪東妻三郎、なんてお歴々が、この傳でやられるくだから、いわんや、諸君に於てオヤだ！

ミスなんとか、ミス、何々と、もつばら。ミスばかりで。オッパイ、足までは行つたけど、ミス、オケツというのはまだありませんネ——。

これは、近々のうちに一度やると良いと思つとりますよ。勿論、審査員には、手弁当でも出席する心算ですが。もつと楽しいに違いありません。

幕が上る、お尻が見える、お客が騒ぐ——ヨイヨイ、てな調子でどうだろ。

尻に帆掛ける、という言葉がありますが。

又、頭かくして尻かくさず、なんて、昔から、吾が国では、尻、つまり腰については、中々、発達しているようです。『腰元』なんていつて、美しい女中

さんがお城にはたくさん居たものだし。

柳腰やなぎこし、なんていう情緒的なものもある。今は、柳腰なんてえのはあんまり流行つていなくて、みんな何事かに及び腰ですナ。

あんまり、腰だのケツだの尻だのとやつてると、長尻だ！なんて嫌はれますので、余の学のあるところを、もう一つだけ。

ルーデ、サツクについてですか。イヤなものと言つてもありますが。聞くは一時の恥、知らぬは一生の恥、え、知つてゐる方が恥だつて、恐れ入ります而しあれがなかつたら、家族扶養の義務に耐え兼ねて、生活的破滅に相成りますゾ。閑活休憩、かのサツクなるもの。英国では、『フレンチ、レター』乃ち、フランスが元祖だとユヅれば、フランスでは、『カポット・ダングレー』乃ちイギリスの帽子である、と、本家ユヅリ合戦を演じております。日本ではあんまりこんな現象は見られません、やつぱり、自分の国の物とするにしのびないといったアンパイで四谷怪談や黒焼屋の元祖といふはまつたく逆な現象はどうしたものでしよ。

どうも、話が飛びまして、イヤ、これというのも私に学がありすぎる爲で、黙しからず。



強引なお客紳士



私は自分の商賣にとっても誇りをもつてゐるんです。

口のわるいお友達なんか、かげで私のことを『招ね金猫』などといつてますが、私はそのとおりだと思つてますから、別に抗議しないんです。実際、私の腕ひとつで、賣れないものが賣れるんですから『招ね金猫』じゃありません？。

でも何といつても悲しいのは、その日ぐらしという氣持です。なにしろ、あちらまかせでしょう。十

丘 さくら

(マネキンガール)

件が親爺を泣かせ

親爺が女を泣かせた話

日もつづく仕事もあるかと思うと、一週間も仕事が無くて、あそぶときもあります。

はじめは、お化粧品専門だったのですが、このごろは専門をかえました。お化粧品だとならない能書をしやべらせるんでしよう。いくら賣るためだからといつても、あんなりでたらめをいうのは、私の良心がゆるさないからでもあつたのです。

このごろは、ファッション・ショウ専門になつたのです。もつとも、マネー ज्याアの注意もあつたのですが。

『君は、均整のとれた身体してるから、ファッション・ショウ専門にやれ』



ごく手近なところに幸福があります



よ。その方が、歩もいいし、出づつぱりでなくていいから、身体もらくだしサ』

なるほど、やつてみるといわれたとおりでした。お化粧品のときとちがつて、私は何一つ能書をいわなくつていいんです。黙つて衣裳をきたまま、ボーズをつけて歩けばいいんでしょう。

みている人はみんなほしそうな顔をしているし、こつちは自分のもののようにふるまえるという優越感は、とてし素敵なんです。

ずいぶん仲間もいますけど、帯に短かし、袴に長しの人が多くて、フアツション・ショウのマネキンは当に引つぱり風なのです。

大きな洋装店ですと、月に一回か二回、大得意様をお招きして、小規模のショウをお目につけて、賣り上げをまそうとする作戦。これにもひつぱり出されて、このごろ、とても景氣がいいんです。

ところが、時々困ることがあります。というのはこんなショウのとき、御婦人ばかりならいいんですけど、時には御主人がくつついていらつしやることがあります。

店の人は、まさか男子はオフリミツともいえず、おいれすることになっていますが、私の身としては、

いやな場合もあります。

つまり、新しい下着のショウのとき、同性だけなら何ともありませんが、中年の方が、下着より、私のお乳とか股のあたりばかりごらんになるので、何かはずかしめられたような氣で、とてもたまりません。

何事も商賣だと思つて我慢してますが、本当にいやです。

こないだだつて、誰もこないと安心して、少しあつたかだつたから、更衣室で、ブラジャーとパンティ一つで休憩していたら、ノックもしないでドアがあき、中年の紳士が首をのぞかせました。そして、

『一寸うかがいますが』

『何か御用だつたら、事務所へいらつしやつて下さいますし』

氣味がわるいので、そばにあつた服で、とりあえず胸をおおつてこういいますと、

『いや、事務所の用ではないんです』

『何の御用ですの』

『あの、便所はどこでしょうか』

馬鹿にしてるじゃありませんか。

『化粧室なら、つき当つて左へ曲つたところです』



『あゝ、そうですか、どうもありがとう。ときに、あなたはとてもお美しいですね、お茶でもご一諸にいかがでしょう』

私、怒つちまいました。

『ドアのところに、男子禁入室つて札がかかつているの、およみになれないんですか』

こういつてやつたら、ひよいと首をびツこめたのでやれやれ行つてくれたかと思つてほつとしているととんでもない。

『おつしやるとおり、男子禁入室という札がかかつてますが、これはどういう意味でしょうか』

あつかましい男、こつちは半裸体だから、立つて行つて押し出すわけに行かず、怒つた顔をして、

『そんなことより、とにかくお引きとり下さい。私の恰好、ごらんになつたでしょう』

『はい、拜見しました。とつくりとね。とにかく、

おみごとな身体です』

『知りません。ドアをしめて出て行つて下さらないと、大声を出して、人を呼びます』

『いいじゃないですか、少生は別に何の失礼をしているわけなし、あなたの美をたたえているにすぎません』

『もう結構、いい加減にして下さい』

『いい加減にして、では夫礼いたしましたよう、どうもありがとう』

到頭ドアがしまつたので、私はあわてて服をきようと思つていますと、コツ／＼と誰かがドアをノックするんです。

『どなた？』

外からの声は、

『只今は失礼いたしました。さきほどはノックをせず、ドアをあけたりして。今度は、正式に訪問させて頂きたいと思つて』

『だめです。いけません。裸ですし』

『ですから、一寸おじやましたいんです。わかつて下さい』

『いいえ、わかりません』

すると、又、ドアをコツ／＼とノックするんです。

『いけませんたら、手がいたくなるだけですからおしなさい』といいま

すと、『いいえ、叩い

ているのは手じゃないんです』だつて……。





酒のみと助平はお手上げ

幾野とみよ

(バスガール)



女だと思つて、實際馬鹿なことをする男がよくいるんで、私たちの仲間はいつもぶん／＼なんです。一寸車の中がこんだりしていると、他人の目をかすめてお尻をなでたり、おっぱいのまわりをさわつたりするお客が案外多いので、初めのうちは私、いつそやめようかと思つたこともありました。もつとひどいのは露出狂です。レインコートの下で、ひつぱり出しておき、何気なくその人を見ると

酒のみとあなどつて スロースを見られた話

これみろというように、コートの前をひつぱりあげて、チラつかせる、本当に下劣な男がいるもんです。酔っぱらいでたちのわるいのも困りものです。いつだか、こんなことがありました。私が新人の子を指導しながら乗つていたときのことでした。

ぷーんと酒くさい親爺さんが乗つてきましたから新しい子にいやな思いをさせてはと、私が代りに切符切りに行つたんです。

するとそのよつばらいが小さい声で、『よオ、ねえちゃん、向うの娘、はいてないんだろ』

とんでもないことをいわれ、はじめは何をいわれたのかときよとんしていますと、

『俺はね、自慢じゃねえが、女がはいてるかはいてないか、服を上からみて、一目でびたりと当てんるだ。どうだ、当つたらう』



何で返事がきましよう。

『切符を切らしていただきます』

切符だけ切つて、元のところへ戻ろうと思つてゐるのに、

『おい、ねえちゃん。返事をしろ。返事を、返事をしなきゃ、切符なんか切らせねえぞ』

あきれるだけです。でも、ほつとく事は、風紀上わるいと考えて、

『そんな失礼なことに、返事はできません』

『ふん、何が失礼だつていうんだい。こつちこそ失礼で怒りたいよ』

『何が失礼なんです。本当に失礼な』

『そうじゃねえか。ねえちゃん、この車は、お客をのせるために走つてゐるんだらう』

『当り前です』

『だから、失礼だつてんだよ』

自分が失礼なことといつといて、引つこみがつかなくなつたもんで、何かしつぺ返しを企んでいたらしいんです。

私、癪にさわつたから、ひらき直つて、

『では、まずそちらのおつしやる、失礼だという点をうかがいますわ』

『そうこなきやいけねえ、いいかね。この車はお客をのせるために走つてゐる、と今、ねえちゃんはいつたね』

『いいましたよ。それがどうしたんです』

『それだから失礼だつてのさ。そうだらうが、お客ののつてゐる車に、ふん、パンツもはいてねえ車掌をのせるなんて、馬鹿にするないつてんだよ、全く失礼じゃねえかよオ』

我慢がでなくなつた私は、

『いいがかりをつけるのも、いいかげんにして下さい。小さな女の子でも、いくらなんでも可哀そうじやありませんか』

『何が可哀そうなことがあるもんか。失礼なこと、くらい教えてやつたらいいだらう』

『馬鹿いわないで下さい。あの子だつて、はいてますよ、無論』

後で考えると、ここで私はみごと、手のかけた尻におちちまつたんです。

そいつは、待つてまし

たというように、

『何いうんだ。みてみなきゃ、はいてるかはいて





ないか分りやしない。ねえちゃんは、俺の目に狂いがあるとしてもいうんかい』

『目じやありません、狂つてるのは頭の方です』

『ふん、そんなことじやごまかされねえよ。とにかく、口でいい争つたつて仕方がねえ。ねえちゃんがどうしてもはいてるとがんばるなら、はいてるものをみせてもらおうよ』

弱つちまいしました。

お客がもうほとんど降りししまつたので、少しは氣が楽でしたが、ここまできると、私も引けない性分なんです。

こんな性悪なお客は、營業所へひつぱりこんで、主任さんに、ぎゆうという目にあわせてもらおうと思つたので、

『じゃア、こうしまししょう。もうじき終点ですから

白黒は營業所でつけましよう』

親爺、にやりとしました。

『おう、そうとなくちやいけねえ。俺も後へ引けねえ性分。こいといというなら、どこへだつて行くぜ』
こんなわけで、新しい女の子と私と、助平おやじの三人が、首をそろえて營業所の主任さんのところへ行つたんで、主任さん、何だかはじめはわからない

いもんですから、

『どうした、幾野君』

『主任さん、この人つたら、大変な人ですの。実はこれ／＼しかじかで』

わけをはなしますと、主任さん、これを喝つた顔になりました。

『おい、ねえちゃん、ここで白黒つけるといつて引つぱつてきといて、どうするんだア』

こつちが困つてるもんですから威丈高。

私はもう覚悟をきめて、片隅に女の子をよぶと、

『ねえ、こういうわけなの。あんたどうする』

ところが女の子もかん／＼だつたので、馬鹿／＼しいけど、みみせてやります。それで頭を下げさせて頂戴、といい出してくれたので地獄で佛にあつた思いでした。

『じゃアおみせしますよ。もしはいていたら、おじさん、あやまるわね』

『当り前よ』

ついに、女の子がスカートをまくつて、はいていのをみせせたら、おやじ、ペコリと頭を下げていることが畜生憎らしいんです。『どうもすいません見せて頂いて』だつて……。



スト ト妻椿

藤原釜足

(映画俳優)



タデ喰う虫も
好きずきです

しまつて、自分だけ、チャツカリとしている男がいます。

『早く別れちまえばいいのに、あの調子じゃあ、裸にされるウチはいいけど、今に叩き賣られちゃうぜ』

と、他人様が心配に明け暮れるというのに、当人の女の方は、『矢張り、アノ人とは別れられないの……』

なんて、お仰言つたりして、こつちの方がヤキモキさせられる事がシバシバあります。

惚れたが**いんが**因果で身の破滅——というヤツでしょ。

『処女を捧げた男には、

どんな仕打をされても二年や三年じゃあ、別れないもんだよ』



よく世間様では。
女にウツツを抜をして、家藏入れ挙げてしまい、スツカラカンの丸裸にされてしたつた。とんでもない色男の話がある。
女は魔物だとか、女の手練手管に迷うとか、警告されていますが、色男の家藏なくした揚句の、ストリップなんかは、お色氣がありません。女は魔物だなんて恐れられてますが、結構、女を素裸にして



なんて、二、三年は女を絞つて暮そうという、『絞
り屋』(しまり屋やは税務所より仕末が悪いです)
が、世の中にはウヨウヨしているのですから。男は
魔物と云う訳。

『男の魔物は、陽があたらねえで、ブラブラして
らあ——』

と、古川ロッパ氏がいつた事があります。とんだ
もない魔物が、一人一個づつあるのですから、御婦
人方は御安心です。

随分、大した女優さんでも、コロリとイかれて、
裸にされてしまった人が相当に居ますよ、相手方の
男性の方の名前は、僕同様に、魔物をブラ下げてい
る同類なので一寸いいにくいのですが。

三浦光子、水戸光子、月丘夢路、入江たか子、霧
立のぼる、関千恵子、等々でもつと考えれば、もつ
と居ると思います。

なかでも、月丘夢路君の旦那、E君などは、奥さん
の彼女を絞りに絞つて、裸にしていまい、その揚句
の果てに、これは又、ハダカ商賣のストリップパー、
T嬢に入れ揚げたというのですから。

『裸より裸に』風呂の三助君みたいなもんです。

『女を裸にする位の男でなくて、なんで、仕事が

出来る。大事業をやつた奴をよく見てみる』

なんて、とんでもない珍説を御披露する人がいま
すが大人物の青春時代には、この手を用いた人がと
つても多いのには。驚かされます。

お色氣の方で、四疊半的(裸と太陽じゃあない、
電球ですかね)位いなら、あたりまえですが、経済
的生活倫理上から見ると、ダンスはカラッポ、従つ
て、ハダカ同然では、女の方がお氣の毒ですよ。

『色男なんて、夏場は持つもんじやないわ』

と、仰言つた女優さんがいますが、この言葉は、
色の道で、何度もハダカのニガい経験の結果でどう
しても冬と違つて夏場は暑いですから、アッパツ
パー一枚あればたくさん、そこで彼女の心血の賜であ
る。衣類が次々と色男の血となり肉となつて消えて
行く運命。

寒くなると、あ——丸裸——、

そこで、色男は冬持てッ！ という格言？ が
出たのだと思います。

三味線の豊吉姐さんみたいな、この道のベテラン
になると、『あたしや——女の皮をかぶつた男だよ
だから、女房亭主さ、男を見ると、恵んでやりたく
なるね——ちよいと』



なんて、オール、ストリップ型の姐さんも居ます
が。だから、男陽（おやう）でりはない、なんて、世の中の二
枚目がデレ／＼する姿は、僕（ぼく）の様な、二枚目にとつ
ては心外なんですが。

妻をめとらば才たけて、ミメ美はしく、氣立てよ
く、なんて、若い人々が歌つて歩いたのは、螢光燈（へいこうとう）
なんてなかつた時分。

妻をめとらば共稽（きき）ぎ！ これなぞは、良心的な方
でしょう。

妻をめとらばストリップ！ なんて、女を金庫の
抽斗（ひきだし）みたいと考えてる男性のなんと多い事よ。

『なんでえ、お前さん、女と同棲して。しみツたれ
る手はねえよ……ジャンジャン曳（ひ）き出せよ』

『ウン……そのうちナア』

えらい世の中になつたものです。オチオチしては
いられませんか、御婦人方。

だからか、どうかは分かりませんが、映画界で苦勞
している、女優さん達は、比較的、独身が多い訳で
す。

なにしろ、百万・二百万なんて、下手な男性が一
生（失礼）かかつて出来ないうような、小銭（彼女）等
等にとつては、いとも樂々と、一ヶ月か、十日

位い、ドウラン化粧をして、ペチャ／＼とお喋りを
すれば轉げこむに於てオヤオです。まづたく。

そこえいくと、純情と申していいのかどうか解り
ませんが、チラチラ耳（みみ）するお話の中で。

『ストリップパーはいいぜ、まづたく、文字通り裸に
なつて稼いでくれるんだからネー——』

なんて、事を良く聞きます。

舞台上で裸になつて、ヤケクソでも起してるんじや
ないかと思う彼女等が。実に、純情可憐で、色男に
貢ぐ事、当今では他に例がない程だそうです、オッ
ト俺も一番なんて、考えないで下さいよ。

昔、貞女節婦の鏡みたいなストリーの映画に『人
妻椿』というのがありました。佐分利信、川崎弘子
徳大寺伸、なんてスターが出て。

『ありやア君イ人妻椿だよ』とその頃、貞淑な妻君
はこう云はれたもんです。

最近『スト妻椿』という言葉が横行しています
スチライキの妻ではなく、内外共にストリップにな
つて盡してくれる妻君の
事です。妻をめとらば、
『スト妻』を、虫のいい
話ですナ。





ハダカ怪快談



小林桂樹

(映画俳優)

ダンツクの浮気封じに
エロ・ヌードを御披露
なさい

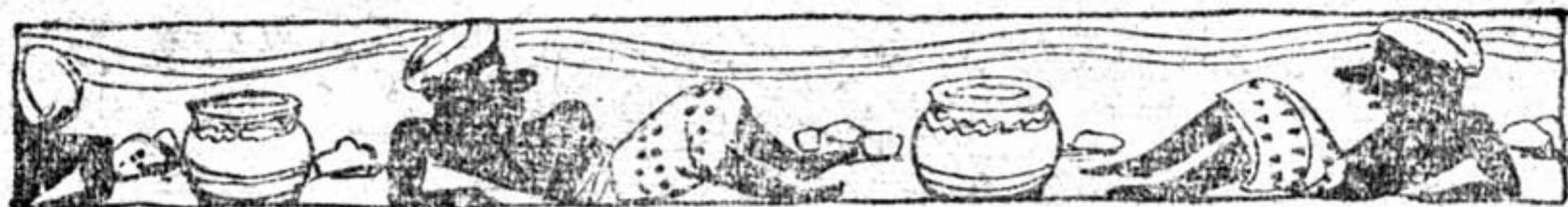
近頃では、名前とお金に憧れて、撮影所の狭き門を、シヤニムニ突破しようという。女性がとつても多い。その捲き起す悲喜劇は、実にハヤ、数え挙げられない程の数字で、なかにはニューフェイス試験狂みたいなお嬢さんもいて。

『私……東宝では、今一步というところで、私の方で嫌気が指しましたの、松竹の時は、入社したのに母が反対しまして』

なんて、結構、友達を煙に捲く手が多いそうで、なんの事はない、アクセサリーみたいに考えているらしい。

本当は、何千人に一人位の、宝くじと大体類似的な確率なのだから、母親が反対したり、嫌気がさした位いで、ポイできる代物ではない。

募集する突端に、これらマニヤから、純情なる、全国のスター憧憬れの若人どもが、ゴマンと、押し



かゝる、と云つても、撮影所まで呼んで審査する迄が大変。

先づ、写真審査という、修整芸術みたい、街の写真屋さんが、本人とはまるつきり違つちまうまで修整した、写真を眺め、そこで『こりやあオモシロイ顔だ』とか『この御面相は、めづらしいじやあない』とか、本人が聞いたら憤激の結果、卒倒でもしちゃいそうな会話を、やるのである。

斯く云う、僕にしてからが、二枚目半なんて、ややこしいタイトルを頂戴する迄の苦心たるや、筆舌には盡し難きものがあるのですが。自分事はサテ置まして。………。

x

x

x

御面相のお写真に、近頃では、水着姿の写真が必要になつてまいりました。

と、云うのが、なにしろスタイルの五月蠅、昨今の事とて、顔はお姫さまの様だけど、デッ尻で、ガニ股なんて云うのでは。お話になりません。

そこで女性に限り水着写真貼付の上、應募サレタシ、なんて、ちゃんと規約に書いてある訳です。どうして、女性に限り。としたかと云うのは、云

りまでもありません。審査員が全部野郎——(御免なさい。先生方なのです——)だから、同類の裸体などは見たつて、始まらない、と云う訳ではないかと、僕は思ふんですが、何如で……。

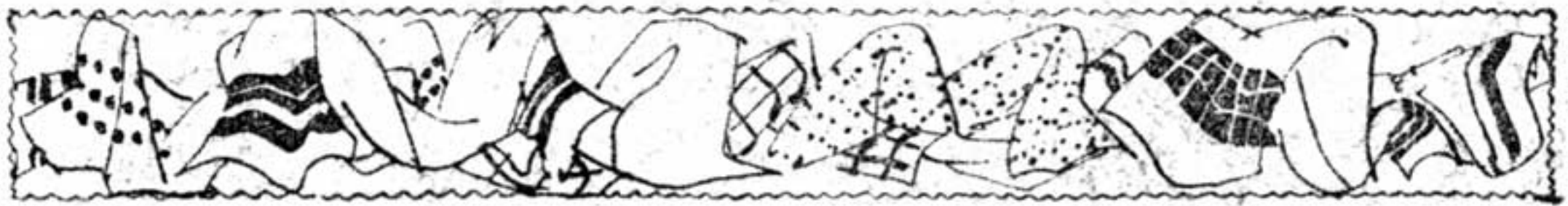
『テヘツ——面は不味いが、いい身体だねエ、たまらネエ、ホルモン・タンクの素晴しさ——呼んでみようよ、一度拜もうぜ、ストリップにだつて、これだけの、オッパイはいないぜ』

なんという、セリフでしょ。ところが、呼ばれて現はれる。女性の半分以上が、この辺の興味からなんです。だから、男二割、女八割という、比率は昔も今も変わりません。タハハツです。

なにしろ、一万人近い應募者の写真を眺めるのですから、審査員と名のつく人は。会場に呼ばれた人だけを眺めそれを以前の、写真審査の方は、カッドウヤの余録ともうしてはナンですが。一種のお楽しみ。

助監督から大道具のオヤジに至る迄、第一次写真審査をやらかすのですから。女の子を持つたら、女優さんにだけはしない方がいいようです。





サテ。荒つばい連中が、例の如く、写真の山を掻き廻していますと。

『オッ——こりやあ凄えやツ、一寸、見てみろ……コレツ——この写真を』

成程、水産写真の規約はあるけれど、全裸写真を要求した憶えのないのに、堂々たる、全裸写真、しかも、残念な事に、お顔の方がアゴで切れて見えません。

『呼んでみようよ、……案外、こういう、勇敢な娘さんが、スターに向いてるんだから』

なんて、お土砂をかけたたりするもんで、宣傳部の江部長さんも、

『そうだね……而し、顔がないから』

なんて、一應は流れていましたが、それでも、

仕事とはいいたが、大分うんざりしていた、実直でキンゲンな江さんも、一番時間をかけて鑑賞していたところを見ると、万更らでもないらしい風情、『なにしろ、随分、ニューフェイスの写真募集をやったけど、ハダカ写真を送つて来たのは、僕も初めてだ。呼ぶのはいいけど、まさか、コレじゃあないだらうね——』

と、頭を指しましたが。



未亡人の実演を見せるクラブがある、場所は神宮の裏の某アパート、軽く特級酒を一杯のませて全ストを見せ、その後、『お金と時間の余つてい

る方は三回戦まで應じる……』そうだ、そのお代メめて三千圓、高くはない、御希望の向は夜中十一時過ぎ、ペロンペロンに酔つ拂つた振りして、澁谷驛の東横線ガード下

『いいよく、変だつていいじゃあネーカ』

と熱心な連中に云はれてか、心ならずも、この全裸写真の主を第二次選考に呼ぶことに相成りました。

『さあ、慇々、今日は、お目にかかれるぜ——例のハダカの姫君にさ、あのハダカ具合だと、大分、色つボイぜ——』

これ以上の、実に、キワどい会話なぞ、方々で起



りまして。本日のニューフェイス写真の興味はこの点！（アノ一点だつて、品が悪いナア）に集中の感偉い審査員の先生方も、この噂を聞いてか、常のダレそうな面持とは大分違い。わけでも、本日の進行係、Hさんの徴に入り、細に入つた全裸女史の紹介などあつて、大分開会前から、湧いてました。

イクツになつても、いいものらしいですね——あゝゆう興味というものは。

審査も進んで、懿々、全裸娘の登場、場内、流石にシーンとして、臨時審査委員も大分集り。なかでもHさん、大変なハリキリで。

『では……次の方、八千六百二十番——』

声も震え氣味。ア——遂に当场です。

『アジャツ——』てな、どよめきが、期せずして起りました。『ホンマに御当人かいな、オフクロさんと違んじやないか』まつたく、写真の水々しさとはなんという違いよう。大分、クタビレて、花なら、花ビンの水を吸い上げる元氣もないといった風情、それ以上にドラマチックな光景が展開しました。進行係のHさんが、これ又、ナント・ウーンと唸ると卒倒してしまつたんです。

こつちの方が余程意外です。なにしろ、映画会社

の宣傳所のベテランと云えば、海千山千、驚くなんて事は、とつくの昔に忘れちまつているのが普通なのに、いくらなんだつて、ところが唸つて卒倒したHさんの傍に、件の全裸娘、……ではありません、全裸ウバ櫻女史が、ハッシと駆けより。

『アナタツ——貴方ツ——』

と二声、場内水を打つたような静けさ。

なんという事です。このウバ櫻女史こそ、Hさんのレッキとした本妻なのです。Hさんが若いニューフェイスにうつつを抜かし、別居生活に入いつてしまつたので、本妻たる彼女が、苦肉の策の、全裸写真の審査、……。

という段取りで。Hさんをアツと云わせようとした訳。以後Hさん、会社の中でコソコソのじどうし、ニューフェイスには逃げられるし。結局別居生活は解消。

このシーンに立会つたお偉い先生方も、背筋がツーツと寒くなつたそう。一寸した怪談と思いますけど。





ソーセージに卵の白身

鹿島 清吉

(板前)



あんまりイタツラ
しなさんな商賣女
はおそろしい

板前と言いますと、こいつは何処へ行つても影武者的存在になつてゐるんですよ。世の中がこうなつてきますと、特にその感は濃厚で、

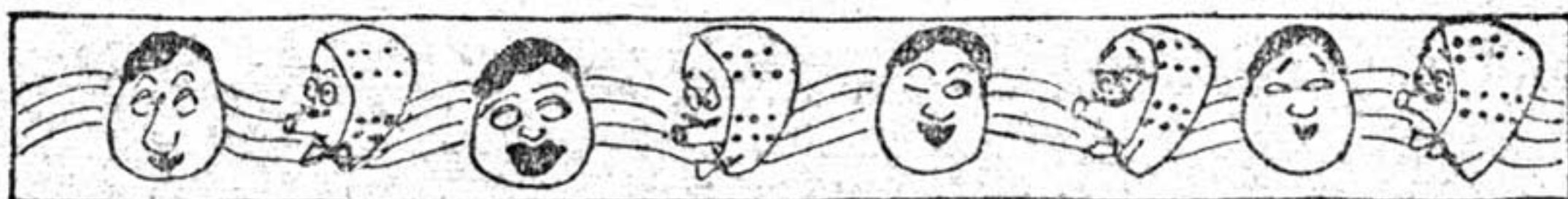
『こいつは仲々うまいね』

なんて舌自慢のお客さんでも、その料理を私達板前が作つてゐるなんてことを知らないらしく、座敷に出てゐる女中衆に自分の舌のよさを認めさせようとなんかなさいます、

それでも中には物判りのよいお客さんや、お馴染みの方になりますと、
『清公に、とくに今日のは氣に入つたよと言つてくれ』

なんて仰言られて、女中衆を通じて祝儀を下さつたりする方もございます。

何もそれだからつて、料理が氣に入つたら、板前に祝儀を出せと言つてゐるわけではございません、



そう、私もこの道に入りまして三十年、戦争中は一寸つまづいていましたが、又いろいろと腕のふるえる時期になつたようでございます。

去年のことでございますが私が銀座のある料理屋に居たときのことでございます、その家のおかみさんはとても愉快な方でございますね、御主人と死に別れをした女で、一人であそこまで店を張つた氣性の人でございます。

何時もニコ／＼していて、減多に怒つたことがなく、年はやつと五十位でしたでしょうが、少し濃化粧なんかすると四十四五位に見える位若作りのする人でございます。

それですから自然に、こゝで働いている者達にもその氣ツ風がうつて、女中四人と下働きの若い男一人がのんきに働いていたのでございます。

女中四人の中の二人は住み込みで、二人は通い、私も通いでございましたから、店にはおかみさんと女中二人、若い男の四人が、泊つているようになっていたのでございます。

或る朝のことでございます。私がこの日一寸用があつたのでございますから、朝の十時頃店へ行つてみますと、おかみさんも女中もみんな起きていて何

かソワ／＼しているように見えるのでございます。変だぞ??

第一、夜の遅い商賣でございますから、こんなに早く皆が起きていることが変ですし、それに、皆の態度が変なのでございますから私は、不圖そんな風に思いました。

『お早ようございます』

何か含み笑いをしているおかみさんに挨拶しますと、私は

『おかみさん、何かあつたんですか』

と尋ねてみました。

すると、まるで私がそう言うのを待つていたように、おかみさんが急に大声で笑い出したのでございます。

『何です。どうしたんです』

私は呆氣にとられて、思わず言つたのでございます。

『清さん、大笑いだよ』

『何がです……』

『実はね、清さんが帰つてから、河合さんが来てね……』





河合さんは、相当酔っぱらっていたのですから、もう看板だと言うのに、無理矢理に入つてくると、奥の座敷へ入りこんで肘枕で寝はじめました。

『弱つたね、自動車でも呼んで、帰さないで後が困るよ』

住み込みの女中二人は、共に河合さんと起しましたが、酔っぱらいの寝込んでしまつたのはどうしようもなく、いつかは起きようとはしないんです。

河合さんに、もう六十過ぎの某会社の社長で、この店では大切な顧客さんですから、そう邪険な扱も出来ません、

それでも、店をすつかり片附けると、この部屋には二人の女中が寝なくてはならないので、もう一度無理に起してみたんですが、河合さんはどうしても起きないんです。

もう二時過ぎにもなる。仕方がない。と覚悟をすると、二人の女中はおかみさんにいつて、河合さんには毛布を掛け、自分達は布団をその横に敷いて寝たんだそうです。

そして曉け方近かつたでしょうが、一人の方が、何かムズムズと身体に感じるんで、ハツとして眼をさましたんですわ。

するとどうでしょう。河合さんが、手をのばしてすがりつこうとしているではありませんか。その女中は驚いてその手をつつばねてやつたんだそうです。そんなことを二三回しているうちに、河合さんもあきらめ、女中の方は、すつかり眠氣がさめてしまつたんです。そして氣がつくと、どうも脇腹のところ、何かクニヤリとするものがある。それで片手に取つてみると、これがソーセイジだつたんです。

女中は隣に寝ているもう一人を起とし、二人でおかみさんのところへ行きました。そして、河合さんの悪戯をすつかり話したんです。

おかみさんは、それを聞くと、黙つてそのソーセイジを受けとり女中に河合さんの朝食の準備を命じました。おかみさんは朝食の準備が出来ると、膳の上に、そのソーセイジを大きな皿にのせて、おまけに、生卵の白身だけをそえて、一諸に河合さんに出してやつたんだそうです。

『面白かつたよ清さん、河合さんがね、それをとるとゲツと云つたような顔をしてね……』

おかみ人はそう言うとき又大笑いをしました。



此の道ぬけられます

尾 木 草 介

(実話作家)

いやはや……こんな手が

あるとはおどろきましたね

と仰有る。編集者という名の人間は、日本じゅうの讀者の代辨者^{だいべんしや}みたいなので、讀者の讀みたいもの聞きたいことを、そのときの世相と睨み合わせ、チヤンと心得ている。まるでラジオのアンテナのような存在で、編集者の注文は、そのまゝ讀者の注文であるとも云えるのである。

近頃は警視廳^{けいしつちやう}のエロ彈圧^{だんあつ}の功績？ がものを云つて、夫婦雑誌が本屋の店から姿を消し、お代りに登場したのが、所謂「実話」もののオンパレード。昔は実話のものと云えば、ピストル強盜就縛秘話とかとにかく、人殺し、泥棒のたぐいの話と相場がきまつていたものである。

しかし、いまの実話ものは、人殺しや泥棒の話では、先づ雑誌社の編集者が、こんなのはつまらねエ

だから、最近の実話雑誌が、犯罪ものより、金儲けの成功、失敗談とか、男女関係のことなら、どうしたら女をモノにできるか、などという、リアルなまことに有難い体験記などを満載^{まんさい}しているのも、これは、一編集者の、ひとりよがりの企画^{きかく}ではなく讀者の慾するところを反映した。偽りない世相の





姿だと云えるものである。

したがって、捜査秘話執筆という一本槍でできた、所謂実話作家と呼ばれるライター連中もいままで警察署だけ廻つてネタとりをしておればよかつたのが、こんどはそうはいかない。刑事部屋へ行つたのでは（どうして夫婦生活の危機を切抜けたか？）なんていう性生活の秘（し）を聞きだすわけにはいかないからである。

金儲けの話をして、

『月五分の利子で借りた金をたしかに抵当を取つて月一割五分で貸す一割の儲けになる。十万円なら、一万円、百万円なら、十万円の金が、ボンと懐中へ入る。ねえ旦那、いい商賣ですね』

うっかりこんな話を刑事にした、この野郎、トッポイ野郎だと、ドヤされるぐらいならいいけど、「貸金業等の取締に関する法律」でなイカメシイものにやられたら、オイ、コラと留置所へ入れられることぐらい、覚悟しなければならぬ。

だからこの話も警察は苦手である。とどのつまりが、実話作家も、大いに見聞をひろめるために、書齋から飛び出して、社会のあらゆる場所へ出張しなければならぬわけだカンヅメのネタでは讀者は

風流艶笑譚第2話

次号 七月号は

五月二十五日発売

満足しない。しゅんの魚のように、ピンとはりきつた生々しいお話でなければ駄目なのである。

おかげで、私なんかも、一日中東京の街を歩るきまわっている。

へ何を探している

ハマのサヤバレーへきて

風の噂はネタ 上海帰りのネタ ネタ

あまい切ない思ひ出だけを

胸にたぐつて探して歩るく

ネタ ネタ 明けても暮れてもネタ

誰かネタを知らないか

中京地区からの引揚が盛んになれば、それに関した感涙悲話を求めて、実話作家はハマへまた出張遊ばす。まつたく、やりキレンです。ところが、かんじんの感涙ものはびんぼけになつて、飛んだワイ談を聞嚙つてしまうことがある、ところが、人間の魅



力に富んでいるから、大切な仕事のこととは忘れ、ワイ談一辺倒に熱をあげてしまうことが屢々ある。

というわけで、この話も、ネタ取りのミルク風呂で聞いた、しゅんの魚のように、生々しいルポである。

『花嫁の相手のお婿さんというのがね。これがまた素晴らしい男なんだよ。東大出の風俗学の研究家で、お若えのに、著書もあるそうさ。大財産家の伴の上に、男つ振りときたら、上原謙と三船敏郎をチャンポンにしたようないい男でね。甘いようで、タフで何とも云えぬ男前さ。俺でさえ、すーと惹きつけられてしまふんだから、女がボーとなつちまつて、いまゝでに、十三人の女が、この男を見たために、フラフラ病になつちまつたそうさ』

『そんないいお婿さん貰つて、何故その花嫁は初夜のお出会いだけで、アッナ男嫌い、なんて言い出したのさ』

ミルク風呂のもうもうたる湯気の中で、二人の男が声高に話している。面白そうな話題に、こつちも本腰になつて、聞いていたというわけである。

『それがね。実は聞くも哀れな話さ。式があんで、いよくお床入というクライマックス、花嫁がキヤ

ッと呼んで寢床から飛出した。そして、泣いて両親のところへ駆けつけて、とても氣持悪くて、夫婦の契りが結べないと訴えるのだね。どんなことをしたのか？ お父さんが聞いても、恥しがつて娘は云わぬ。そしてお父さんが、暗いのを幸い、娘に化けて、お婿さんの寢床へもぐりこむと、お婿さんお父さんとは知る由もなくうしろから抱きしめてへよく帰つてきてくれたね。夫婦の契りは神聖な行事なんだから恥しがることはないんだよ』と云つて、両手を前へやつて、お父さんを抱きこむとやゝあつて、おゝ！と叫んで（突きぬけた！）と一声高く絶叫したというのさ』

『自分のと間違つたんだね。何だいそのお婿さん。東大出の秀才でも、その方にかけては、まるでオカなんだね』

『それがね、風俗学でオカマばかり研究していたんでね。初夜のポーズも、オカマ流と相成つたというわけさ』

性智識がないところなんにもミジメという話。





夜這いの一夜



私の田舎の方には、まだ昔の名残りが残っており
ます。楽しいと云えばとても楽しく、野蠻的やばんてきと云え
ばこれ程野蠻的やばんてきなのはありませんが、夜這いと申す
ものです。

暗い晩だよ、暗い晩だよ

まっくら闇だよ

親父とつつかめえて色仕掛
何だこの阿魔あまあきれたな

立 花 咲 也

(農業)

人は見掛けによらぬもの
夜這い同志の掴み合い

お父ッあん勘辨かんべんして頂戴な

こんな歌がある位ですから、その程はお察しにな
れることと思いますが、暗い晩などにうっかり娘の
方が夜這いよばいなんかをすると、こんな結果になりかね
ないこともあるんです。

これも、暗い晩のことでありました。村の若い者
の中で、一番勇敢ゆうかんだと云われている勇太郎が、村長
の娘の和枝に夜這いをかけたんです。

これは、あとで大笑いになつた話ですが、勇太郎
は、村長の娘の和枝に夜這いをかけようと思うと、
夕方から準備じゅんぶをして待ち受けました。



この夜這いと云うのは、ねらう娘の寝ている場所が何処であるか、家人はどんな状態になつてゐるかそれをよく調べてでないと、とんでもないことになつてしまいます。

娘のところへ忍んだつもりで、どうも娘にしては身体の様子がおかしいがと思ひながらも、思ひをとげて帰つた翌日、一夜の調據にと相手におさえられた、ふんどしに、手拭を添えて六十、婆さんから送られてきたなんてのは、失敗も失敗大失敗と云うことになつてしまいます。声も出さず、氣配もさとりせず、そして思う娘と情を通じなくては、この夜這の楽しさはなく、スリルもないんです。

勇太郎は、その道では豪の者でしたから、すべてのことを調べると、夜中になるのを待つて決行することになりました。

頃は夏の盛り、戸は立ててあると云つても、ほんの体裁だけで、風を通す爲にとりどころにしかありません。

勇太郎は折しもの曇空を幸いと、用意の手拭で頬かぶりをし、浴衣の裾を端折ると、村長の宅の生垣を乗り越えて中に入りました。庭をそつと足音もなく進み、やがて縁側に足がかかる。

次の間の八疊に、和枝が一人で寝ていることになつており、縁側から上つた座敷には、誰も居ないことを確かめてありますから、勇太郎は四ッ這いになると、和枝の寝ている八疊に、手足で這いながら忍んで行きました。

流石に女の子の寝ている部屋です。外の空気を吸つてきた鼻に、かすかに化粧の匂いが傳わつてきます。

勇太郎は、敷座を手さぐりで越すと、急にワクワクしてくる胸をしずめながら、布團に近附きました。大きな家の中は、例え月夜の晩でも薄暗いものです。それなのに、外は曇天、家の中はそれこそ鼻をつままれても判らないような暗さです。

勇太郎は、胸をしずめると、そつと耳を澄ました。これでかすかな寝息が聞えれば、万事OKです。

布團の裾が手に触れる。だが寝息は聞えないのです。

『あれ、便所にでも行つたのかな……』

そうッと布團の上を手さぐりしている中に、誰





も寢ていないことが判ると、勇太郎は身体をかくそうと思ひました。

もし便所へでも行つていて、帰つてきて、電燈でもつけられたら、何も彼も失敗に終つてしまうからです。

そのときです。引つこめようとした手を、そつとおさえるものがありました。勇太郎はビクツとしました。

和枝が夜這いの來たことを承知で一旦は身体を避けて、改めて又出した手に触れてきた、と思つたからです。

勇太郎は、失敗したと思つたので、その手を拂うと、立ち上つて縁側の方に逃げかかりました。

すると、急に追つて來る氣配がしました。逃げようとする腰のところに、確りとしがみつかれると、これ以上暴れるわけにいきません。

村長の娘の和枝さんは、顔も綺麗だが、こりや精力旺盛だわい。しがみつかれながら、勇太郎は思ひました。

その勇太郎の思ふのも無理はありません。和枝はしがみつただけでなく、自分の身体の上にのしかかつてきようとするのです。

勇太郎はあまりのことに、すっかり恐ろしくなりました。

こうなつては、もう勝負はきまつたようなものです。それに和枝の身体の感じは、まるで男のように頑丈なのです。

勇太郎は夢中になつてしがみついてくる和枝の身体を振りはなすと、立上ろうとしました。

その途端、パツと電燈が点きました。

『やッ……』

『あッ……』

『キヤッ!』

三つの声が同時に上りました。勇太郎と組み合つていたのは和枝さんではなく、同じ村の若い衆で、お互いに和枝さんとはかり思つていたところ。本物の和枝さんは、家人の寢しずまつたのを待つて、恋人と裏庭でひそかに語り合つて、今そつと戻つてきたところなのでした。

そして、物音がするので、雞でも戸惑つて座敷の中へ上つたのではないのかと電燈を点けたのでした。

二人が、顔を見合せた後、慌てて逃げていつたのは、言う迄ありません。



旦那の子供かな？



鉄^{はさみ}を手にして、一日中日当りのいいところで、パチンパチンと植木の手入れをしているのは、仲々いいもんでございますね。

それで十時と三時にはお茶とお菓子、その上、たまにはとてつもなく楽しい濡れ場なんかを口へで見られるんですから、この商賣はこたえられませんか。

なんて、のつけからいいことを申し上げても、

平井昇

(植木職)

判るのは神様ばかり

アバンガールも相當

なものです

そうそういいことばかりは、本当にないんですよ。だがこの間、お顧客^{きやく}の旦那から、自分の商賣は、その位に思わなくてはいけないと言われたばかりなんです、こう申してみただけですよ。

たまにはつらいことにもぶつかりますが、この度は、一寸艶^{つや}っぽい面白いのを一つやつてみたいと思います。

もう数えれば、一昨年になりますが、恰度^{ちやうど}今頃のことでした。庭木の手入れと、木に巻いてある霜避けの蕪^か解きに、出入りの屋敷へ参りまして午前中でやつと三分の一ばかりが終りました。





少し動けば汗ばむ位のよい陽氣ですから、晝飯を終つて一服していますと、何となくいい氣持になつて参りました。

それでも、眞逆^{まぎさか}いい若いモンが、人眼につくところでグウスカもみつともよいものではありませんから、池の横の大きな庭石のかげの陽当りのいいところで、一寸日向^{ひなた}ぼつこみたいにみせて、眼をつむりました。

そうです、二三十分もいい氣持になつたときでしょうが、若い男と女の微かな話声で眼をさました。

そつと耳を澄ますと、私が寝ころがつている庭石の横のところに、この家の書生さんと、可愛い女中さんが、盛んに何か話しているんです。

盗み聞きしては悪いと思いましたが、私は聞こえるままに、つい聞いてしまいました。

『ねえ、あなたの言う通りにしたのよ』

何かもう話したあとでしょう。そんな風に前の関係がどうなっているのか、女の声がするんです。

『よくやつてくれたよ。だが、これからそれがつづくと思うと、僕はつらいんだ』

これは書生君の声でした。



(28)さんの首を絞め現金卅圓を強奪逃走したと向島署に届出た

○：そこできみさんを調べたところ当夜義弟と一緒にいたことがわかり不審の點が多くどうやら夫の留守に不倫な關係があつたのをごまかすための強盜騒ぎ、困つた事件に賊が押し入り妻きみだと捜査係では思案投首

『でも……あなたがそうしろと言つたのでしよう。私は考えると情なくなつたんですけれど、あなたが……』

『判つたよ。僕と君とがこうなつてしまつて、それを二人で処理出来ないのが一番悪いんだけど……』

『こうなつてしまつた以上仕方ありませんわ』

『そりやア判つている。二人で肉體關係を結んで、その結果がどうなるか恐ろしいので、旦那さまに押しつけようと……』

『それは、あなたが教えたのじゃありませんか。私



は絶対にいやだと言つてあれ程反対したのですよ』

『だが、僕はそれ程君が簡単に……』

『簡単に……そんな風にあなたは仰有るんですか、

それだつたら、子供が出来ようがどうしようが、あ

なたがちヤント責任を持つて下されば、何でもな

いことではありませんか』

『そうは言うけれど、あのときは眞逆、君が思い切

つて、そんな風にするとは思わなかつたのだよ』

『今更もうそんなことを言つたつて……』

要するに、二人は恋仲になつて、身体を許し合つ

ているんですが、もし子供が出来た場合にはどうし

ようかと言うことになつて、此処の旦那が、女中さ

んに色眼をつかうのを幸に、若し子供が出来たとき

には、旦那は押し付けられるように、旦那とも関係

をしちやえと言うことになつて、それを女中が実行

しちやつたと言うわけなんです。

私は驚きましたね、近頃の若い者には。

それから十分ばかり何か言つていましたが、チ

ュツと音をさせると、やがて別々に立つて行きました。

た。

私は、見付かつたときの氣まずさを思つて、庭石

の裏側で、狸寝入りをしていましたが、さてそれか

らどうなつたかと言うでしようが、話は、それだけ
なんです。

旦那は今年四十八ですが、その女中を後添いにし

て、子供が一人、可愛い男の子です。

その当時、旦那は奥さんさんを亡くして一人でい

たんです。

私の思うには、書生さんとそんな風にして計劃を

している中に、本当に妊娠しちやつたんですね。

それで、旦那の方は仕方なく結婚することになつ

たんじやないんでしようか。

書生さんはもう今は居ませんし、それに別にこの二

年間家の中が揉めた様子もありませんから、女中と

書生の二人の間は、今様にハッキリと割切つたんで

しようね。

女中、いや今では奥さんですね。この奥さんは、

そんなことのあつたような顔なんか何処にもみせず

今ではパリツとしたもんです。

そして男の子は至極元氣です。その中に何かなき

やアいいがと思つている

のは、おそらく私一人で

はないかと思うと、莫迦

くしい位です。



青春の處理の仕方

中村 由 枝

(看護婦)



女でもウエていると
恐ろしいものです

困つたような恥かしいような、その時の顔つたら
後で思い出してはついおかしくなつちやつて、フ、
フ、そりやア、女ですもの、妙な氣持になる時だつ
てありますわ。

私の同僚どうりようなんかは、それを丹念にメモしてる方が
御座居ますわ。

書物で習うのと、実際とでは随分違いますものね。
くわしいデーターを作つて、分類までなさつてい
る……

『あんだ、それどうするの……』
そう面白半分に聞いてみると、

『私、女医さんの試験うけて、それから、このデー
タ―と研究で博士号を貰おうと思つてるの……』

職業柄しよくぎようがらどうしても早く、セックスに目ざめてしま
うようです。

内科や泌尿器科ひにようきかですと、異性の方のを拜見する機
会も多く、初め、それこそまともに見られなかつた
ものが、治療しても平氣でいられるようになってし
まいました。

若い異性の方ですと、そんな時、よく変化を起し
ますわね。



眞面目で言うんですから、アキレてしまいます。
ほかの看護婦さんに聞いてみると、彼女のデータ
のことは病院中有名なんですつて、
『うそよ。あんたにそんなこと言つてたの……フ、
フ、あの子つたら変態性^{へんたいせい}よ。あれで変なことしてる
のよ……』

変なことつて、どんなことだか私にもよくわかつ
ています。

看護婦は誰でも青春の処理の仕方を知つていま
す。太い注射器を使つたり、体温計を用いたりして
……ですから、それを当ててるんだらうと思います
の。なかには卵に丹念な密画を描いたりなぞして……
それがもつところじてくると、麻薬の注射を独りで
している人もいます。

その時の氣持が、そつくりそのままだというので
すね。でも、こうなつたら、救われません。

異性の医者の方に熱をあげて、奪い合いのような
競争^{きょうそう}をするのは珍らしいことではありませんし、たい
てい、そのために処女でなくなる場合が多いんです。
簡単なソウハも自分が出來ますから、処女という
ものに対する氣持がそれ程尊いものに考えられてい
ないんですね。

附添看護婦さんが患者と変な具合になることもよ
くありますし、殊にいいところのお坊ちゃんなんか
だと、看護婦のほうから手を出して、玉の輿^{こし}に乗ろ
うとする方だつてあります。

これは先輩のある看護婦さんにお聞きした戦争末
期の話なんですけれど……

空襲^{くうしゅう}ははげしくなるし、いつ敵が上陸してくると
もわからない不安な戦況^{せんきやう}ですから、病院の主力は重
患者と一緒に殆ど山梨へ疎開^{そかい}してしまつて、輕症患
者が僅かと若い看護婦さんに男の医者一人だけ残つ
たそうです。

患者五人のうち女が四人で男が一人、看護婦の方
は十人居たそうです。

『アメリカ兵が東京湾に上陸したそうだ……』

ある日、そんなデマが眞^{まこと}しやかに病院に傳わつて
きた。

戦況^{せんきやう}が不利な時ですから、そのデマをすつかり信
じて、皆おろおろしてしまつた。

たいてい身寄りのない
者ばかり残つていますか
ら、逃げ出すところもな
いんです。





『アメリカ兵が來たら、全部貞操を奪われちゃうぞ……』

前からそう言われていただけに、そのことがおそろしくて、皆神経がおかしくなつてしまつたんだそうです。

それだけではなく、殺されるかも知れないという土壇場に追いつめられて、なにか、そのまま散つてしまふのが惜しくなつたんだそうです。

所用があつて医師は外出してましたので、異性といつては小川さんという患者だけだつたそうです。

その小川さんが、便を催おして便器にまたがつています。

熱のため、なかなか便が出ないので、前をまくつたまま長い間きばつていたそうですが、見るとはなしに、看護婦さん達が、それを眺めているうちにやるせなくなつたんだそうです。

そして、誰からともなく、『わあッー』という歓声をあげて、小川さんをベットのの上に組み伏せてしまいました。

そしてかわるがわる、女の念佛講をやつてしまつたんだそうです。



○廿二日夜十一時過ぎ、上野署へ二人組強盗にやられました！と廿七八歳の瘦せ型の男が届け出たところが酒臭い息を

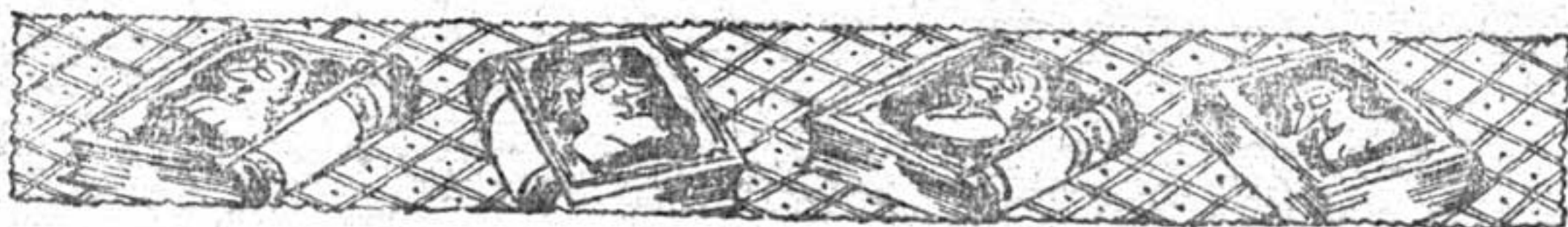
吐き申立に不審があるの
で事情をきいてみると
○この男千葉縣松戸市
新田一四三三会社員小
松原実(二八)といい最近
千住署の某巡査に愛する
彼女を奪われヤケクソに
なり飲み歩いたが、途中
電車で胸をなくすという
災難續き。こうなつたの
も女をとつた巡査のため
だ狂言強盗でお巡りを騒
がせてやれとトンダ人騒
がせをしたもの

女だつて、いよいよという時になると、そんな氣持になるものなんです。

『どうして、あんなこととしたのか今から考えると不思議なのよ。……でも、アメリカ兵上陸はデマだといふことがわかつたけど、たいへんなものをその時上陸させたの……』

そんなことを言つてらしたので、何を上陸させさせたのつて私が聞くと、

『フ、フ、あの……梅毒を上陸させちやつたの……小川さんの』



花街醫者ともしなれば

南弘明

(開業医)

診察室



スケ平心は出すもんでない
とつてもあぶなかつた話

皮膚泌尿器科性病科という看板を、この花街に近い場所にかかげてから、すでに一年たつ。だいたいはひろくなつて、このごろでは、お座敷かえりの若い妓などから、思ひかけぬところで、

『先生、今晚は——』

などとアイサツされて、若い医師の影山は、おもはず顔を赤くした。新橋や赤坂の一流芸者とちがつて、この辺の芸者は、ほとんどが枕芸者だから、大

概シモの病氣をもつてゐる。あの声で、トカゲくう氣かホトトギスで、蟲も殺さぬ可愛い顔をした奴が悪性バイドクに罹つていて、裏切られたよう感じをうける、こともすくなくない。

『先生、この子を、診察して下さいません』

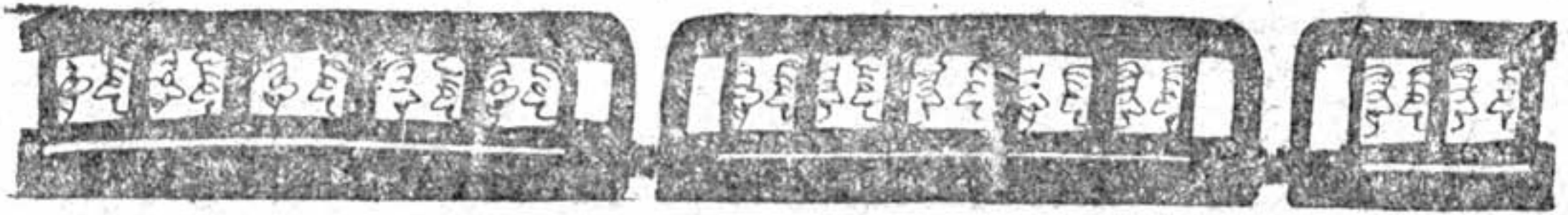
本人自身、五十を越し

てるクセに、一向色氣が

衰えず、ときどきトリツ

ペル(淋病)の注射を受





けにくる置屋の女主人が、ある日、十八ぐらいの少女を連れてきた。

『どこが悪いンですか』

『いいえね。どこもわるくないんですが、ね、先生綺麗な子でしょ。近ごろにない上玉ですよ。掘出し物ですよ』

当人を前にして、ズケズケとそんなことをいう。なるほど、色白で、丸ばちやの美人である。どこもわるくないのに、何しに連れて来たンだろうと、ふしぎそうな顔をする。

『先生、少しお小水の具合がわるいンですよ。シヨウカチつていうンじやアにいでしょうか』

『夜尿症じゃないンですか』

『何ですか。ヤニヨウシヨウつていうの？』

『大人で寝小便をする病氣のことです』

『あら、いやアだ。そんなンじやないわよ。ねえ』

と女主人は、少女にむかつて、若い女みたいに蓮つ葉な調子で言つた。それから、影山のそばへ寄つて来て、妙に馴れ馴れしく、耳に口をよせて、

『ね、先生、大抵大丈夫だと思ふンですけど念のため、検査して頂きたいンですよ』

『処女か、処女でないかつてことよ！』

影山は、ちよつとからかつてやりたくなつた。

『そんなこと、あんたにわかりませんか。永年のカシと経験で——』

『そりア大抵はわかるのよ。けど、やつぱし、お医者さんでないと本当のことはねえ』

『普通の診察料とちがつて、鑑定料をうんと出してくれますか。処女の鑑定料なんて、やつたことないけど相当大仕事ですからね』

『あら、先生だつて、おもしろいでしょ。役得だわこんな可愛い子のを』

『冗談じやアない。大してありがたいでもないですよ』

『先生、意地悪いわないで、たのむわよ。近いうちに、この子水揚げさせるの。それで、異常があるかないかも見て頂戴』

色つばい女主人は、そう言つて、影山の肩をポンとたたいた。処女鑑定なんてのは診料科目の中にはいつていない。そんなことをしらべた上で、どこかの狎々オヤジの人身御供にするのかと思うと、人道的な義憤さえ、感じるのだが、こんな場所で、性病医をしていると、ヒューマニズムなど言つていられ



ない。

とにかく診察してやつた。少女は実にキレイな体をしている。しらべた結果、むろん、一点の疑いもない処女であつた。

『おばさん、安心なさい。正真正銘の処女ですよ』
『そう。どうもありがとう』

女主人は、外国タバコを出して、影山にすすめ、

『あんた、先へお帰り』

と少女をかえしておいて、

『優秀な子でしょう』

『うん、美しい子だね』

『どこも優秀でしょ』

『うッふッふッ、そんなことはわからんよ』

『ね、先生、モノは相談だけど、あの子の水揚げ、

先生にして貰えないかしら』

『ぼ、僕に？ おばさん、僕はお金なしてないよ』

『ううん、いいのよ。先生ならタダで』

『タダ？』

影山は眼をまるくした。一回の水揚げに、五万円から十万円取つてるといふウワサがある。この勘定だかい女主人がタダで水揚げさせるなんて、何かコソタンがあるのではないか。――

『先生、あの子きつといいわよオ』
女主人は、挑発するようにいう。

『何がいいンだい』

『うッふッふッ、きくだけ野暮よ。近來マレにみる上玉よ。ね、先生最初にあの子の体をみた縁で、あの子の水揚げは先生にたのむわよ』

『まア、考えて置こう』

女主人は、ニヤニヤ笑いながら帰つて行つた。まったく薄氣味のわるい話である。それから二、三日して、他の花街で開業している先輩に話をすると、先輩は、カンラカンラと笑つていつた。

『君、性病医が、芸者の水揚げを、タダでしたらどうなると思う。大臣が業者から、百万円もらつたと同然、もうその業者に一生頭があがらない。汚職だよ。むこうは、医者をつらしこんでおくと、タイヘンな利益なんだ。第一、君これからの治療代は、みんな踏みたおされることを覚悟せにやならんよ』

『あッ、そうか』

危いところであつた。

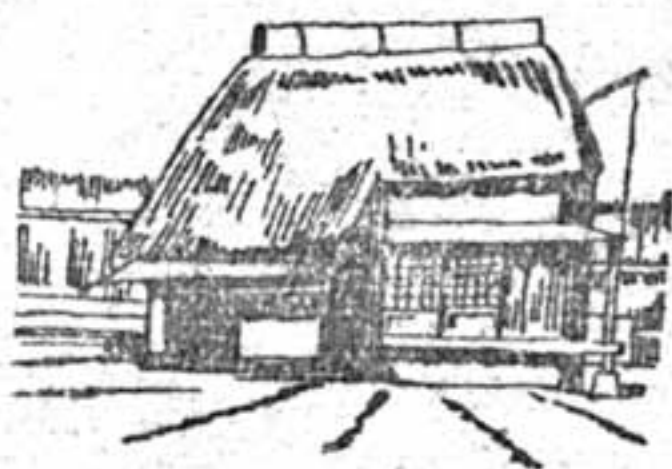
だが影山は、あの妓の素晴らしい肉体をまざまざと思ひだしたのである。



史土郷流風

結婚の
大奇自





夜伽よとぎ即試驗婚の桃源境

さくくも咲いて世間が陽氣ようきになつて來た。
 春は氣持がうわついて落着きがない。時恰も参衆兩院の選挙戦、こう氣違ひ沙汰の騒ぎがつづいては益々たまらないどこか靜かな遠い処へでも行きたくなる。金をたんまりふところに抱いて、道祖神に誘われるがままに、足の向くまま氣の向くまま、当てどなくぶらぶらと日本全国の旅に出たらどんなだろう。この世には我々の知らない処が沢山ある。そして、其処では未知の珍奇ちんきなことどもが秘かに息づいているに違ひない。世間は廣い。
 それはさて、日本の各地には諸々の珍奇な風習がある。中でも結婚の風習については、各地各様、それぞれ特徴がみられる。いづれも、その土地独特の民情、風土と結びついて、根強い傳統を作り、現在も尙存続しているのである。中には原始的蕃習はんしゅうとみられるものもあるにはあるが、仲々、風格と情緒に富んでいて、一概には蕃習とは云い難い。では、どんな奇習が存するか。次にそれを御紹介しよう。

さて、信州の北部地方、蓼科山麓に平安部落と呼ばれる、戸数百二十戸の部落がある。此処は里から十数里山奥の文字通りの原始部落で、

信州では『山家衆』或は『在郷つぼ』と輕視しているが、一方、此処は『桃源境』として羨望されている。大体、この部落は『平安』と名づけているだけあつて、嘗ての昔、都の高貴の流れをくむ子孫によつて聚落したもので、今日も尙、平安の昔さながらの生活ぶりだと云われている。それか

あらぬか住民は一樣に優美にして典雅殊に女性は平安部落の名にふさわしく瓜ざね顔で漆黒な長い髪をなだらかな肩の辺りで無難作に束ね、いづれも優雅な古典的美人である。

此処が桃源境とよばれる所以は、その性生活が驚くほど解放的で奇習に富んでいるからである。その奔放なことかの王朝の昔もかくやと許りの風情なのである。

この部落では男女の間に娑婆しゃはで一般

に行われている様な嬌曳あひびきは決して行われない。たとへば、娘を誘い出して草原で恋を語るとか、人氣のない原始林にかくれて愛の取引をするといった様なことは一切行われない。

専ら、若い衆達は娘の寢室に忍びこんで、愛情を訴えたと云う手段が行われる。俗に云う夜這いであるが、此処では『夜伽よが』と云う上品な言葉で云う別に夜伽でなければ氣分が出ないとか、スリルがないなどと洒落しゃれてる訳でもなければ、貴人の子孫だから、野天あふかんを輕蔑けいべつしているのでもない。

此処では夜伽即戀愛であつた。

尤も王朝時代さながらの生活の彼らであつてみれば、他の戀愛手段をとらぬのは無理もない話で、従つて、彼らの戀愛には喋々ちやうくなんくする舌は必要ではない。舌は戀愛の敵である。

専ら、暗黒の閨房内の男女の動作が愛の言葉であると云う最も原始的な、

そして、最も實際的な人間性を衝いた戀愛形態であり彼らはその濃度によつて、お互の愛情を測定そくていし合うのである。

そして、彼ら若者達は幾人かの相手と接し、最も愛情の濃こまやかな相手を結婚の対象にえらぶのである。だから、彼らの結婚はお互に試験済みであるから、後々いざこざは起きないと云う。(この部落は鎖国主義さこくしぎで外部との交際はさけている。従つて



同族結婚で、こうした試験婚の風習はこの同族の集団内に悲劇を起こして不和の生ずるのをさけると云う政策から発したもののようである。

さて、この夜伽は結婚の前提でもあるので部落では公然の秘密であつた。

娘が十八才の春を迎えると、親達は彼女らを別室にねかせる。早い話が夜伽の来るのを秘かに期待しているのである、其処で自分の娘を若い衆達に評価させるわけだ。これは親の重大な務の一つであり、忠実にそれは実行されるのである。

しかし、いくら公然の秘密でも、この夜伽は堂々とのりこむわけにはいかない。

其処には昔からの不文律が厳としてある。

つまりどこまでも忍んで行わなければならぬので、若し家族にみつかる様なヘマな奴は今後誰にも相手にされ

ないし、又、捕まつてどんな処刑をうけても文句は云えないのだ。

娘の寢室はどの家でも一番奥の間に決まつている。そして、その隣室には娘の両親がねているのである。

夜伽王国にしては、ちと不粹で矛盾した配置の様だが、そうやつて男の度胸を驗したり隣室の娘の状況に氣を配つてゐる訳だ。早い話が、新婚初夜、夫婦の床入りを見届ける仲人の心境と役目と相通ずるものがある。

若い衆達は息をこらし、足音を忍ばせて両親の枕許を寢息をうかがつて娘の許へ這入りこむのだが一般には両親はみてみぬふり、きいてきこえぬふりの高いびきと云うのが定法の様である。と云うのは、男女共、数をこなした者が部落の第一人者として賞讃されるからである。

又、忍びこんでからも娘に名乗つて責任の所在を明らかにし、その承諾を

得なければならぬ。これは武士が合戦の場合、名乗りをあげるのと同様で遮二無二手籠めにする様な卑怯な振舞いは許されない。

一方、娘には拒否権が認められてい

る。相手が氣に入らない男だつたら、身を任せなくともよいのである。

この夜伽に關聯して妊娠ということでは考えられるが、独特の処方がある様である。これは彼らの門外不出の秘薬でかたばみに似た藥草で、そこいらのインチキ藥とは違い素晴らしく効果が

ある。さればこそ、若者達は夜の訪れを待ちこがれ、晝間の疲れも忘れてそれぞれの娘の許へ夜伽に出かける。娘は娘で暗黒の中に息を殺ろして解放者の到來をいまかいまかと待ちうけるのである。

そしてそこでお互の愛情が完全に一

致した時、結婚の約束をし、後日仲人を介して娘の親に申込む。婚約が成立すると、娘は髪に赤い布でリボンの様なものをつける。この印のある娘には

他の若い衆は最早絶対に忍びこむことは厳禁される。將に夜伽は即恋愛であり又、即結婚の前提で、現在まで傳統的に続いている。

告して、『つきましては、御苦勞でやすが、天狗の裁判を開いて貰いてえ……』と申込む。

若い衆は申込みがあると、早速村中に触れを出して、独身の男女を全部村の集会所に集め、一方、婚約者二人の出席を求める。

新婦の尻を叩く奇習

最近では恐妻病がばかに流行つてい

る。の死命を制する英雄豪傑といえど、内にては即ち、女房が一発の尻にも首をすくめて將に顔色なし、と云う処だ。

男と云う男、亭主と云う亭主はこの病氣になやまさ

れている様だ。それを評するならば東北地方は鳥海山の山麓の山村に、

座が出来ると、仲人が婚約者二人を裁判官の天狗の前に案内して来る。『では、これより吟味に入る』と鳥天狗の宣言でいよいよ裁判が開



下

にひれ伏す代議士諸公の如く、唯、

女房の尻を尊ぶことかのワンマンの足

天狗の裁判と云う奇習がある。

諾々命に伏すること即ち犬の如し。朝

これはどんなものかと云うと、まず

に尻に敷かれて泣き、夕に尻に乗つて

婚約が成立すると、仲人が娘方の村へ

恐々外にあつては懸懸片笑これ天下

行つて、村の若い衆に婚約の成立を報

行つて、村の若い衆に婚約の成立を報

行つて、村の若い衆に婚約の成立を報

始されるのだが、此処で裁判官の天狗によつて、新婦になる娘は、『淫奔し

たことねえか?』とか『親に口ごたえしたことねえか』とか『盗人したことねえか……?』などと、素行、性格、欠点等を訊問される。

娘が偽りを答えたり、かくしたりすると、周囲の若い衆が攻撃したり暴露する。そしてそれぞれの罪(?)により、『淫奔』は百とか『おしやべり』は五つとか、『親不幸』は三十といったように、裁判官は藁の棒で娘の尻をひつぱたくことを烏天狗に命づる。

この判決の前には、絶対服従、どんな長者の娘であろうが、村長の娘だろうが拒否することは出来ない。否應なしに公衆と將來の亭主の面前で大切な尻に罰棒をくらわなければならぬ。

一体どうしてこんな奇習が生れたかと云うと、この地方は娯樂の乏しい処から昔から淫風甚だ盛んで、男女十五六才で性の経験者となる。そのために種々の弊害、悲劇が生ずる。そうした

風紀上の問題は到底生やさしいことでは済みそうもない。其処で、娘の素行を暴く『天狗の裁判』を行うようになつた訳だがこれは全く女性にとつて致命的な風習で、結婚前の淫奔は良縁を逃がしまかり間違えば一生涯独身で送らねばならぬ様な破目になるので、必然的に素行に注意する様になつて來た。

しかし、人間である以上は誰でも欠点や批難は免れ



ないのだから、折紙つきの娘でも、多少の罰棒は必ずうける。

これは全く將來の亭主にとつて、有難い話である。結婚前の新婦の素行を保証され、性格、欠点を指摘されるのだから女房操縦術を教示された様なものである。

と同時に、新婦の罰棒をくわされている現場に、將來の亭主が同席していると云うことは、女房は亭主に弱点を握られて一生頭が上らなくなる。

その爲めか、この地方には嫁天下は見当らず、まことにしとやかな、そして貞淑な女房揃いだと云う。

まことに、羨むべき話で、けだし良風と云うべきであらう。

処で、新婦の尻を叩くと云う風習は信州の小縣地方にもみられる。これは天狗の裁判とは趣を異にするが、相通ずる処がないでもない。

これは結婚式当日の風習だが、先ず

婿入りが済み、夕方になるといよいよ待ちに待った花嫁さんが文金高島田もゆかしく『嫁よ、嫁よ』と高らかに親戚縁者に守られて新郎宅の門口に立つると、其処に待ち構えていた、『雄蝶雌蝶』と呼ばれる七、八才の子供(男女)がとび出して来て、薬でつぼうと稱する奴で門口の花嫁の尻をいやというほどぶちのめす。

これは家の中へ叩き込むと云つて、縁起をかついだものだ。

さて、三々九度の盃が済み、式服を着かえてから花嫁は宴席に出て、新郎の友人一同に挨拶をするのだが、その時が又大変である。

友人どもは待つていましたと許り、花嫁の手を握つたり、抱きよせたり、腰をさぐつたり、ひどい奴は手を入れたりしていたづらする。新郎はこれを見てむくれるのは当然で、

『なにをするだッ!』

とばかり、花嫁をかばい、友人一同を向うに廻して立廻りをおつぱじめるが、衆寡敵せず組みふせられてしまふ『この甘ちゃん野郎めッ』

『女房がそんなに大事か、そんなじや將來が案じられるわい』

と口々にのしりながら、新郎をこづく。

『どうか皆さん、勘辨しておくんなすつて……』

花嫁はみるにみかねて哀願する。新郎もそれにならつて、許を乞う。

『じゃ、勘辨出来ねえとこだが許してやる。その代り、二人ともおら達の云うことをきかなくちやなんねえぞ……』

友人一同はこそそ相談して、新郎に薬でばうで女房の尻をひつぱたくことを命ずる。

そして、新郎が薬でつぼうをふり下すたびに『一つ』『二つ』……と声を合せて見物する。

『もつときつくぶて……』

『なんじゃ、力が入つていねえぞ……』
と野次る。

これは夫婦愛を刺激させる風習で、花嫁が仲裁に入るのが早ければ早いほど、愛情が濃やかだと賞讃され亭主も女房をいとしく思う。だが、尻をぶたれるのはそれだけに数を多く注文される。亭主は最愛の花嫁の尻を叩きながら、一層の愛情を促進される訳だ。

一寸淫虐的な風習だが、仲々味がある。この時の薬でつぽうと云う棒は、薬の中に桑の棒を蕊にして作られたもので、分杯学的にみると、完全に男性の持物の象徴で、かの天狗の裁判と同様花嫁の尻を叩くという処に、嬉天下を暗に戒めたものの様である。

その証據には、注文通り新郎が新婦の尻を叩き終ると、『ごくろうでございました、おめでとうでござす』と友人一同は初めてお祝いの言葉をのべ、改め

て酒宴の席が設けられる。そして、夜の十時頃になると『ちよつくら婚さま借りやすよ』と云つて、宴席から新郎を連れ出し、友人宅で一晩中二次会の相手をさせて、帰さない。

花嫁はその新婚夜を一人ぼちで、やるせなく過さなければならぬ。

これも先刻の尻叩き同様夫婦の愛情をかき立てる目的の風習であり、且つ

將來の亭主の交際に女房に文句を云わさない前例を植えつけるべき意圖が含まれている様だ。この他、これに類似した風習が各地にみられるが、そうしてみると、恐妻乃至は嬉天下と云う奴は、古來から亭主族のガンであつたらしい。尤も日本はその肇國の當時から女ならではの夜の明けない国であつたから、宜べなるべしである。

花嫁の處女は坊主が貰う



処で、先刻の亭主は、亭主たる新郎に提供されず、その里の坊主が処女を奪うのである。まず、結婚式が済むと、花嫁は白ムクの着物に着換えさせられ、夜を待つてお寺へつれていかれる。『和尚さんに、よく体中拜んで貰うだぞ』

即ち、花嫁の処

と云い残して、新郎や親類縁者一同



はお寺から歸つていく。後に残された花嫁が、暗い本堂で一人ぼつちでガタガタ震えていると、予め頼まれていた坊主(住職)が現われて、花嫁を沙彌壇の前に坐らせ経文を誦するそれが終ると、今度は花嫁にざんげを促がす。此処で過去一切のことを包みかくさず告白しなければならぬ。

『それでは、これから一切の罪を淨めて進ぜよう…』
 そう云つて、坊主は彼女を裸にし、体中珠数でなぜ廻す。それから花嫁を側の床につれこんで、引導を渡すのである。
 こんな間尺に合わない風習は一体どうして発生したかと云うと、これには色々な意味が含まれている様だ。

その第一は、心理学的な解釈だが、女性と云うものは、最初に処女を奪つたものに対して無意識の憎悪を抱く。即ち処女は女性にとつて生命より大切な宝である。その宝を無惨にもじり、んする男性は憎い。愛憎は紙一重表裏の如きものである。夫に処女を提供することは愛と共に無意識の憎悪を心の底に植つけることになる。それが今後の結婚生活の上に必ず形を変えて出て来ると云われている。従つて、初夜の花嫁が処女を第三者に提供すると云うことは、その憎悪をその第三者に轉嫁することになる。

そして、自分は処女ではないと云う

一種のうしろめたさが、夫に対して従順な、そして貞淑な妻を作りあげるものである。

これは、中世のヨーロッパに於ても中央アジア方面に於てもみられる風習で、そこでは初夜の代行者は、王様、僧侶、或は奴隷と云つたもので、常にその代行者は、絶対的権威者か、宗教関係か、又は最下等者と云うものに限られている。つまり、一夜の交渉によつて、後々私的感情を及ぼせない第三者と云うのが条件なのである。

次に第二だが、この地方の風紀のピン乱を物語っている。つまり、素行の悪い娘が、直接、新郎と初夜を過したならば、その非処女たることをバク露し、いざこざが起る。如何なる非処女でも、一應坊主の洗礼をうけて来たならば、過去一切の古傷は坊主との初夜によつてカモフラージュ出来ると云うものである。



従つて、花嫁の中には、この風習によつてほつと胸をなぞおろして、坊主に満腔の感謝を捧げているものもあるし、又、安心して結婚前の青春を享樂しているものもある。

前述の天狗の裁判と比べて、いづれが是か非か。しかし、こう云う風習も時には人助けである。

さて第三には、宗教的政策がみられ即ち、女性は家庭の主柱であり、亭主に対して相当の発言権がある。この女性即ち主婦のさんげをきき、貞操の

門戸を知ると云うことは、坊主にとつて、その権勢拡張上大いにプラスであると云わねばなるまい。

しかし、いづれにしても、岩見重太郎の猥々退治ではないが、人身御供的ないやらしくそして、暗くて、ユーモアのない風習である。

尤も、郷に入つては郷に従え——であるから当事者達は傳統にとけこんで平氣なのかもしれないが……。

唯羨むべきは坊主の役目であると云うべきか。

各地の試験婚

最近、男も女も女子の貞操とか純潔と云うものに鈍感になつて来た。

最近、男も女も女子の貞操とか純潔と云うものに鈍感になつて来た。

『貞操に対する女性の盲目的尊重と守護は、男子の処女性愛好と強要に基い

て発生したものである』もし、男子が

女の純潔に対して鈍感である場合、又は社会生活上或る種の原因のために、

処女性よりもつと重要であると認められるものが、之に代つて尊重せられる時には男性は勿論のこと、女性も割合その貞操に対して考慮しないようだ……』と。

たしかに、現在は純潔よりペンであり、処女性より享樂が重要視されている。その結果の風潮であらう。

しかし、この貞操無視、乃至は処女性輕視の風は何にも現在急に起つたものでもない。それは又は都会だけの現象でもない。

各地の結婚様式の中に判然と見出せるのである。所謂、試験婚などはその例である。

この試験婚には、女性がある期間男性の許へ行くか、逆に男性が女性の許へ出かけて滞在するかの二つの型があ

る。信州の佐久地方には『足入れ』と云うのがある。

まず、これはと思う娘の許へ行つて『ちよつとこれで計つてくれや』と云つて布に包んだ或ものを渡す。

娘は何んだらうと思つて、胸をどきどきさせながら包みを開く。と、出て

來たものは実物大の木製は男子の象徴である。

娘は『あつ！』と叫んで耳まで眞赤に染めて、あわてて袂でそれを覆う。

これは何にも、惡戯ではない。

この地方では、これが結婚申込の印なのである。つまり、男子の魂の程を

みせて、女性自身に適不適かの撰択の機会を與えるのである。女性はこの贈物によつて、自分に適當とみたら、庭

先の木の枝に赤い布を結んでおく。

(昔はこの贈物で女性は実験してみた様だが、現在は実行しない。『計つて

くれや』と云つて渡すのがその名残りである)

男はこの布をみると早速その夜娘の寢室に忍んで來る。娘は予め雨戸の心張棒を外して男の入來を待つてゐる。そして、そこで実地の試験婚を行つてOKとなると翌日、娘は両親に打明け

すると親は『そりか、そいつは目出てえ、じゃ早速かけ合いに行くべえ』と喜んで、男の家へ出かけていく。

『実は昨夜、おら家の娘がお宅の息子どんに大事なものを貸しやしたからナ、今日は息子どんを貸りに來やした』

『そりけ、そいつは目出てえ。調子はどんなでやしたや?』

『目出度く納まりやした』

『じゃ、件を貸してやるべえ』

そこで、男は三月間娘の家に貸される。

そして、その間夫婦と同様な生活を



しながら、其処の家の農事にせい出して働く。

若し怠け者だと三月後に実家へ返す時に、

『どうも、あんな怠け者じゃ財産つぶしまうで、娘は嫁にやられやせんわ』

と云つて、縁組みを解消する。

この『足入れ』は男が娘の許へ行つて生活する処に特徴がある。(『足入れ』の足は男の象徴を云つたもので、その特徴を如実に表わしてい

る) 又、娘が貸したから、男を貸してくれと云うかけ合いも面白い。

つまり、大事な娘を嫁にくれてやるのだから、三月間、男は働きに来て当り前だと云う観念がみられる。そして男を手許に於て、娘の將來を託すに足る人物かどうかを検討するのも、又、木製の象徴を贈るのも、実に用意周到な試験婚である。

こうした試験婚の風習は、各地各様である。

新潟縣西蒲原地方では、『トガタメ』と云う風習があつて、毎年三月上旬、村中の未婚の男女が鎮守さまに集まり互に酒盃をくみ交わして夫婦約束をした。

その夫婦生活の期間は長短いろいろで一定しないが、毎年三、六、八、九月の四回に宴会を開いて相手をきめ、この期間中は他の男子をして、己れの

女と交通することを禁じ犯すものがあれば、相當の罰金か贖物（あぐりもの）をとり或は村八分の罰金を加えた。

又、伊豆地方では、正月の祭が済むと村内の未婚の男女が互にクジを引き当つたもの同志は一年間夫婦生活を続け、又、翌年の正月にクジを引き直すと云う風習が明治の中頃まで続いていた。

九州の阿蘇山麓（あそ）の山村には、又変わったのがある。これは正月の三日に村の集会所に若い男女が集まり、男女両軍（びょうぐん）屏風（びやうぶ）を境にして、別々に分れ、男性側から各自帯を女性軍に投げかける。女性（せい）はめいめい一本つつその帯をつかみその両端の男女が一年間夫婦生活をつづけるのである。

まだ、いろいろあるが、この試験婚の共通した類似点は、

- 第一、生殖能力の試験であること。
- 第二、経済的な問題が含まれている

こと。

第三、家内乃至は家族制度の尊重より発していること。

第四、夫婦生活が中断され、或は拒否（きよ）されても不問に付されること。

第五、試験婚の行われている地方では、女子の処女性（けいせい）は輕視（けいし）されていること。

結婚は享樂ではない。

結婚は人類ののつびきならない本能であり、常に歡喜と悲哀にみちた、眞実の歌声なのである。私はこの稿を結ぶに當つて何故かしら哀調の琉球民譚（りゅうきゅうみんたん）が思い出されるのである。

遠い遠い昔、大きな津浪（つなみ）があつた時人も生物も皆死んで、島には兄と妹が残されただけだつた。そして、幾度か石楠花（しやくなんが）の花が散り龍眼（りやうがん）の実がみのつて二人の若い男女には漸く春のめざめが訪れて來た。兄は毎日、はち切れそう

な妹の肉体をみまいと努めてふさぎこむ。妹の胸も苦しくうずく。

『兄さん。お嫁さん貰いなさい』

或日妹は思い切つてすすめた。

『どこにお嫁がいるというのだ』

兄は絶望的な眼で投げつける様に呟く。

『いますよ。兄さん。居りますとも。それは可愛らしいお乳を持つた娘ですこの月が円くなつたらお迎えに行つておげなさい。七つの丘を越え、七つの森を抜けた、小川の岸辺に眞紅（まつか）な花を抱えて、きつと兄さんを待つています』

兄のたましいは異様にふるえた。やがて、月が円（まる）くなつた。彼は夕闇と共に家を出た。

新らしい花婿は、月光を浴びながら美しい花嫁の胸にだかれた。その花嫁こそ、姿をやつした彼の最愛の妹であつた……。

——結婚とはかなしい歌である。（終）



果して
出るか

埋藏金物語

果して時價數億と云われる埋藏金
は発掘されるか？ 確實な史料に
基づいて着々と探索される日本の
秘寶はいずこの地何處の山にぬむ
るか？

大阪でパンパン・ガールの客引きをしていた貧しい女が、寒夜に宝クジを賣っている。自分の子供のような学生に同情して、豊かでもない財布から二十円出して買った一枚のクジが、一夜明れば百万円に化けた。

これは決して作り話ではない。

百万円の夢は、クジを買わない人には、見る権利がない。たつた一枚でも買えば、その夢が見られる。考えてみれば、パチンコで十個の玉を買つて、あつという間にスツてしまふことを思えば、たしかに、宝クジの方が大きな夢を見せてくれる。

昔、ギリシャの哲学者が『夢見る力のない人は、生きる力がない』といったが、たしかにわれわれの貧しい生活から夢を取つたら、どんなに味氣ないものになるだろう。

しかも、今日のように不景氣な時代になると、きまつたように『宝探し』

の夢を見たがる。

これは日本人だけのことじゃない。イギリスの歴史なんてまるきり知らない子供でも、アメリカ映画のおかげで『海賊キッド』の名前は知っているだろう。

時は一六五〇年代のことだが、七ツの海を荒しまわつたキッドも天運つきで、イギリス海軍に捕われ、ロンドンで絞首刑に処せられた。

ところが、天下にその名をとどろかせた海賊キッドのことゆえそうやすやすと捕まると思わないので、かすめ盗つた金銀財宝のうち、金塊十二万ポンド（時価一千億円ぐらい）が、タイ国の真南にある小さな島に埋藏してあると今も伝えられているので、これを探しあてようと、英人九名の冒険家が本国を出発したというニュースを、ロンドンのBBCラジオが発送したことがある。

たしか去年の夏だつたと思う。

それから、二、三カ月過ぎた秋になると、当時、東京都下武蔵野市境字水吐三七九に住む良島正浩（五〇）氏が、海賊キッドが宝物をかくした島は奄美群島の一島で、その島は周囲二、三里、波上に浮ぶ一孤島で、海岸には空洞やサンゴ礁が多く、波が荒くてなかなか近よりにくい島だと、発表した。

そして『その島の名は語れない。利権屋の割りこみが恐ろしい』からのことであつた。

そうかと思うと、今年の二月二十七日の『東日々京新聞』は第一面に——ソロモン王秘宝の扉も開くか——という六段めきの記事を發表して、吾々の度ギモを抜いた。

それはもう南洋とか沖縄なんて遠い外国の話ではなく、残された四ツの島の一つである四国に在るというのだ。

讀まない人もあろうから、あらましを紹介しよう。

古代ユダヤ王国三代目のソロモン王の三つの秘宝、王位継承の証據たる『マナの盤』『アロンの杖』『神鏡』など時価八千億円の黄金が、四国剣山の山頂

に数千年の間眠っているといふ噂が十数年前からあり、その発掘に家財を失った人もあつたが、元連合艦隊司令長官海軍大將山本英輔氏を会長とする『古代文化研究会』が改めて、昨年夏から四カ月にわたつて発掘を行つた結果、つ

いに百余りの人体ミイラと古

製食器、タプレット（泥土板に古代文字を書いたもの）さらに、発掘者が水ガラスあるいはカガミ石と呼んでいる堅いガラス状の不思議な加工物を張りめぐらした住居跡を発見した。

噂のソロモン王の秘宝は現われず、

またこれは何の遺跡であるか、今のところよく分らないが、出土物が総て数千年を経ていると見られるほど古いので、この発掘から秘密の日本古代史の扉が開かれるのではないかと、今後の調査の成行きが注目されてきた。とある

つて剣山にのぼつた。それから十四年間、太平洋戦争なども眼中になく掘り続けた。

しかし、ついに噂の秘宝は発見出来ず、資金もつきはて、昭和二十五年八月に、恨みをのんで芝高輪の下宿の二階でさびしく病死してしまつたというが、果たして、彼は不幸であつたろうか？

十四年間も、八千億円の夢を見られるなんて

この剣山の秘宝に最初目をつけたのは、東京築地のある法律事務所の一事務員だつた内田文吉という人である。いのですぞ。

彼は昭和十一年七月、郷里の信州湯

田中から当時の金で二十五万円という大金を調達して、数名の友人とつれだ



×

×

×

武田信玄の埋藏金

ほつとした信玄は骨休みをかねて甲斐に帰つたが、間もなく濃州の岩村城を攻めることになつてゐた。その出発の前夜になり、信玄はひそかに腹心の將穴山梅雲をよんで、ある重大命令を下した。

何かの事情があつて、天正十年武田氏滅亡を見ることもなく尾張に逃れ、豊臣秀吉出生の地として有名な中村に土着した。

その子孫は後に江戸に出て、水戸家に仕えたこともあつたが、明治の新政が開かれた当時の十八代の孫弓削由司太は、横浜に移つて貿易業者になり、相当の財を残してゐた。

そこで穴山は、正直者の弓削新太郎勝正以下三人の侍と五十名の足輕をつれて、五十駄にのぼる武具を運び出したが、五日後に帰つて來たのは、三人の侍だけで、五十名の足輕の姿はなかつた。

由司太の子由一は日露戦争で戦死し、由一の子一司郎が家名をついだのは、彼が二十幾才かの時だつた。

武田信玄が産金に努力したことは有名だが、それと同時に、莫大な黄金を非常の際に備えて、埋めておいたともいわれ。その埋藏地については、幾多の傳説があり、その一つに、中里介山の小説で有名になつた大菩薩峠界隈があげられている。

その理由は――

天正元年一月、武田信玄は三万五千の手兵をひきいて、三州野田の城を囲んだが、城塞堅固のため容易に陥落しないので、約一カ月間兵糧攻めにしてようやく落した。

一方、信玄のひきいた手兵は、忽ちにして岩村城をおとし、勢いに乗じて三州去田の城の攻略にかかつた頃から信玄の彈傷が再び悪化したので、兵をまとめて引揚げる途中、信玄は信州平谷波合で客死してしまつた。

そして、穴山梅雲をのぞく三人の侍のうち、武運にめぐまれて生残つたのは、弓削新太郎正勝だけ、その正勝は

この一司郎が、弓削家に決して開けてはならぬと遺言された。

『たてなしの箱』というのが傳つてゐるのをある日思い出し、好奇心からその箱を開けてみると、古記録と地圖様のものが入つてゐた。

古記録には、穴山梅雲が信玄の秘命をうけて、武具と稱して運び出した五十駄の荷は、実は一朝ことある場合に

そなえた軍用金で、甲州の山奥深くに埋藏したものであることを明らかにしていた。

そして、秘密を守るために、連れて行つた足輕五十名は、同行した三人の侍が斬殺したのであつた。

これが端緒となつて、一司郎は埋藏金を探しはじめ、大正元年の夏、大菩薩峠の名もない谷川のほとりに埋藏してあつた丸いツボを発見することができた。

だが、それきりで、後の発見することができなかつた、

後のというのは、五十駄というところからの想像である。

埋藏地については、それぞれが別々の地図を持っていたらしく、穴山梅雲を殺した郷士が、穴山の懷中から、埋藏地図を発見し、それがもとで、郷士九右衛門は一夜にして百万長者になつたのである。

しかし、やがて、郷士仲間から憎まされて彼は殺されてしまつた。

かねてから、そういうこともあろうと考えていたらしく、子孫への遺書が残してあつた。その中に

『宝を得んとするものは千馬の槍に聞くべし』

とあつたが、そのことに氣づいた何代目かの時は、すでに明治になつていて、今さら槍や劍でもあるまいと、賣り拂つた後だつた。

明治四十三年の春、郷士の子孫である末吉郎が、ふと手にした『やまと新聞』に次のような化物屋敷の記

事を発見した。

『神奈川縣小田原町緑町四丁目字揚土は、昔上杉謙信が小田原攻めの時、道筋となつたところであるが、ここに一軒の廃屋があり、奥座敷十疊の間の長押に先代の置忘れしものか、一間半の银杏穂の槍あり、この廃尾化物屋敷の



評判高く、夜中人の足音がするかと思えば、風もなきにフスマが倒れるなど不思議なことのみ多しという。古槍の精のいたずらならんとの評判……』

今から考えると、まさかと思うようなことが新聞にのつていたのである。

この記事を讀んだ末吉郎は、不思議と、この槍こそ『千馬の槍』だと直感した。

さつそく小田原にとんで、問題の家を訪れて、槍を見せてもらうと、沢山の馬を彫刻した鉄が巻いてあつた。それをわずか五円でゆずり受けた彼は、家に帰つてからよく調べると、鉄の彫刻の部分が動くので、ひねくりまわしている、ほつくりと二寸ほど鉄がはずれ、その穴洞の中から紙きれが出て来た。

廣げて見ると、ずいぶん虫喰いができているが、たんねんに讀んでみた。

『かく〇ゆのわきてながる〇〇〇なを

のぼりてさせや〇〇こさか

あさひゆうひ〇〇〇る

いしうていしうてちぞ(不明)

たけ〇ちとせのいろ(不明)

むめがゆきみのさ(不明)

ちよやちよにさ(不明)

こがねのくち〇〇〇ひらかむ』

何だか、わかるような氣もするのだが、どうもすつきりしない。たしかに埋藏場所を教えているのだ、と考へながら、彼は謎を解くための研究を続けたが、どうにもわからない。

そうしているうちに、月日はようしやなく流れ、大正の御代に變つたが、謎の暗号を解く手がかりは全然得られなかつた。

その頃、末吉郎はふと、横浜の花咲橋の近くに三影丹波という靈術家がいることを耳にした。よくあたるというのだ。

苦しい時の神だのみの例にもれず、

末吉郎は、三影丹波を訪れ、問題の書面を見せると、丹波は両眼を閉じて手を組合せて、何かに祈つてゐるようだった。が、わかつた、と言つて、次のように解いた。

『かくしゆのわきてながるるいわあなと

のぼりてさせやちぞこさか
あさひゆうひつきにてる
いしうていしうてちぞもうて
たけにちとせのいろそへし
むめがゆきみのささなりし
ちよやちよにさかえます

こがねのくちぞなにひらかむ』
また、丹波の靈能力によつて判断すると、埋藏地は身延山麓で、埋藏量は当時の価格で一億数千万円、一個所は現在滝ッポになつてゐるのであきらめるほかないが、他の二個所はわかるはずという。

身延山麓といつても廣いが、末吉郎

は例の暗号文の『かくし湯』からヒントを得て、昔武田信玄が川中島の合戦で受けた傷を治療するためにこもったという下部温泉に見当をつけ、ここを中心にあたりを探索して回ったが、それらしい場所は見当らない。

その年は空しく暮れたが、翌年の大正五年八月、下部温泉から相当に入つた山中に、ついにそれらしい一枚岩でフタをした洞窟を発見した。しかし、それを掘りおこす道具がないので、ひとまず道具を取りに帰り、八月二十八日に再出発した。だが、それきり末吉郎は家に帰らないのである。

その理由は現在も不明である。誰か、下部温泉附近の地理にくわしい人がいたら、今年の夏あたり、宝探しに行つてみませんか。健康な運動をかねて、一億円の夢を見ることができるとですぞ。

消えた金庫

伏見、鳥羽の戦いに敗れた徳川幕府は、大勢すでに非なるをさとつて、江戸城明け渡し交渉を山岡鉄舟が西郷隆盛とした物語はあまりにも有名だが、官軍が江戸城を接収してみると、おどろいたことに、城中には一文の金もなかつたのである。金庫という金庫が空っぽになつていた。いかに衰亡の一途を辿つていた幕府であつて、更に軍費のために使い果したとはいへ、金庫がこれほど空っぽになつているのは不思議だと思つた。

そう思うのが当然で、遠謀深慮にと

む幕府老中筆頭小栗上野介がいち早く幕府の保有金を江戸城内から運び出し、秘密の場所に埋藏したのだ——との噂さがひろまつたのは、明治もだいぶたつてからのことであつた。

その秘密の埋藏場所はどこであらうか、ということとは、当時すでに世間の話題となつておつた。

江戸城内の秘密の地下壕に埋めたとか、徳川家ゆかりの地日光の山中にかくしたとか、いやあれば船一杯に積んで、江戸湾内に沈めたとか、諸説ふんぶんの臆測が行われた。

また、それらの臆測を裏付けるかのやうに、埋藏金をめぐる幾多の怪文書や古記録があらわれたものだ。

こう言えば、読者の中には、幾度か新聞記事になつた。小栗上野介の孫と稱する河原秀守（六九）のことを思い出す人もあらう。

同家に傳わる小栗家の秘文によると

万延元年日米通商條約締結のために新
見豊後守と共に遣米使節として渡米し
た勘定奉行の小栗上野介は、文久二年
に帰国すると共に、通商による金の海
外流出を迎え、且つはすでに崩潰のき
ざしの見えていた徳川幕府の將來に備
えて、江戸城内の蓄積してあつた大判
小判をふくむ金塊をはじめ幾多の宝を
を隠匿しておこうと、決心した。

そこで二万貫に上る金塊のほか刀劍
甲冑などの宝物五千点、それに小栗自
身の財産五十万両を幕府の御用船濱決
丸、一葵丸など五十六隻に積みこみ、
品川を山帆して富士川の河口に回送、
ここから晝間は岩かげなどにかくれて
人目を避け、夜陰に乗じて川をさかの
ぼつて鰍沢にいたり、此処から陸路一
里増穂村の春米まで運んだ。

そして、この地に大々的な埋藏工事
を行つたのであるが、將來この秘密が
しれて禍をまき起すことを恐れ、上野

介は旗本七十二名
をふくむ大工石工
など千四百七十二
名に毒酒を盛つて
殺してしまつたと
いう。

ところで、孫の
秀守氏は、五十才
までは遺言によつ
て、すべてを秘密
にしておいたが、
昭和九年三月から
ひそかに、埋藏金
発掘の作業を開始
した。

そして十年間に二百五十五尺の地下
まで掘下げたが、目時の埋藏金は出て
來なかつた。

だが、地下三十尺ほど掘つた時、お
びただしい人骨があらわれたので、作
業に従事した人達を毒殺したという記



録を裏付けしていると、一層信じるに
いたつた。

秀守さんはそうした工事のために財
産をつかいはたし、更に戦後の經濟混
乱のために資金を得る道もないままに
作業を中止していたが、昨年の春頃に
なつて、出資する人が現われたので、

再び作業を開始したもようであるが、

はたして、金塊二万貫、時価にして五百億円にのぼる財宝が果して廣大な地下倉庫から現れるか、どうか？

ところで、例の怪文書一つを発見した群馬縣勢多郡島村の落合乙次郎（六四）さんは、小栗上野介が人夫数十人を動員して、樽詰めにした金を江戸城からはこび出し、赤城山中の何処かに埋めていると信じこみ、

『人が何といおうと、埋藏金の在りかは此処だ』と主張して、コッコツと掘り続けている。

勿論、十数年にわたる努力が未だにむくいられないので、資産はことごとく使い果し、まるで仙人のような生活を送っているとのことだ。

これで見ても『濡れ手で粟』式な金もうけなんてないものらしい。

だが、これからでもおそくない。一苦勞したいお方はハセサンジで下さ

源義経が埋めた金塊

昭和二年から四五年にかけて、源義経が埋めた金塊の隠し場所を書いた圖面が、轉々と賣られているということを知ったことがある。

勿論、私はその隠し場所を知るはずもないが、このような噂が拡がるに至ったことをお話ししようと思う。

平家を滅ぼして天下の將軍職におさまり返った源頼朝は、もちまへの嫉妬心から源家再興の功勞者である弟義経をにくみ、義経は追手の目をかすめて北陸道に潜行、安宅関の劇的シーンな

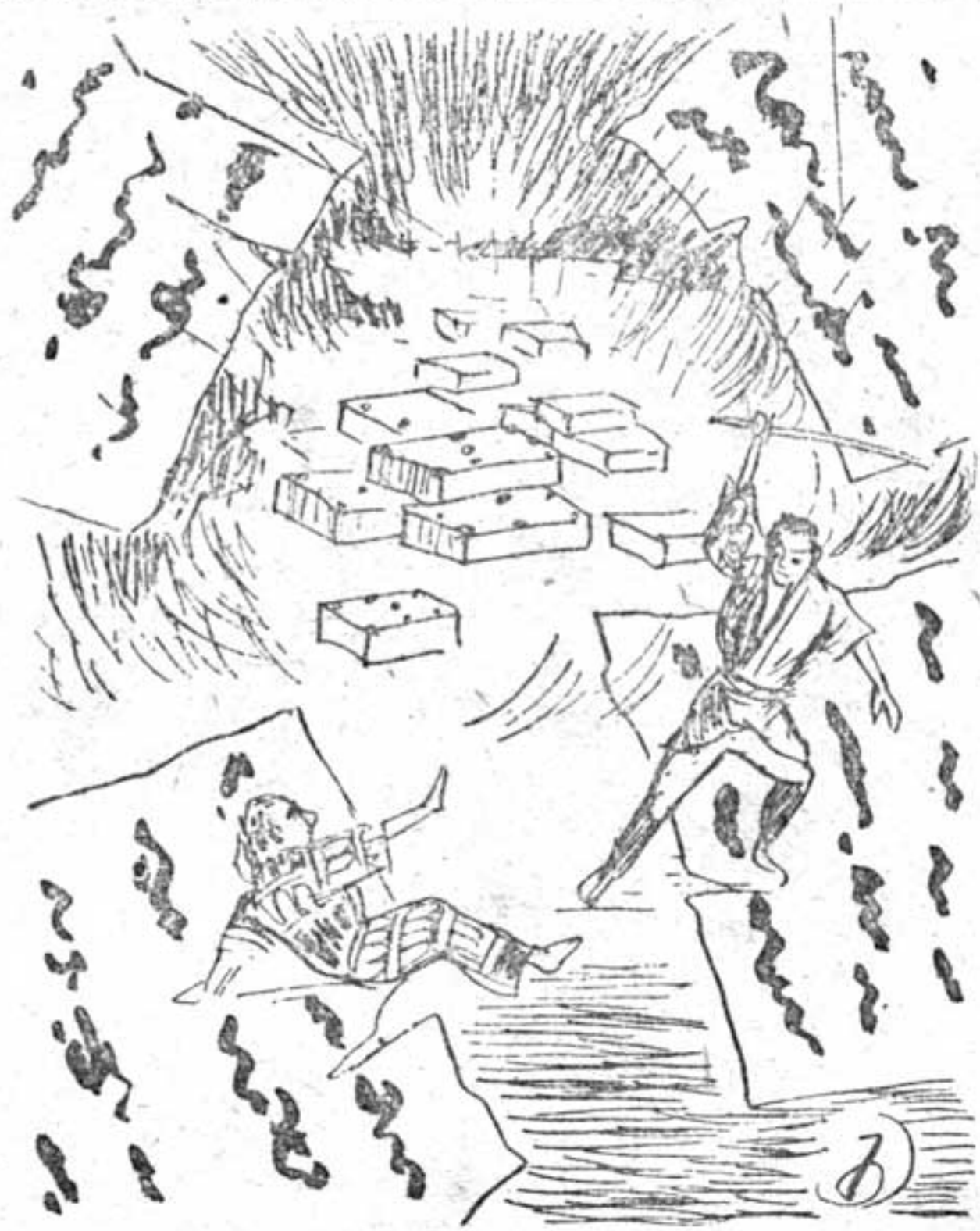
どを演じてやつとのことで奥羽の雄、藏原秀衡のもとに身をよせた。

藤原家は北上川の砂金に恵まれて豊かな財力によつて覇を奥羽にとなえており、頼朝にとつては目の上のコブ的存在であつたが、秀衡と義経は源家旗上げの当時から肝膽相照した仲であつただけに、さすがの頼朝も手の下しようがなかつた。

だが、秀衡が病死して次男の泰衡が藤原家をつぐにいたつて、文治五年四月三十日、突如、衣川の館に義経を攻め、その首を鎌倉に送つて頼朝のご氣嫌をとり結んだ。

これが正史に残された義経の末路であるが、実際には、本ものの義経は死ぬ前に、秀衡の遺言に従い、腹心の部下と共に莫大な財宝をかかえて北海道に渡つたというのである。

そして、現在の、札幌郊外から石狩平野を従貫して、狩勝峠のふもと近く



に至る私鉄の沿線に、島松という一駅がある。この駅から数里の山中に俗に『熊の沢』とよばれる沢がある。この付近に義経が藤原家から持つて来た黄金を埋めたという傳説が残されている。もつとも、黄金は、義経その人が埋めたのではなく、彼の家来三好道成以下

と遺言し、埋藏地点を示した絵圖面を四ツに裂き、一枚ずつを四人の子供にあたえた。

ところが、この四人の子供たちが成長した時、埋藏金をめぐつてはげしい鬭争をするようになった。兄弟は二組に分れ、財宝を独占しようと血みどろ

四人が埋め、三好となつて戦つた。だけが埋藏金を守るために、付近のアイヌ部落に住みつき、後に酋長の娘を妻として四人の子供を得た。

そのうち、四人ともこの世を去つたが、その後幾代か傳統的な争いが続けられるままに打すぎるうち、二枚の絵圖面は行方知れずとなり、他部落に持ち出された二枚だけが、その酋長の手許に保存されていた。

そして三好道成はこの世を去るに望んで、近く義経様が旗上げされる折には、四人が集つて、この地圖を差し上げるのだ

そしてこの義経の埋藏金の話は、ただアイヌ人の古老の間に傳説として語り伝えられていただけだったのであるところが、明治二十年頃になつて、殺人犯高瀬元太郎という日本人が、このアイヌ部落に逃げこみ、妻のアイヌ女から、義経の金塊を埋めた場所を書いた秘圖を酋長が持つていけると聞いたことから、悪心をおこし、酋長を殺してその絵圖をうばい取つて逃げた。

この絵圖面がまた他人にうばい取られながら、轉々しているうち、鉾山ブローカー松本某の手に入つた。彼はかねてから義経の埋藏金の傳説

謎の歌と黄金の関人

を聞いていたので、三年間、熱心に埋藏地点といわれる『能の沢』附近を探したが、断念して、昭和二年に五百円で絵圖面を賣り渡したのである。

これが單なる傳説でなければ、今もなお数千万円の黄金が地下に埋もれてゐるはずなのだ。

金色サン然たる元祿時代の小判二十四枚に一分銀六十四枚、時価にしてざつと六十万円がとこ現われた。

この話が、世の『キン』妄者どもをさわがせている時、京都の西本願寺に一通の手紙がまいこんで來た。

『向う五十年間の宗費五十億円を奉納したいから、黄金配分委員を派遣されたい』

とあるので、西本願寺では面喰つてしまつた。

手紙の主は、大分縣津久見市の無職宇都宮清藏(当時八三)で、彼はこの他に、縣と市に一億ずつ、草刈三家に三千万円、警察に一千万円とそれぞれ贈呈目録を送つたというから、大した心臓である。

これはすべて予定通りに眞野長者の黄金のツボを掘り当てた場合の献金だというから、まづたく夢のような話である。

ところで、眞野長者の黄金のツボといふのは、今を去る千四百年前、欽明天皇の御代に眞野長者が、大分縣臼杵市あたりに埋めたという時価五百億円と想像される品物なのである。

どうして眞野長者がそんなツボを持つていたかという、彼は貧しい炭焼男であつた時分に、大分縣大野郡新田村大字玉田の近くにある金亀ヶ淵からわき出る黄金(砂金のことであらう)を発見したためであつた。

日本でも折紙つきの摩崖石佛の一つである臼杵市深田石佛、その一隅にあつたという満月寺は、いづれも信仰深い眞野長者がつくらせたもので、現在国宝になつてゐる日吉塔は、満月寺の遺跡ではないかと見られている。

なお眞野長者の子孫は草刈姓を名乗り、八十代目と稱する子孫が現に臼杵市に三家残つてゐる。

さて、眞野長者は、莫大な黄金と、

津市といへば昔は藤堂三十五万石の居城のあつたところ、したがつて、同市寺町の寒照院には藤堂家の墓がある。その墓地移轉のために、一昨年の八月下旬、藤堂家の当主高弘氏が五代目高敏公の墓を掘りおこしたところ、

その頃黄金と同じように貴重だつた朱をツボに入れて地下に埋め、その場所を暗示して、

『朝日さす夕日輝くこのもと』

の謎の文句を残しておいた。

この謎をといて秘宝を掘り出そうと

の努力は古くから続けられ、徳川末期にも『朝日さす夕日輝くこのもと』の『このもと』は大野郡三重町近郊にある『このもと山』だというので、土地の豪農が大がかりに掘つたことがあるが、これは無駄だつた。

明治十年ごろ、臼杵市の某易者が、眞野長者ゆかりの炭焼ガマ附近を掘つたところ布目瓦と朱ツボ数個が出て来たという。

さて、最近になつて、話題をまいた宇都宮清藏は、今から六十五、六年前十八才の頃から、国宝日吉塔内に穴のあるのを発見し、何気なく石ころを轉がしこんだところ、奥知れぬ穴の底に

ころがつた後にチャリン、チャリンという澄んだ金属音を返して来た。

そこで清藏は、

長者の埋めた黄金のかくし場所『このもと』とは、日吉塔に間違いないと確信をいだくようになり、家業の椎茸栽培にはげんで資金をつくり、戦前から塔の敷地を買取るほどの熱心さだつた。

ところで面白いことは、長者の秘宝を狙う者は必ず長者の霊のたたりをうけるという傳説があるので、女房は三日とはいかず、今までに三十六七人も逃げられたという、珍らしい記録保

持者である。

悲願六十年の執念をかけた清藏の願

いがかうかどうか。

本願寺あたりでも、ハラハラしてい

ることだろう。

×

×

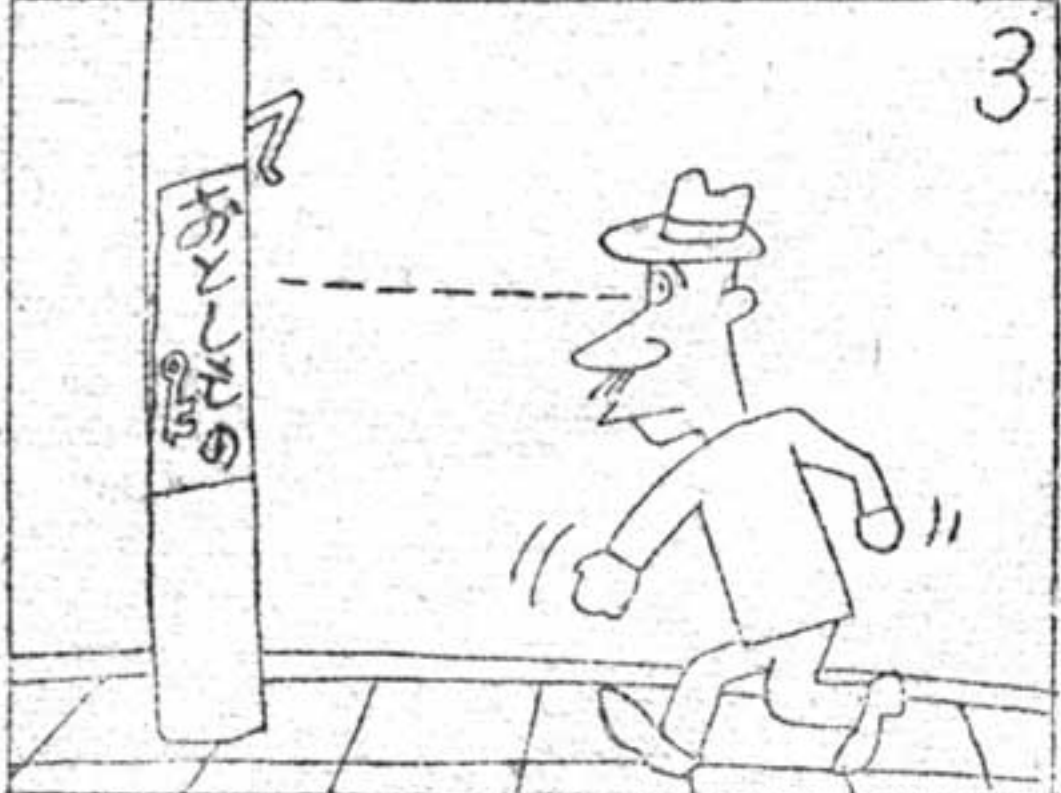
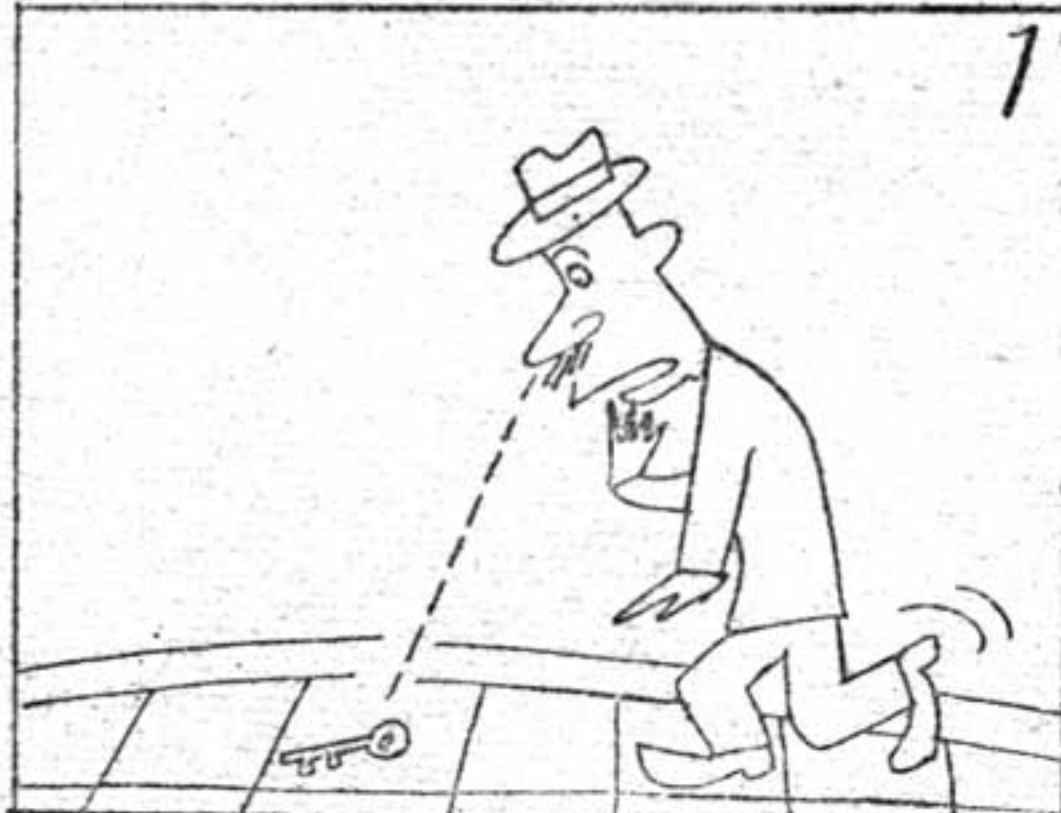
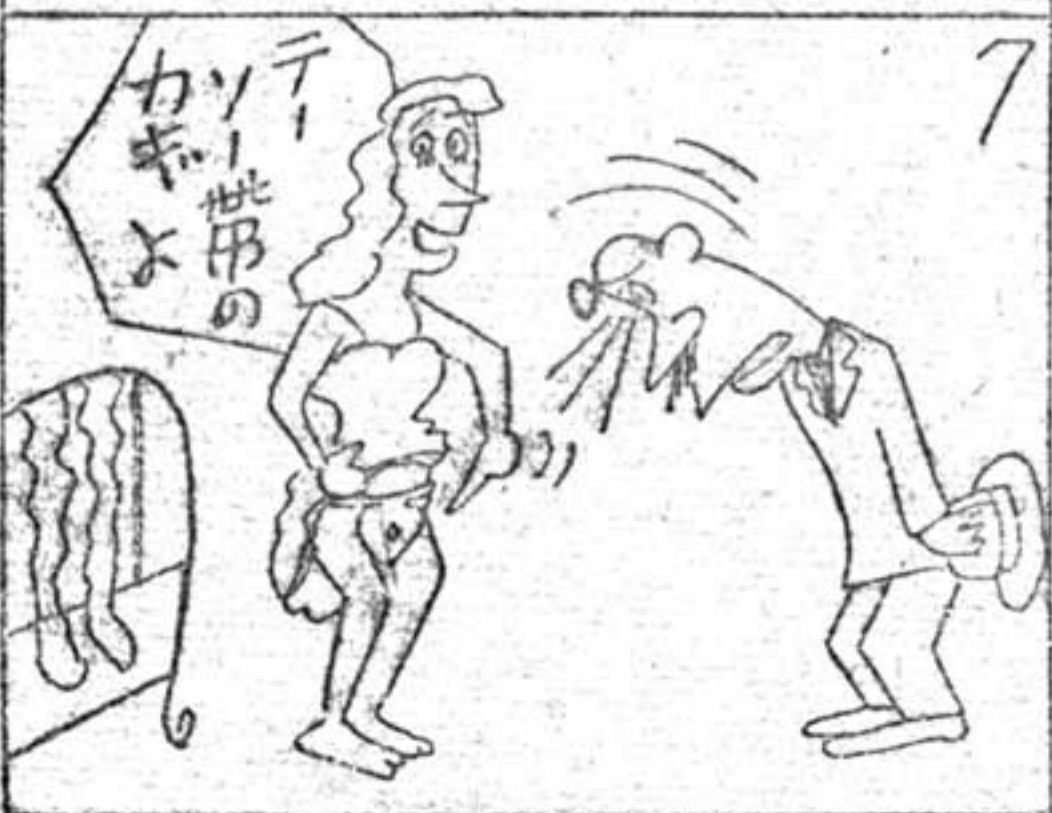
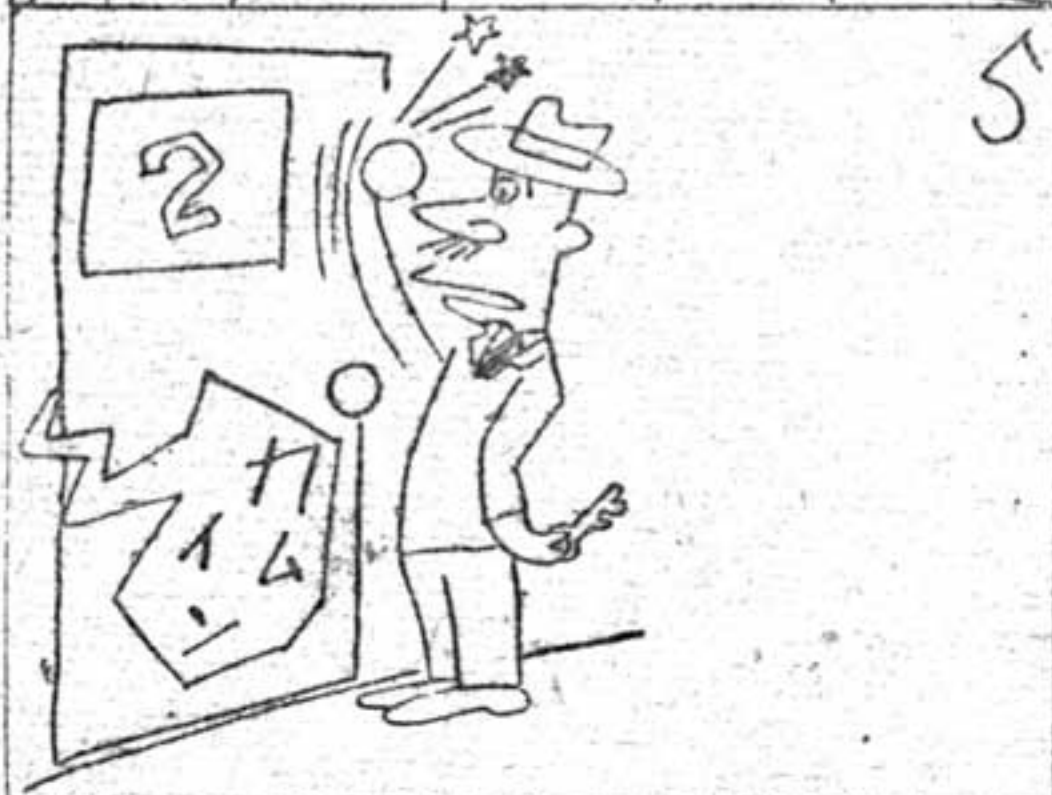
×



向ふ50年間の宗費
五拾億圓を奉納したい
から黄金分配委員
を派遣されたい
京都西本願寺 牧

ナ落し
も

しのぎきん



映画人のこんなものすごい精力絶倫譚を読んであなたは負けていられますか？



スターの精力

「駅馬車」 「黄色いリボン」 「荒野の決闘」 「リオグランデの砦」等の、西部大活劇で、吾が国ファンにその名を知られている。ジョン・フォード監督の「静かなる男」という、最近の写真を見た、吾が国のカッドウヤ連が、タハツとなつてしまった。

と云うのが、なにしろ、この「静かなる男」のラスト・シーン、十二分十八秒という、巻数にして一卷一寸。呔数にして、千八百二十六呔位の長尺のフィルムが。

フォード一家のスター、ジョン・ウエンと、ヴィクター・マクラグレンの、肉弾相うつ決闘場面、西部劇では、たびく胸のすくような大格闘を見ている。カッドウヤが、今回の十数分のたつた二人の大格闘には、流石に、唸らされてしまった。

丘から野原へ、そして村から町へ、砂ほこりの中で演じられる、この大格闘、珍と云つてはなんだけれども。とつても日本映画ではお目にかかれない。いやいや、大変な大精力で

『十分間といえ、それ程吃驚する長さじゃないかも知れませんよ、而しネ、撮影中のテストと、(NG)失敗とか



色々な條件じょうけんを付け加えると、十分間の写真を撮るには、少くとも一週間から十日はかかるネー』
谷口千吉監督が云っているのだから、まさか間違いはあるまい。

すると、ジョン・ウエンと、ヴィクター・マクラグレン

の両スターは、延々、十日間というもの、殴り合なぐりいを演じた訳、ナンジョーもつて、凡人の精力の及ぶところではない。

『角力の本場所じゃないけどさ、女人禁制じんせい、注射ちゅうしやにホルモン料理、なんて調子で続けたんじゃないのかい』
なんて、心配している連中はいるけれども。

女人禁制を慌てて始めてみたところで、こんな体力は、とつても吾が国のカッドウヤ、なかでも、スター連中には居るものではない。ジョン・ウエインより、十才も齡下で青年の血氣に溢れている、鶴田浩二にしてからが、『闘魂』と云う、柔道映画では、撮影の後で心臓肥大症になつて、ムクンでいる。

『荒れのアトはアレの病いさ』

なんて、云われるに於てオヤである。小天狗シリーズで当てた、菅原謙二が、柔道モノ専門で、もつぱら、やつてゐるが、格闘のシーンが終ると、『二、三日は身体の節々が痛くて駄目だよ』と、云っている。

『日本映画じゃあ、せいぜい長くつて、三十秒から四十五秒でしよ』

と、粘り強いので有名な黒沢明監督が、仰言るに至つては、精力の方は、大した事はないと云う事になる。

『昔のチャンバラ映画は、面白かつたネー近頃のチャンバ

「映画はコクがないよ」

と、オールド・ファンは嘆くのである。と云うのが、往年の阪妻、千恵藏、右太衛門、嵐寛寿郎、長谷川一夫、なんていつた所は、みんな若かつたし、云うなれば、タフ・ガイ（精力無敵）つまり、シヤカモコのシヤカリキな連中が揃っていた。

阪妻などは、近頃では、高血圧に悩まされて、ジーツと

立つてると気分が悪くなるという仕

末、かつては、撮影が終ると、一族郎

党を引具して、京は、鴨川の畔、ポ

ント町なぞへ、シケ込んで、綺麗ど

ころを総揚げして、呑んで騒いで、

明くる朝、仕事に出掛ける前に、一

丁！ 軽くタレ飛ばして、

『さつぱりしたア……』てな事を仰

言つて、二、三十人忽ち、ブツタ切

るという、離れ技を演じたモノであ

る。

一週間位いの徹夜は平氣だつた

と、その当時のカッドウヤはみん

な自慢する、その上、女人禁制、

コントロール、なんて、老いらく

の恋じみた、塩タレた事を云う奴は一人もいなかったと云うに至つては、

『どうも、近頃は、スターもそうだけど、カッドウヤ全体がクタビレてやがる』

と、慨嘆する人物も出てくるのである。

『大体、智慧なんざあ、どうだつてよかつたんですよ、睡眠不足と過勞に持ちこたえる奴が、スターだつたんだから』

近頃は駄目になつたと、誰れでもいう。

成程、ジョン・ウエンを眺めて、

タハツとなつてゐるようでは、お寒い

話かも知れない。

『男の方は駄目でも、女優さんは、変

らんでしよう、シヤカリキ振りが』

なんて、質問する人もいるけれど

失張り女優さんの方も、ガタ落ちで

『今の女優さんは、医者と撮影所と

往復しているようなものさ』

と、云う訳。

それにしても、三国連太郎が「恋

愛無頼」で、池部良が「助平良」で

鶴田浩二が「スキだスキだ」なんて

云われ、相当派手に騒がれているの



に、『静かなる男』で、内心、静かならざるスターになつてしまつたのは、果して、何如相成つた現象であらう。

物好きな、監督先生が『ヨツシ

ヤアン、この、グリーンシーン（戯ぐりのグリである）なあ、あれで行こうや、アレ、静かなる男々で、どうや……』

なんて云い出したら、三船敏郎であらうと藤田進であらうと、一寸、時間の都合がつきませんから、又、この次出して頂きます、てな事になり兼ねないのである。

ホルモン今昔譚

松竹大船が、まだ蒲田映画（活動写真）と云われ、トキーが、今のテレビ以上にめずらしがられた、日本御氣嫌なりし頃。武田春郎という、濫い老け役が居ました。

この人物、カッドウヤは、常に、仕事の方も、アチラの方も、（ドチラですかなあ）シャカモコのシャカリキでなければ、男と生れた甲斐がない、人生の愉しさがないと云うので。色々、研究の結果、御飯を食べるのを辞めてしま



つた。米粒はオールいかと云うのである、その揚句、カナリヤの餌みたいな餌を、ペチャペチャと甜めながら、大いにシャカモコぶりを糺と繰り開け。

『一つ、手前共にも秘決を』なんて連中が、シャカリキのカナリヤや療法でんじゆの傳授を伺いに來たというのである。

まづたく、アナタ本当に凄いいワネである。当時は、ホルモンなんて、言葉は、男も女もメツタに口に出るものではない、近頃でこそ、十九や廿のお嬢さんが、『ホルモンにいいんですつて』なんて、白晝仰言つても、助平な娘だ、なんて、感じる奴はいなかつたが、この、カナリヤの餌時代は、事ホルモンなんて云う事は、相当のアバズレでなければ、口に出るなかつたのでアール。

されば、この時代の、ホルモン研究スターというものは大変な先駆者せんくしやに他ならない。

先駆者といえは、今までも、事、シャカリキ話になると出てくるのが、珍優ちんゆう（たしかにチンでやんす）高勢実乗たかせみのりでアノネーおつさんといえは、当時、アジアツーパーターの伴淳三郎よりも、ギョツの突破よりも、一世を風靡ふうびしたも

のである。

この、おつさん、えらいホルモンに凝つてしまつて、もつぱら長虫を好んで食した。

それも、うなぎやどじょうの類ではなく、錦蛇とくるの



だなら、雄大である。その上、錦蛇の腹の中に湧いた、十二指腸虫が一番たというので。

日本中のサーカスや、動物園、他は、外国にまで注文して、錦蛇の逝去するのを首を長くして、待つていたのである。

そのお蔭かどうかは知らないが、何にしろポツクリ逝く前日まで、自分の娘みたいな若い女性を抱えて、孤軍奮

闘していた姿は、語り草である。

なにしろ、五十の坂を越したオツサンが、練達の程は左もあろうが、二十四五の盛んなタレ（女性）を配して、床の所作の猛烈なる事、タレの喜悦は云うもがな、やりくりさんだんのモノローグは、若い者同志なんざあ、問題にならなかつたと云う。

抹香くさい筈の彼が、斯様に、シヤカリキであつたのは錦蛇のホルモン精神の賜である、語り伝えられてはいるけれど、いつかな、お先きツ走り、流行病のカッドウヤも流石に、十二指腸虫までは、食べる氣にならなかつたらしい。

人生五十年と云うけれども、人間は、百才まで、上手に使うと使えるものだという。

スターなぞに云わせると、『人氣のあるうち位いは、シヤカモコのシヤカリキと行きたい』と、無慾みたいな事を云う。なにしろ、スターというものは、男女の性別なく、大いにモテるのが、若いうちだから、モテてるうちに、モテさせてやりたいと云うワケ、何物かを、人氣多忙で、クタクタになり、正氣づいた時には、人氣は凋落して、片足は棺桶に入いつていたと云うのでは、なんの爲に人生を送つたのか解らない。

人氣を長持させる事は、とりもなおさず、スター自身の

体力にかかつている。常にシヤカリキになつてれば、年もとるまい、長谷川一夫の人気を見てもよく解る。

そこえゆくと、女優さんの方は、どうしても、どんなに上手立廻つてみても、すぐ老けてしまう。

その癖、平均年齢は女性の方が長持ちするのだから、皮肉な話である。

ラジオドクターの石垣博士が、或る日撮影所にやつて来て、

女 粘膜的——原始的——本能的——無意識的。

男 皮膚的——進化的——精神的——意識的。
である。

同じ、スターという職業についてもこれだけ違ふとすれば、若さを失はない得点は男にあつても、どうしても早く死んでしまうような条件が揃つていゝというもの。

ホルモン学が発達する訳である。

スターは多少のサディズム（攻撃性、積極性、征服慾、闘争慾）があつた方がいいともいわれている。

日守新一やアチヤコ、大泉滂が無氣力な性格で賣り出したかといつて、本心まで無氣力な訳ではない。

結構、シヤカリキになる時はなるもので、三船敏郎みたいに、全身火の玉みたいな、熱演スターより、ポーツとした役柄のスターの方が、女性関係は中中派手であると昔か

ら相場がきまつてゐる。

斯道の雄とされている、山村聰は、スクリーンの上ではあんまり飛んだり跳ねたりはしない。だからかどうかは解らないが、高峰秀子の一件で有名になつたが、それ以前からこの道では誰一人知らない者はいないのである。

現在、

立つて

も大

かれ様

來た。

も知れ

撮影所

ン流行

一般世

じ事だ

同じ、

るにし

ホルモンのあるモノを、なんて事になつて來た。なんでも潰して喰べる、フェザー食事法、昔のカナリヤ式捕餌オシパレード時代である。

注射、腦下垂体と随分一時は風靡したが、大した事はなかつたとなると、もつぱら、スター連、フェザー食事法に



第一線に

いるスタ

分、おつ

になつて

その爲か

ないが、

はホルモ

である。

間様も同

が。

物を喰べ

ても、ホ

飛び付いたが、なにしろ、年がら年中、家に居ない商賣だからといつて、花形スターがフライパンやナベを腰にブラ下げて仕事が出来たものではない。

そこで登場してきたのが、ニンニクである。あの臭味は一寸、強烈無比なるものがあるが、ホルモンには変えられない。能書も云っている場合ではないという訳で、

『第一、何を喰べようと、スクーリンに臭いが出る訳じゃないし、平氣よ』

なんて、ニユーフェイス

嬢が仰言るに至つては、今や

ニンニク流行時代である。

山口淑子が、このニンの字の

大家で、臭氣止めに年がら年中、

ガムを噛んでいる。GIかぶれじゃあ

ないのである。

「抱擁」で、三日間、彼女とキッスばかり

りさせられた、三船敏郎も、さぞやクセイだろうと思つて

たが、『敏ちゃんの方がクサイワ』なんて彼女に云われて

いた。

焼いてカプセルに入れて呑んでる彼女と、ボリボリ生の

ママかじっている、三船敏郎とでは山口淑子が悲鳴を掲げるのも無理はない。



正に、ニンニクの「抱擁」である。

こんな壯絶な氣持で、ホルモン探究にならなかつた、昔は、カッドウヤはロケに出発前夜。何十人かのスタッフル部が、ボリボリと無理矢理にニンニクを喰べたものであると、云うのが、ロケでシヤカリキになる爲ではなく、その臭氣で汽車の座席を独専しようという、極く無邪氣な動機からなのである。

舞子の帯は

鬼門である

粘り強い事では、カッドウヤの中で監督の右に出るモノは居ない。監督とは徹夜対抗人類の別名じゃあないかと思うような事がよくある。

又、粘り氣のない監督には碌な作品が出来ないようになつている。では、

粘る監督は、ホルモンが旺盛かと思うと、大分違うのである。

粘りでは定評のある、衣笠貞之助が山田五十鈴とは、アソパイが悪かつたり。

溝口健二監督が、『僕は京都の舞子はんの帯や』なんて云うのである。



ペンとカメラで
決る世相雑誌!

東京生活

第二号

発売
迫る

絶讃を浴びて颯爽登場するスクープ満載号

ニュース 涙の歸還船

大邦丸事件の真相

補導少年の實態

富士山麓の女た

ちの風紀について

ハイアライに利権を賭

ける男たち

読切ロマンス増刊号

舞子はんの帯は、ダラリの帯である。ダラリは、帯以外は固まつたものである。ニンニクが繁昌するのにも無理はない。

綺麗な女優さんが、四五人で、七輪を囲こみ、ニンニクを焼いてボリボリ喰べてる所は一寸頂ける国である。

『アラッ! 変な氣を廻さないでよ、ニンニクには鉄分と葉緑素、つまりミネラルが含まれてて、美容上いいのよ、小ジワの爲に喰べてるんじゃない……いやらしいワ』

なんて仰言る。サテ、どこの小ジワが延びる事やら。

而しながら、結構なお話である。

大目方傳や宇佐美淳みたいな農学士になると、自宅栽培を始めている、今に一儲けする氣かも知れない。――

この調子で行くと、今にスターはみんな老けなくなつてしまつて、フアンに飽きられてしまふかも知れないが、そうは行かない所が又、格別である。

シヤカリキ調はカッドウヤに限らず、万人の求めるところである。ただ、一寸、カッドウヤの方が熱心だというだけの話なのである。



花電車 の 今昔 話

湯川落雁

花電車の由來

誰が云い出したのか知らないが、「花電車」とは実に氣のきいたいんご隠語である。あまり氣がきゝすぎているので、最初は何のことか、さつぱり分らなかつた。昭和初年頃、私は田舎から出て来て、東京のさる大学に通つたのだが、寄宿舎の先輩達が、しきりに花電車と云う。何にかの祭日などに綺麗に裝飾して、夜は沢山の電燈をつけて、何台となく繰り出す、あの美しい花電車にしてはニヤニヤ笑つて話すのが、どうもおかしい。

『一体、なんのことなんですか』と、先輩にお伺いを立てると、

『君はまだ知らんのか。乗るものでなく見る面白い電車だよ。電車を女として考えて見給え』

『あゝ、そうですか、あのことですか』

私は分つたつもりでいたが、或る晩銀座に行つて、先輩とおそく帰つてくると、丁度カフェーの女給さん達の引け時で、花の様に綺麗な連中が、ドヤドヤと電車に乗つて來たので、
『花電車とはうまく云つたものですね』

と、したり顔で云うと、

『なアんだ、君は、こんなものを花電車と思つていたのか』

と、先輩は大笑い。百聞は一見に如かず、翌晩私は、先輩の案内で、玉ノ井の私娼窟に行つたのだが、アノモノズバリでもつて、バナナを切つたり、卵を出して見せたり、筆でもつて字を書いて見せたり、実に恐れ入つた珍芸の御披露で、「成程これは、乗らないで見るもんだ、巧いことを言つたもんだ」と感心したわけ。

なんでも、川島という家の八重子という女だつたと記憶しているが、肌が

櫻色で、むつちりした肉体は、如何にも弾力性に富んでいる様に見えた。美人という程ではないが、愛嬌があり、肌が綺麗だつたので、仲々見ごたえがあり、確か、腕輪もはめて居れば、首飾りもつけていたと思う。いや、そればかりか、太腿にすら、宝石のリングがはめてあつた。

八万圓の乗車賃

八重ちゃん、この芸術家になつてからは、絶対に、花電車の顧客一本で飯を食つていたそうだが、それでは勿体ない、なんとか、「見るものから乗るもの」へ逆轉を願えないだろうか、念願する男が輩出したのは当然である。

無論彼女は断つたが、その中の一人だけは、抱え主の義理ある人で、どうしても断りきれず、仕方がないから、

うんと吹つかけてやれば諦めるだろうと思つて、

『五百圓出して頂きますなら……』

とやつたところが、『宜しい』と即座に承知したというから、その熱心さが分る。五百圓と言えば、今の七、八万円に当る。娼婦を、一晚八万も出して買う豪傑が今時あるだろうか？

ところが、それだけ金を出したのに結果はさっぱり駄目であつた。と言うのは期待した妙味にあづかることが出来なかつたのだ。

『馬鹿々々しい、うちの女房にもおとるんだ』

という述懐が廣まつて、それつきり「電車乗り」のお客は來なくなつて、彼女も安心して専ら芸術に精神するところが出來たと云う。然し、これは恐らく、彼女の計略だつたに相違ない。と言うのは、筆が替つたから力が入らないなんて言うわけはないから、乗客が

キタイの手であつたろうから。

ところが、この八重ちゃんの末路はどうなつたか？ 昭和七年頃兜町のさる旦那に囲われて、幸福な生活に入つたが、戦争で死んだという説もあれば満州へ渡つて、新京で相も変らず奇芸珍芸を御披露に及んだという話もあつて、義経の最後と同じで、本当のところはわからない。

『僕は見たよ。李成民という満州国の高官の家に遊びに行つた時、色の白い愛嬌のいゝ日本の女がいたが、たしかあれがそうだよ』

なんて、真しやかに云う引揚者もあるが、恐らく八重ちゃんではないだろう。

然し、ともかく、「花電車」中の電車と言われた女であるから、その位の風説の立つのは当然で、その名は、日本風流史に、永久に残るに違いない。死んでいたなら冥福を、生きていたなら、

ら、その余生安らかなれと、祈つてやまない。

雛をかえした女

八重ちゃんの話が有名になると、そこにもここにも、第二第三の花電車が次々と現れたが、芸が拙かつたり、身体がきたなかつたりして、到底彼女に比肩すべきものはなかつた様だが、私が北海道の函館で見た女は、仲々見應えがあつた。

確かケイ子という女だつたが、顔は八重ちゃんよりもずつと綺麗だつた。

「やまがら」という、港近くのカフェーにいた女給で、ソウラン節がうまく、ソウランソウランと歌いながらの奇芸は、実にさえたものであつた。

然し、観賞料はとらない。だから、余程氣が向いた時で、而も好感の持てる客でないとやつてくれない。カフェ

ーでは絶対にやらないで、自分の住んでいたアパートに帰つてやつていた。私の友人に、函館で、造船所に勤めていた技師がいた。この男の紹介で合つたのだが、私の打つたY談が氣に入られて、『では花電車を……』と云うことになつた。その時に書いて貰つた「忠君愛国」の書は、今でも記念に持つてゐる。

その時の芸に、「雛をかえし」というのがあつたが、卵をあたゝめて、雛にかえると云うので、そんな馬鹿なことがあるかと思つた。然し、實際に出来たのだから恐れ入つた。

『三週間目に來てごらんなさい。雛にかえつて出るところをお目にかけるわ』

こう云うので、私は札幌や小樽で用事をすまして、三週間目に函館に歸つて來た。そうして、友人と一緒に、夜おそく彼女のアパートを訪ねると、

『いゝところでしたわ。今お目にかけます』

と、用意をして、ソウランソウラン
と、三口ばかり歌つて、出した卵から
雛の生れるのを見せられたのには驚い
た。

『ホホウ、じゃア、三週間もずつと？』
『そうよ、だから雛になつたんじやな
いの』

『ふうん』

私はうなつた。ケイ子というのは「
雞子」の意味だということがこの時初
めて分つたのだが、然し、今から考え
て見ると、どうも怪しい。如何になん
でも、三週間も抱きつ放しとは、ちつ
と辛棒がよすぎる。恐らくかえる前の
卵で、インチキしたであろう。然
し、これは私の想像で、或は本当に辛
棒強く「抱いて」いたのかも知れない。

剣を呑み込む女

以上は戦前の話だが、戦後はどうも
芸をやる女の品も落ちれば、芸そのも
のの品も落ちた様だ。世相の反映であ
る。

私の見たのは、浅草であるが、浅草
のどの辺であるかは差ひかえて置く。

二十五年の夏の話だから、今もやつて
いるかどうか分らない。やることは戦
前と同じであるが、その後で、本当
の口でバナナを食べて見たり、卵をチ
ュツと飲んで見せたり、えげつなさで
客を釣ろうとする魂膽が見えて、どう
も我々の様な戦前派に、不愉快であつ
た。

おまけに料金が高く、三十分一人千
円で、而も前金である。サービスのつ
もりかも知れないが、女は一糸まとわ
ぬストリップである。綺麗な着物から
身体的一部分を出して演ずるところに
本当のエロチシズムの美しさがあるの
に、今の女達は、そんなことにはお構

いなく、なんでも裸になつて見せたら
よいと思つてゐるらしい。然し、それ
がアプレの客には喜ばれるのかも知れ
ない。

人の語によると、占領軍の兵隊に、
この電車が所持して、中には奇をてら
つて、ナイフの様な危険物を呑み込む
ものもあると云うが、こうなるともう「
花電車」などという粹名をつける価値
がない。

然し、ナイフを呑む芸当などは、誰
にも出来るものではあるまい。

『そんな馬鹿なことがあるか』
と、調べて見たが、本当にさわれば
切れるナイフだつたそうで、一体どう
いうわけで怪我をしないのか、不思議
でならないと、見た人は首を傾げるそ
うである。

残念ながら、私はお目にかゝつてい
ないので、軽々と批評は出来ないが、
顔が緊張して、ニコリともせず、目を

ギラギラさせて、冬でも汗をかくと云うから、所謂奇術のたぐいではあるまいかと、私は思う。

奇術の中には、手品の様に、種や仕掛のあるものもあるが、精神統一から生れる不思議な精神力によるものもある。たとえば、腕に錐を突き通しても血が出ないとか、鋭い刀の刃の上を歩いて、怪我をしないとか、食指一本で、二十貫もある物体を、宙に釣上げるとか、云つたたぐいである。

これすらカラクリだと疑う人があるが、どう考えたつてカラクリの余地はない。明かに精神力のなす業である。だから私は、この女はたゞものではない、恐らく何かこの方面の修行をした女だと思つて、その点敬意を表するのだが、恐らく見ていて氣持はよくあるまい。文字通りこれは劍呑^{ケンコン}な話である。而も尙驚くべきことは、その呑み込んだナイフを、飛ばせて、一間ばかり

離れた板に、プツツとさすそうである。確かに神わざであるが、その代り、このあと十日間は休養しなければならぬ程、ぐつたり疲れるそうである。

とにかく変つているので、物好きな兵隊がワイフということにしてアメリカへ連れて行つたと云うから、今頃は大きいヤンキイ連を煙に巻いていることだろう。オリンピックに若し出演がゆるされたら、水泳よりも何よりも、はるかに国威？を高揚したことであろう。

大膽とオナラの藝

それから女相撲にも、変つた曲芸を演ずるものがあると云う。綱の一方を自分で食わえて、他の端を客に持たせて、引つ張りつこをするんだそうだが黒人の兵隊でも、彼女の尻を、五寸でも動かし得たものはないと云う。

身長は五尺七寸位だが、体重は二十八貫もある男まさりの怪力だそうだから、力のあるのは当り前だが、何しろ手を使わない綱引きだから、その「把握力」の強大なものには感歎^{かんたん}せざるを得ない。或はこれも精神力のなす業かも知れない。

それからもう一つは、横浜の本牧^{ほんもく}の茶ブ屋に居る女、これも人から聞いた話であるが、一人は日本人、もう一人は米兵から聞いたのだから、嘘^{うそ}でないことは確かだ。

この女は、妙な奴で、大きな深いおへそを持つて居り、その上おならなら自由自在に吹ッ放すことが出来るんだそうだ。

そのおへその大きさは、親指が入り深さは一寸以上もあつて毛がモジャモジャと生えているとか。それに大きなローソクを立て、火をつけて、その火をおならで消して見せるのが得意の芸

当である。

『そんなことが出来るもんか、肛門の向きが全然違うじゃないか』

と、私が抗議すると、

『いや、それが出来るんだから愉快なんだ。股の間に板を挟んで置いて、それに風が当たると、屈折してローソクの灯に向う仕掛けになつてゐるんだ』

と、友人は説明した。

成程と思つたが、二十貫近くもある大女だと聞いたので、そんな奴のおならなら、屈折しても、その位の威力は持つてゐるだろう。

『然し、さぞ臭いだろう』

と云うと、

『うん、そう思つて鼻をつまんだんだが「あたしのおならは、ちつとも臭くないの」と云うので、手を放して見ると、本当に臭くないんだ。どういふわけだろうなア』

と、友達に云つたが、無論私にも分

らない。しよつちゆう出すんで、臭味がないのかも知れない。それにしても、どうしてそんなに、自由自在に吹ッ飛ばすことが出来るのか、医者に伺つて見たが、矢張説明が出来なかつた。

大きなおへそに就いては、支那や印度にも、面白い話が残つてゐる。唐の時代に、今の山西省に、陳白山という男があつた。余り大きなおへそを持つていたので、人に笑われ、いや氣がさして、川に飛込んで自殺しようとしたが丁度その時易者に会つた。どうして死ぬとするのかと聞かれたので、わけを話すと、

『とんでもない、この臍は、福相を持つてゐる。今にあなたは幸福になる』と云う。そこで自殺を思い止つたが一向に幸福にもならないので、又易者のところへ行つて訴えると、
『慈々時が來た。近く皇帝が、この町に來るので、臍に菊を植えて、路傍に

寢てゐるがよい。そうすれば福がさがる』

と教えて呉れた。

翌日、教えた通りにしていると、果して皇帝が通りかけ、

『これは面白い。臍は身体の中央、中央は即ち王座である。王座に目出度き菊花が咲くとは縁喜がよい』
と、その臍男を連れ歸つて厚遇したという。

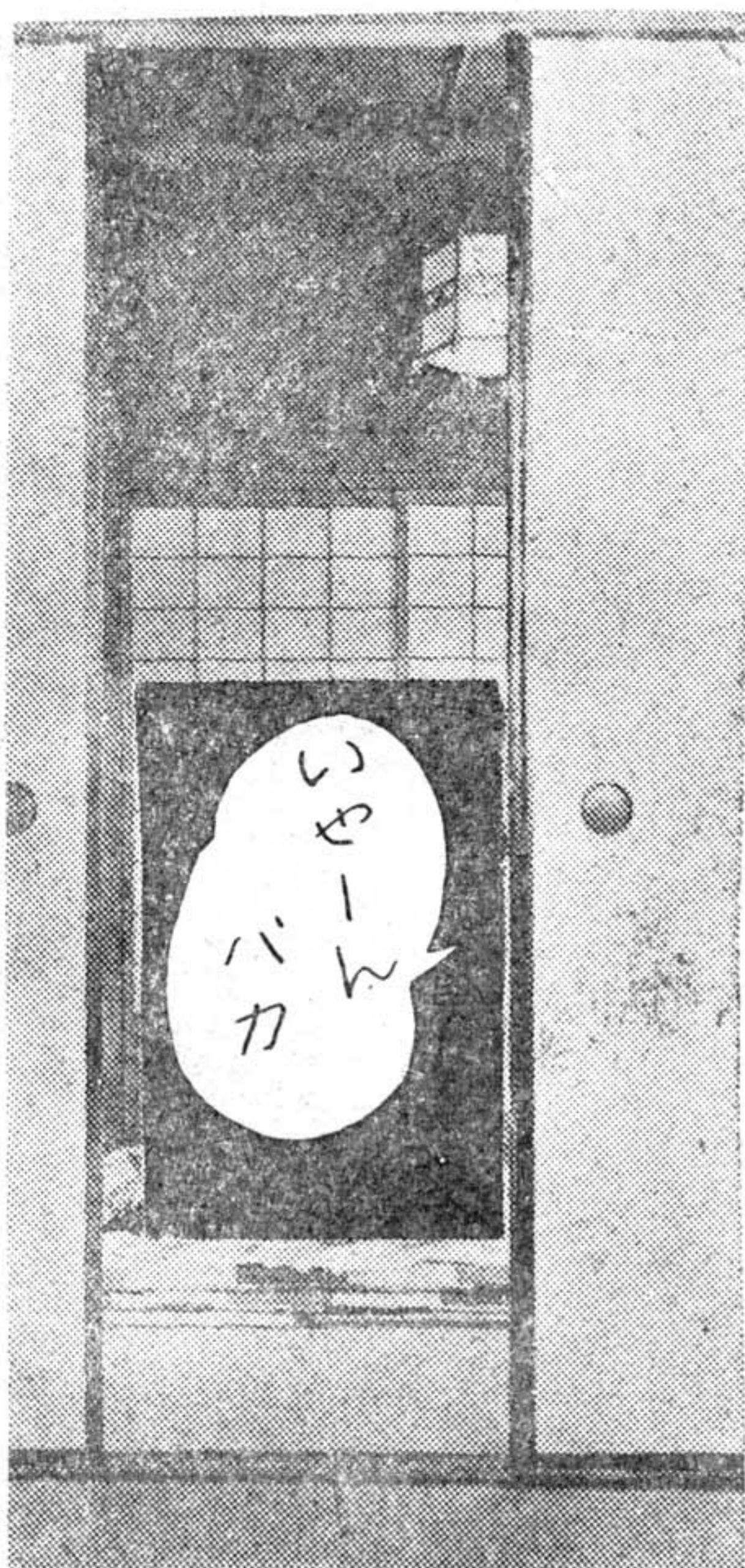
ともかく、戦後には変つた花電車が
出ることは出たが、昔の様な美しいエロチシズムを持つたものは少い。

又乗物御免を主張した八重ちゃんの「芸術家氣質」や、金をとらないで見るケイ子ちゃんの旅の無慾恬淡家ぶりなどは到底見られない。

矢張り昔はよかつたと思うのは、そろそろヤキが廻つて來た証據であらうか。

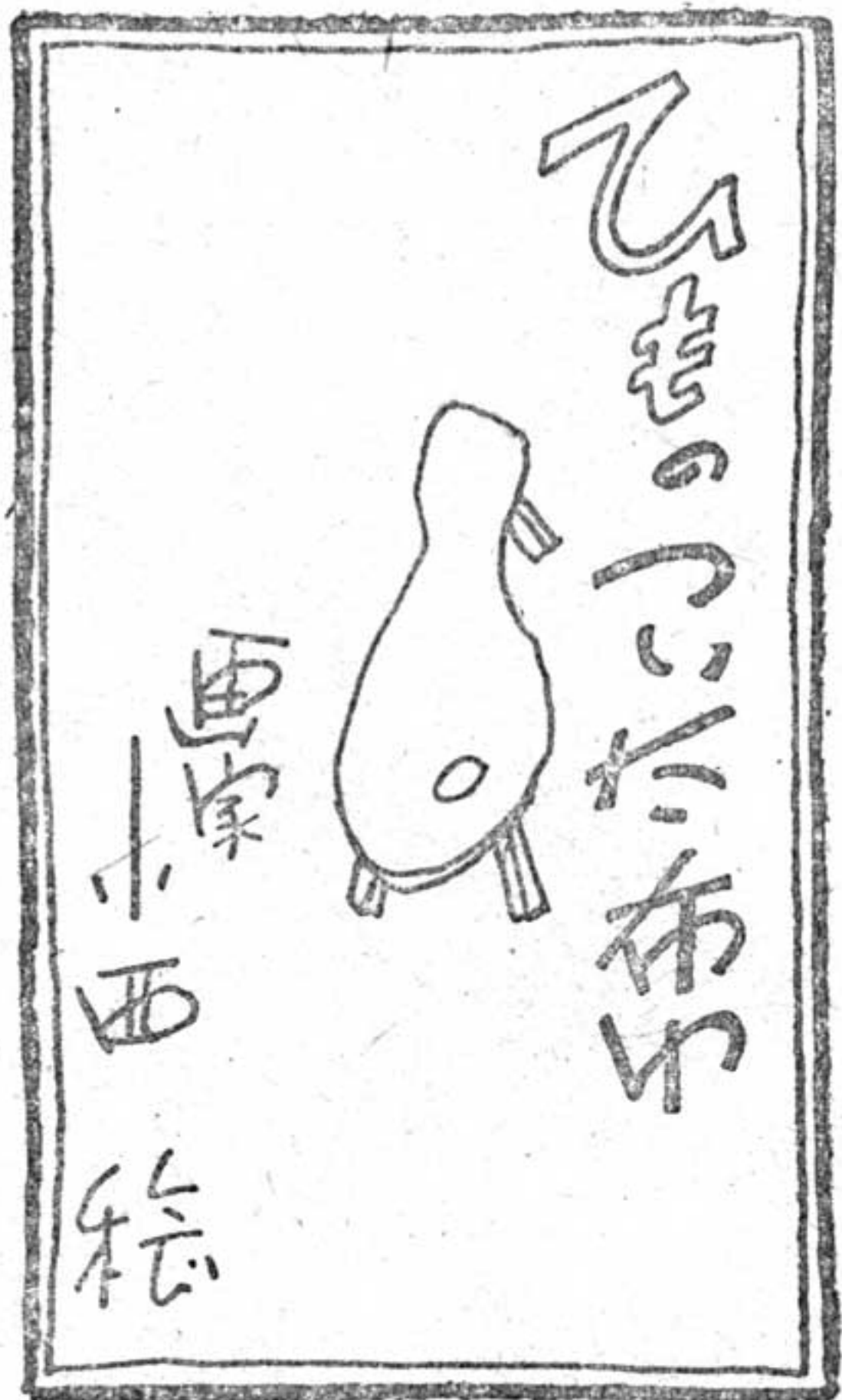
とつておまきの話 人に云えない話

こんな話は誰でも
が胸に秘めている
はずです。



これは友人のK君の経験談である。
時は昭和二十年の秋、処は満州の新
京と御承知願いたい。

その頃の新京は日本人は日本の敗戦
と同時に浸入して来た、赤軍中国軍の
暴行、略奪の前に生きた心地がなかつ
た。日本人は今迄の威勢はどこえやら
食うに食えなく着るに衣なしと云つた
昨日に変わる今日のみじめさ。將に一夜
乞食よろしくと云つたでいたらくで、



満人の侮辱の前にも頭を下げて卑屈に
生命をつないでいたのである。

やがて、秋近くなると、めぼしい家
財道具は満人や赤軍に大半略奪され、
わずか残つた衣服時計、指輪の類も二
東三文のたけの生活ですつてんて
ん。在留邦人達は申し合せた様にわず
かの資本で、露店商のようなものを市
場に出して露命をつないでいた。
その頃である。K君が大道に出てマ

ンジュウ屋を始めたのは――

K君は満鉄の社員で、独身だつた。
彼は病身であつたから軍籍には関係が
なく、異国の丘の憂き目もみずに済ん
だのは幸せだつたが、こう生活に窮し
てくると、病身が大いにたつた。苦
役して食うわけにもいかず、さりとて
乞食にもなれない。彼は在留邦人にな
らつて、大道で食いもの屋をはじめ
ことにした。

しかし、彼は料理も知らなければ又
材料もない。えいままよ、相手はどう
せ豚みたいな満人のことだ、何を作つ
たつて食うだろうと、彼はまずはき溜
に行つて石油の空カンを拾つて来て、
とに角カマドの様なものを作つた。ま
た別の罐をみがいて、鉄板を作つた。
つまり、これで日本におけるマンヂ
ウを作ろうというのである。材料は砂
のまじつた様なコウリヤンの粉、とに
角、散々苦心して、戸板の店(?)を
出したのが、新京の貧民街である。

さて、粉をこねて、それをふかす段となつた時、彼はハタと困つた。マンジュウに敷く布片がないのである。布片がないとマンヂウが崩れてペタペタくつついて始末に負えない。

いろいろ考えた末、ふと思ひ当つたのがフンドシである。別に新しい奴を持つていた訳でないから、股間に現在着用している奴にきまつている。彼はいそいそとそいつをひつぱり出した。終戦以來湯にも入らず二ヶ月近くはいた代物だから。もう埃と汗で眞黒でしつとりくさい上にカビが生えていると云う奴。

しかし、そんなことを氣にとめている余裕はない。そいつを手製の簀すの上うへに敷いて、とにも角にもマンヂウらしい形態をそなえた奴が出来上つた。その時のK君の喜びは、エヂソンが電氣を發明した時のように、またコロンブスが大陸を発見した時のように、いや

それ以上だつたかも知れない。兎もあれ、手の舞い足のふむ処を知らない有様で喜んだ。

処が、そいつを戸板の上に並べておくと、これが又非常によく賣れるのである。

満人の大人たいじんがのぞく、手まねで賣つてくれと云う。そいつがムシヤムシヤ食べながら、『非常にうまい!』と云う、又くれと云う。『いままで飲べたマンヂウのうちで一番うまいあるよ』とまた買う。

これが評判になつて、次第にこの石油カンのマンヂウ屋も繁昌はんじやうして來た。

その間、彼は夜になると例の代用布きん片せんをかかわして本來の用に足すのである。(何にしる急所を包んでおかなければ誠に心ぼそく、且つ風邪をひく恐れがあつたので)

そして、朝になると又、それでマンヂウをふかすのである。ために、フンドシの洗濯せんたくは必要なかつた。

処がある日、彼の上役の課長夫人が彼の店にやつて來てマンヂウを食つた。

そして、一口食べるや否や、『Kさん、あなたマンヂウのこしらえた方知つていますの?』ときいた。

K君は『知らない』と答えた。すると課長夫人は、かいがいしくも作り方を傳授でんじゆした。つまり、マンヂウは重曹じゆうそうやアソコが要ると云うのである。

『でも、奥さん、満人は大変うまいと喜んで食べるんですよ』

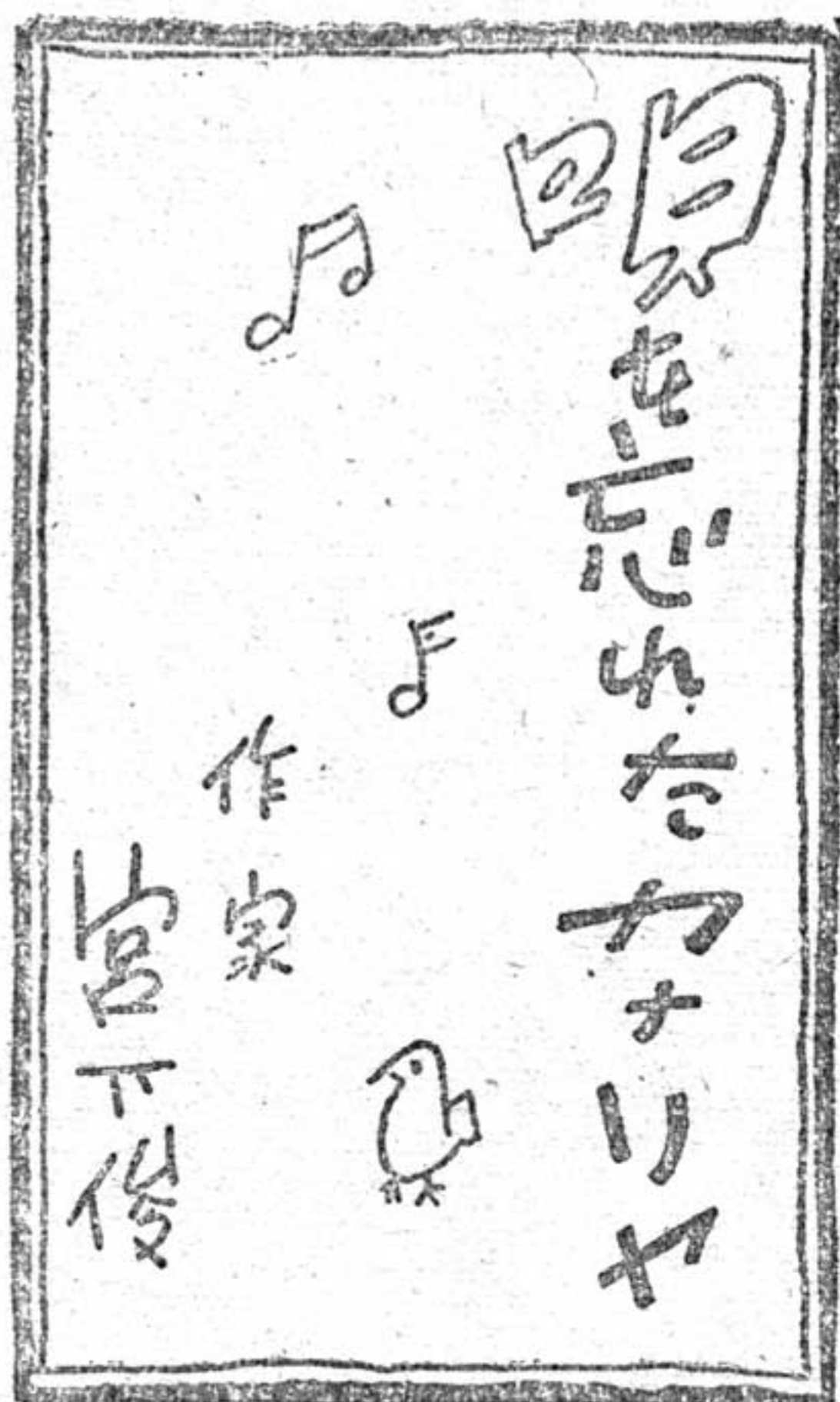
『どうして味がいいんでしょう? まるで妙な臭いがするじゃありませんか……』

首をひねつていた夫人、ふと、布片にひもがついているのに、不審がつてきいた。

『これはその……』

K君は顔を赤らめて云つた。

『あの……洗濯バサミの代用なんです』



人生に唄は必要です。
苦しい時でも、楽しい時でも、唄は
人生の伴侶であります。人生を明るく
してくれます。

特に、重労働をしている時には、楽
しい唄が必要であります。若し誰かが
美しい唄を歌ってくれたら、それは一
陣の涼風の如く、一瞬に疲れを忘れさ
せ、労働の喜びに幸福になります。

たとえば——夜の重労働を想い出し

て下さい。もし、その時、奥さんが美
しい唄を歌ってくれなかつたとしたら
これほどつまらぬ労働はありません。

天国への階段は忽ちにして地獄へのト
ンネルに化してしまいます。がつかり
です。一時に疲れが出てもう二度と重
労働はするもんかと思えます。そして
奥さんの代りにどこかで唄をきこうと
云う氣になります。

逆に、奥さんが世にも素晴らしい歌

声の歌手であつたとしたらどうでし
う。

もう夢中です。素晴らしい歌手の熱
狂的なファンになります。きつと、三
千世界の鴉を殺ろして一晩中ききほれ
ていたいと思うのでしよう。

ともあれ、奥さんの下手な唄はぬか
みそくさくなつて、とかく鼻につくも
のです。

むかし、信長、秀吉、家康と云う
そのみちの大家がある女性を中心に、
恋合戦をやりました。そして、一番最
初は彼女に美しい唄を歌わしたものが
彼女を自分の妻にしようと云う協定を
しました。

さて、信長は勇將でありましたから
われこそは一番槍と許り、ぬけがけの
功名をねらつて、彼女の許に通いまし
たが、なんとしても唄を歌おうとはし
ません。彼はカンシヤクを起して、『唄
わぬなら殺しちまい』と云つて、あき
らめてしまいました。そしてその重労働

働がすぎて、過勞のため死んでしまいました。

それをみて秀吉はチャンス到来！

とばかりに彼女の許に通いました。彼は猿智恵がありましたから、『なんとかして唄わしてみよう』と色々テクニクを研究しました。

そのために彼女は発声法を憶え、少し唄を歌いはじめました。処が余り秀吉は有頂点になつたので、もつと大きな声を出させようと、欲ばつたためにこれも過勞で亡くなつてしまいました。

それをみて、家康ニンマリ致しました。

彼の計略は『唄わぬなら唄うまでまとう』と云う氣長なもので、信長に道を開かせた後で秀吉にテクニクを教えこませ、すつかり彼女が唄うばかりになつてから、腰をあげたのであります。そして、狸親爺と云われる偉大な力で到々彼女を一人前の歌手に仕上げ

て自分のものとししました。

されば、女性の唄をきくには、忍耐が必要であります。

——さて、『唄を忘れたカナリヤ』の話でありますが、これは決して西條八十氏の唄の話ではありません。

『カナリヤ』とは鳩の町の『籠の鳥』のことです。それから『唄は唄にしてカナリヤなり』と御推察下さい。

さて、赤い灯青い灯のまたたく街に仕事の上で『唄をうたう』ことで有名なカナリヤの許にS君は長いこと通つていました。彼にはその『唄』がたまになく嬉しく、逢う人毎にわが身の幸運について吹聴しました。

ところが処此にAなる海千山千のそのみちの猛者がいました。彼は廣く諸国を廻り世間の表裏に通曉していました。

彼はS君の自慢話をきくと、『ふん』と鼻先で嗤いました。

『何にがふんだい。どこがおかしいん

だ』

S君は面白くないのでくつてかかりました。

すると、A氏はニヤニヤしながら、『ま、君はそのカナリヤに一時間でも唄をうたわしてみろ。そうしたら理由を説明してやるさ』と云いました。

S君は『ようし』とばかりいきまいて、早退お馴染みのカナリヤを訪れました。

『カナリヤ』は直ぐと『唄』をうたいはじめました。しかし、今日のS君は一つの目的をもつておりますから、ちつとやさつとの唄では帰りません。彼は感激的な、ともすれば感涙しそうなを懸命に堪えて、彼女に『唄』をうたわせつづけました。

そして、三十分ほど経ちました。するとどううでしよう、『カナリヤ』は『唄』をうたわなくなつたではありませんか。

『おや？』と思ひながら『どうして唄

わないの?』とききました。

すると『カナリヤ』は憎々しげに云いました。

『あんだ、あたしの商賣邪魔するつもり?』

S君は、A氏の嗤つた意味がやつと

判りました。『あいつの唄はテクニツクだったのか!』

だがS君には、彼女の唄はなつかしいものでした。彼は夜更けの露路を抜けながら呟きました。

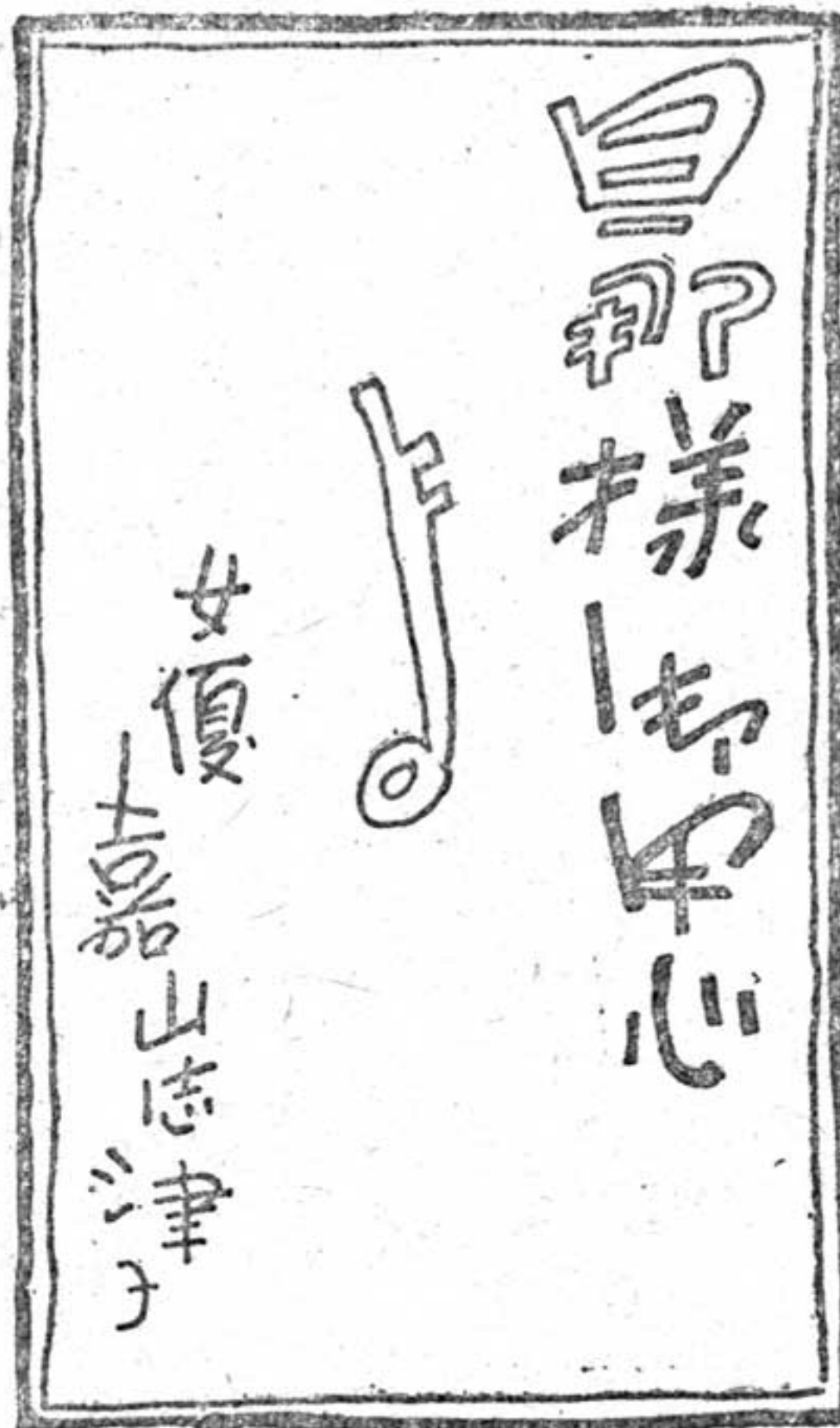
『いや、あいつは、唄を忘れたのさ…』

車をのりつけてほんとに豪勢です。

もう誰がみたつて、何一つ不自由のない幸福の絶頂にある様です。でも、彼女にはたつた一つ不満があつた様です。

それは彼女の夫と云う人が余りぱつとした人じゃなかつたことです。MI子さんはお金のために結婚したんです。何しろ映画界と来た日には、名を出すには一にも金、二にも金ですからね。彼女がいまあんなに有名になつたのも実は、彼女の夫の札ビラによる処が多かつた様です。(夫は有名な実業家ですからね)

MI子さんはお金のためにいやいやながら目をつむつて結婚したんですが、日がたつに従つて、この脂太りの旦那さんが鼻について來ました。何にしろ彼女の職場には、美男子がわんさといふんですから、むりないです。そして近頃、Hと云う若い男優と身も心も許す仲となつてしまいました。



映画人はみんな浮氣もんです。(あら、わたしは別ですわ)

S映画社のMI子さんは、その美貌と才智とでもつて、近頃めきめき賣り

出して來ました。戦後のニューフェイス中ナンバーワンです。

彼女はまるで孔雀の様に、高価な衣服や宝石で着飾つて、撮影所へも高級

もう、彼女はHに夢中です。

彼女は夫の目を盗んでは、あつちこつちHと邪恋に狂つて歩いていきます。このスキヤンダルはわたし達の間では有名ですが、且那さんの耳にはまだ入っていない様です。

ところが或日のこと、田舎の別荘へ夫が出かけた留守中、彼女は大胆にもHを自宅につれこみました。尤も撮影の打合せだとかまかせば女中も怪しみませんからね。

処が彼らが性の遊戯に夢中になつてゐる処へ、突然、急用が出来て且那さんが戻つて来たから、さあ大変です。二人は心臓が凍るほどドキリしましたが、それはそれ、芸能人の感のいいところ。

且那さんがドアに入りかけ様とするといきなり彼女はかけよつていつて、『マア！ あなたよく早く帰つて下さつたこと！ 淋しかったわ……』と甘つたれ声でとびつくが早いのか、

頭をかかえこんで、顔中に接吻の雨をふらすことしばし、且那さんが眼もあけられないで接吻にうたれている間にかのHはドロ棒猫のようにして逃げ出して行つてしまいました。

最近、この話をMI子さん自身の口からきいた時、わたしはびつくりしました。

『大膽ネ、もしも、彼との現場を見られちやつたらどうするのよ。いいわけ

がつかないじゃないの？』

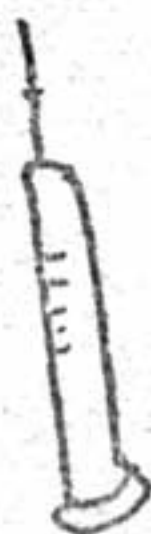
するとMI子さんはケロリとした顔でいいました。

『大丈夫よ。その時は、接吻の場面のおけいとしてたつて云うのよ。浮氣つてスリルがあつて愉快よ。あんたもしなさいよ……ホホ……』

アデヤパアではありませんか。

こんな話は且那さんには話せませんわネ。

女、厨に二つな、若返、法



実業家

野村大梧

諸君は最近流行のオフィス・ワイフなるものを御存知か？

オフィス・ワイフとは何ぞや？

女房ではないことは勿論、と云つて二号とは違ふ、では恋人かパンパンかそれも全然ノーである。しかしお互に肉体的に交渉は充分あると云う代物だ。

一字にしてばらせば、つまり最新型の女秘書乃至は期限付き女房と云おうか。

これぞ時代の尖端をゆく新発見、且つ最も新鮮な、そしてこの上もない、若返り法である。

『女房と戀は新しい程いい』

この文句は甚だ世の女房族に対しては、まことに失礼なる言葉であるが、とかくワイフと云うものは、古ければ古いほどハナにつきやすいもので、と申して二号ではあまりに型にはまつてしまふし、商賣女では功利的で氣分も出ないし、万一病氣になつたら大変だ。

又、恋人になると氣が重い。

そこへいくと、このオフィス・ワイフは魅力百パーセント。それぞれ青春の氣分潑潑とした、いとも新鮮な体臭プンプンして、女事務員の肉体を合意的に、一時妻とするのであるから、うれしいではないか。

期間はお互同志の契約次第で御自由！

そして、期間が切れたらキレイサツパリと赤の他人。そこで、また他の女事務員とでも新らしい契約をむすべばいいわけだ。

ワイフ輪番制つてわけですね。

その間、アパートで同棲してもよし温泉ホテルにシケ込んでも結構。

但し、但しですぞ。諸君よ、一介の平社員ではちと無理かも知れない。まづ上は社長、少くとも、部長課長級でなければとてもじゃないがフトコロが続かない。

しかし一ヶ月五千円彼女に月給を拂

うつもりの御仁なら、まず資格充分。尤も、長期契約でなければ、ちよいとコーヒー代の節約で、二三日は妻となり夫とよばれるうれしい仲になれないこともない。

それとも、五六人で出資して、共同でワイフにするのも一つの術だ。何にしろ相手は会社のオフィス・ガールだ。株式会社はお手のもの。

彼女達は青春をたのしむことに汲々としている。そこがこつちのつけ目と云うもの、月給七八千では洋服も買えない、青春老い易く服また作りがたしとなげく彼女らに、のつけにボンと二万円もやつて、後は月々精々五六千円もやつて、時たま靴の一足も買つてやる位で充分。それとも、一週間目毎に新らしいやつと取りかえるか。

彼女らに如何なる場合でも、体を投げ出して、なんとかしてよおと、ウキウキうめいている。

とても、牛の腦下垂体の手術の比で

はない。

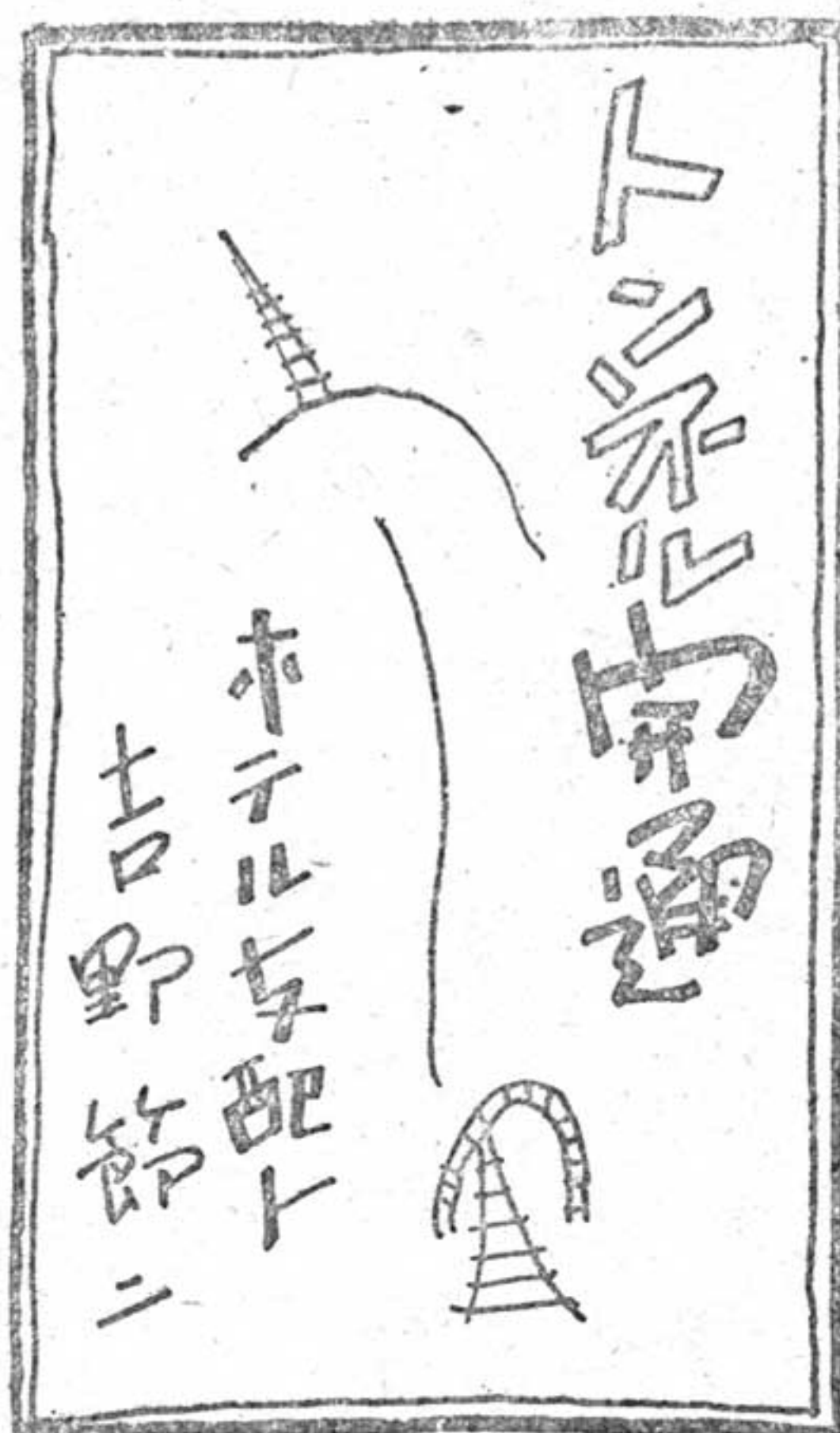
サア、モロモロの重役、社員諸公！

大いに、オフィス・ワイフを作り、

大いに御活躍あらんことを！

四万台諸公への、御進物乃至は接待

用にはどうじやる？……



この話は戦争前のはなしなんです
ウチのホテルで実際にあつたことなん
です。

話つてのはこうなんです。

— M氏は工学士の土木技師だつた。

彼はあるトンネル工事に従事してい
たが、間もなく開通すると云う時に、

上役の令嬢K子嬢と華燭の典をあげ
た。

彼女は評判の美人であつた。

彼らは式が終ると誰もがする様に、

楽しい蜜の様な新婚初夜を静かなH温
泉の私のホテルで過そうという計画だ
つた。

(M氏の父親と私とは旧知の間柄でし
たから私は彼の爲めに最上等の室をあ
けて待つていた)

やがて、車は幸福な新郎新婦をのせ
て、一路H温泉へ——

処が一方、M氏の結婚式に招待され
た学友どもは、振舞い酒に酔つぱらつ
て、三々伍々式場を出るには出たもの
の、このまま冷めたいセンペイ蒲團で
膝小僧と抱き寝する氣にはとてもじや
ないが出来たものじやない。

『畜生ッ、Mの奴、今夜はあの美人令
嬢のむっちりした肌を自由に出来るん
だナア！』

『全く妬けるぞオー。ぐつと抱きしめ
て、ネエ許してくれる？ いやん、い
やんそんなことしちやア……か。チキ
ショウ！』

いづれも学生氣分のぬけない独身者
喫茶店でヤケ酒。
『どうだ一つHをからかつてやる
か？』

『面白い、どうやるんだ?』

連中、車座になつて、額を集めて何やらコソコソばなしを始めた。

『ふふ……Mの奴、さぞびつくりするだろうナア……』

『ナアに、かまうもんか。少しこらしめなきや益々鼻の下が長くなつていかん』

何をたくらんだか、一同いたづらっぽく顔を見合せてニヤニヤ。

さて、話は變つてこちらは新郎新婦ホテルについたのが八時。風呂に入つていよいよ待望のお床入り。胸もドキドキ氣もそぞろ。

時計をみるとはや十時。

ではそろそろ……と服を寢間着ねまぎに着かえてみると、突然、ドアをノックしてボーイが電報をもつてやつて來た。

はて、いま時分電報とは? と開いてみると

『セイテハコトヲシソソシ、ゴチユ

ワイマデ。ユウジンードウ』

M氏は苦笑して破り捨てた。

やがて二人は堅くなつて、ベットに並んで横になつた。そして、ギコチなげに未來の希望を語つたり、いたづら者の友達の噂うわさをきかせたりしていたがそのうちに何んとなく氣分が變になつて來た。

M氏は『さア、遅いからやすみましよう』と枕許のスタンドに手をかけようとした時、又しても、コソコソと控え目なノック。

『チエツ! 何んだ? いま時分……』

M氏、舌打ちした。仕方なくベットから這い出してみると、またもや電報である。

『テキカンミユ、ヨクネラヘ』

流石にむつとした彼はその電報をピリピリと引き裂いて、いきなりベットにもぐりこむとスイッチを切つた。

と、またまたボーイのノック。電報である。

『ゴウチンセシヤ』

彼はボーイに怒鳴つた。

『もう電報はもつてこなくともよろしいッ』

時正に午前一時!

さて、翌朝のこと、新郎新婦が、仲よくはればつたい目をして、恥しげに向い合つて朝食をとつてゐる処へ、ボーイが一束の電報をもつて來た。

それを何氣なく受取つた区子新夫人一番上の一枚をとりあげて開いてよんで見たが、忽ち顔をパツと赤らめてそれを抛り出してしまつた。M氏が急いで拾いあげてよんでみると、

『トンネルブジカイツウヲシユクス』

だがM氏には少しも怒つてゐる様子がなかつた。むしろ嬉しそうな顔であつた。

× ×

後でM氏は私とホールで逢つて、いろいろと世間ばなしの末、例の電報の一件を打明けて大笑いしました。

『偶然つていいですが、奴らのいたづらと本物のトンネル開通の知らせが舞いこむとは思っていませんでしたよ。ワイフが赤面するのもむりありませんネ……しかし、友達つて奴は仲々いいんですネ……』
 そう云つて、M氏はもう一度大声で

笑いました。私はこの話は、なんとなくK子夫人に悪いような気がして、その後だれにも話してありません。しかし、もう公開してもいいでしょう。K氏夫妻の間には、もう中学校を卒業する様な美しいお嬢さんがあるんですから……。



これは私のとつておきの話、つまり、私のロマンス。まだ誰にも話してありません。戦争中のことだか

ら、もう十年にもなります。当時、私は二十三才で、夫は中支で戦死し、空襲もはげしくなりましたの

で、疎開なんかいやだつたけど、泣き泣き東京から、秋田縣の実家へ疎開いたしました。

其処はそりやひどい山の中で、戸数五六十ヶばかりの山村で、夜中にまわりの林で狸の鳴き声なんかきこえるんです。

私は馴れない百姓を手傳いながら、つくづく東京が恋しくて、ちよい／＼東京の空の方をながめてシクシク泣いたものです。

そんな望郷の念が、私と花村青年を結ばせたのかも知れません。

花村青年と云うのは、やつぱり東京から疎開して来た、文学青年で、私の家とは谷向いの地主さんの家におりました。

私達はちよい／＼逢つては東京の生活語り、文学や芸術、絵画などを論じては、山中の徒然をなぐさめ合つてゐる内に、二人の氣持はぐん／＼ひかれていつて、到々最後の一線を越える

仲になつてしまいました。

でも、田舎と云う処はうるさい処でしかも私は名誉ある戦争未亡人ですから、恋愛沙汰を知れようものなら、大問題で忽ち家を追い出されてしまいます。

私は全然の孤独の境遇ですからいま家を出されては野良犬同様いく当ても先ありません。

そこで、私は、裏山の岩場にある土地で『天狗穴』とよんでいる岩穴を愛の巢として秘かに利用することになりました。

私は夕方の方のうす暗い頃、時々時間を打合せては忍びこみ、お互の情熱を暗闇の中で熱烈に発散させて、生きるよろこびにひたつておりました。

都合のいいことには、天狗穴の周囲は晝なを暗い杉木立にかこまれ、誰も気味悪がつてふだんから人つ子一人近づきません。

私達は終いには毎日の様に通いまし

た。

処がある日の夕方のことでした。

私達がいづもの様に生命を燃やすのに夢中になつておりますと、穴の外でがやがやと云う大勢の人の声。

思わず離れて、全身を耳にして外の氣配をうかがつていきますと、どうやら人声は里の子供達だと分りました。

『子供だから大丈夫だ。そのうちに帰るだらう……』

花村はそう囁いてたかをくくつていました。彼らは立去る処か、穴の外からどんどん煙を送りこんで来るので

す。それが猛烈な煙でどうがまんしても中にいられたものではありません。

後で知つたことですが、子供達は番の狸を追いかけて来て、この天狗穴に追

いこんだものと思ひ、狸いぶしをかけたのです。狸いぶしと云うのは、トウガラシを焚くのですから、その煙の苦しいことはお話になりません。

私達はもう恥も外聞もなく、外にと

び出しました。もうどうなつてもいいと云う氣持でした。

処がここにおかしなことがもち上りました。

私達が穴からとび出すと、外の五六人の子供達は一瞬ポカンと私達をみつめておりましたが、突然中の一人が、

『わーッ、狸だア——ッ』

と叫んでかけ出しますと、残りの連中もハッとして、『化けたア——ッ、狸が化けたア——』と悲鳴をあげて、くもの子を散らす様に逃げ出しました。

『しめたッ』と花村は、ほくそ笑んで

『大丈夫だ、狸と間違えてる様だ。よし、もう少し念をおしてやろう』と囁

くと、間道づたいに子供達のにげていく道の先に出て、待ちうけました。や

がてそこえ眞青になつてかけて来た子供達は、目の前に歩いていく花村の姿

にドキリして、何やらコソコソ話合つています。

『どうしたね、何かあつたのか?』

花村が何くわぬ顔でききますと、

『そうだ、やつぱり、さつきの狸だ』

『このおつしやんはここにゐるものナ』

『狸の奴よく化けやがつたナ』

と子供達は感心したり恐わがったり

して、先を争つて先刻の狸の件をはなしました。

『そうか。それは狸であることに間違いないよ。今後は二度と近よるでないよ』

花村はそう云つて、腹でニヤリしました。

何にしろ、山奥の無知の子供です。

里の人達もこの狸の話はすっかり信用して、その後は尙のこと天狗穴に近づこうとするものはありませんでした。さて、それからどうなつたかですつて?

ホホ……、お氣になさる方は、ページをめくつて私の姓をごらん下さい。

ペンとカメラで探る東京賣春地帯

特集

奇線ど域

カメ
ポメ
ジュ
ーラ
タル
ー
ユル

青線区域

企画構成……春日三郎
撮影……駿河泰三
文……秋野実

大東京の黒いドームに
再びネオンの輝きが増
す頃、女狐のように変
装した夜の女達が一人
二人と暗い街角にたた
ずみはじめる。
真紅のルージュにコバ
ルト色のアイシャドウ
が闇夜の中に妖しくう
ごめき青線区域に夜は
静かにふけて行く。



東京
A町

青線区域の全貌

流れるとも見えない東京運河。
表通りの騒音を、遠い潮騒と
聞けば、ふと秋の海の港町を思
い出す薄汚いこのマーケットの
一端に今宵も亦、悪の華は

咲き売春婦にた
ちの嬌笑は打



続く。
 東京に憧れ
 そうして夢を抱
 いて上京した田
 舎娘の墮ち
 行く先は、きつ
 とこの街並の
 どこかに、暗い
 灯をともし、売
 春の宿なのだ

写真説明

- ① 繁昌すも商米通り
- ② エロシヨウの実演現場
- ③ 高級パン助の部屋
- ④ 闇道脱室
- ⑤ 酒場兼売春業地帯
- ⑥ 地下とばく場入口
- ⑦ 暴力女給がたむろする処
- ⑧ スロース横町
- ⑨ 売春婦の部屋
- ⑩ 殺人横町

売春の宿

男も女も、すべての人間がこの
部屋では人間の仮面を振り捨
てる。赤裸々な獣性だけが眼
ざめ本能に支配されて、衝動
的に肉体の遊戯に溺れて行
そこにはすでに、何程の愛情
もなければ徳義心もない。
歓楽の街、青線区域は直接
男と女との肉体の取引
市場なのだ。時代の流れの
急カーブに横たわった死角。
この街こそ
めまぐるしい社会の盲点な
のである。